岳山

第十五年

第三號

山岳

第十五年第三號　大正十年四月發行

目次

甲谷陀より金剛寶土及サンダクフへ　石崎光瑤……一頁
冬の鈴谷山　六鹿一彥……一八
瓜哇メラバブ登山記　武田信……三二

圖版

○トングル附近溪流の結氷……八對頁
○サンダクフ附近の樹氷……一六
○北より望める鈴谷山主峯○山麓より望める鈴谷山……二四
○長次郎谷の雪溪○蓮華岳中腹より針木岳及スバリ岳を望む○針木岳より立山、別山及劍岳を望む○劍岳頂上附近……八〇

○白峯間ノ岳雪田より北岳を望む……英文欄

雜錄

○雛鶏峠追記（武田久吉）○檜前山の近況及支笏湖（竹内亮）○森林とスキーと冬の登山（加納一郎）○女子劔岳登山記（竹内鳳次郎）

雜報

○槍ヶ岳新登山路○淺間登山道改造○北海道山信○淺間山爆發○淺間山爆發調査○淺間山噴出物の研究○淺間復爆發○臺灣の初雲○會員通信

會報

○第十一回小集會記事○第十二回小集會記事○會務報告○新入會員○會員章新番號○會員住所移轉○退會者及死亡者○交換及寄贈圖書○本會規則拔萃○投稿規定○第十四回大會豫告

英文欄

卷末附錄として英文欄を添へたり

甲谷陀より金剛寶土及サンダクフへ

石崎光瑤

一月の九日に孟買から轉じて、甲谷陀に來てから、ダージリンの旅をさしはさんで、二月餘の日子をこゝで暮らして仕舞つた。

甲谷陀に來れば、次ぎに來る可きものはダージリンの旅である、久しく山を見なかつた私、山と云つては去年の十一月にマラッカ海峽を航走した時、遙かの陸地に、際涯も無く連つた椰子の密林の背後に、雨季に起る横雲のたなびく上に四五千尺もあらうかと思はする山々の、折から閃く雷火を浴びながら、其頂きの淡く聳ゆるのを、幾個か送迎したのと、十二月五日に孟買沖のエレファンタ島の丘へ登つた時、白日に霞む西印度山脈を遠く望見した位に止まつて、而もそれ等は何づれも、山岳よりも、丘陵に近い優しいものであるものを霞を隔てゝ花を觀るよりも遙かに遠いはかないものであつたので、こゝからベンガル平原の北端に起る、ダージリン登山鐵道のシリグリ驛へは、尚ほ三百三十哩も隔てゝ居るにもかゝはらず、山懷しさの心は、早や自分は高山の麓へでも到着した旅心地に傾けて仕舞つた。

當然來り迫る可き光榮の日を控へたる心持ちで、私は毎日博物場や、近郊シブプールの植物園や、動物園等で忙はしく暮らして居た。それは丁度、故國で謂ふならば上高地迄身を運んで、眼前に群る樂しい登山を企てながら森林沼澤に、美しい花をあさつて居ると同じ喜びの動搖を包藏し滿足の安住の下に動いてゐる樣なものであつた。あの幽邃な、折にはフーグリ河から鰐魚の來り遊ぶてふ、シブプールの森、熱帶の女主とでも云ひたい極樂鳥の謳ふ宏壯な禽獸室を設けた動物園、更に印度古代民

族の驚く可き信仰生活より營まれた石刻をはじめとして大陸の萬象を集めた博物場、中にも其石刻類に當てられた數室と反對に向き合つた鑛石屬の數室には數限りも無い珍奇なる礦石と對照して壁間に掲げられた幾面かの大扁額に、雪と雲の美しいクマウンヒマラヤや、怪しい迄白いシッキム國の山々の寫眞などを眺めては、迚も平氣で濟して居られたものではない。

乾燥期の印度大陸に、爛々として輝く太陽と星の光りの他に一點の雲影をも認めない、赤裸々なる眩しい熾烈旺盛なる自然に、暫し馴致された自分の眼には、是等の峰々は、迚も現世のものとは受取れぬ程、神祕であり、妖艶秀麗なものであつた。氷河の上を走る白雲、九天に入る峻峰、とり〳〵の中にもシッキム國の、二萬二千五百尺のシニオルチュの前には、幾度足を停めたか。

古代印度の民族が、心靈の對象として、宗教も、藝術も、こゝに胚胎した絶大神祕なる是等の大山崇岳は、異人種の訪問を受け初めてより以來、單なる鑛石の一團として取扱はれ、碎き劈れたる其髪膚の一片をば、貝殼と同じ樣に押し並べる人の兒のいたづらをも、さながら乳を授くる慈母の如くに微笑みながら見下してゐる。

私は博物場へ來ると、いつでも此扁額の前と石刻室で時を移すに殆んどきめて居た。石刻は鹿野苑から運んだ阿育王朝の有名な獅子の柱頭をはじめとして、バルフートの石欄や諸種の彫像等、印度各年代に亘る作品を網羅してあつた。よくも集めたと思ふほど豐富によせられてあつた。併し、曩にアジャンタ、エルーラ、カリー、エレファンタ等の窟院を訪問して來た後では、こゝに部分的な技巧や形式などは味ひ得るとしても、迚も窟院で受くる樣な、第一義的な、大きな靈感に打たれる事は甚だ薄かつた。タプティ河の上流ワグホラ急流の飛瀑の音を聽きながら彫刻、繪畫、建築の三藝術が其神秘なる幽境に美しいシンフォニーを成すアジャンタや、ロザの丘陵に營まれた佛教に屬する南部十三殿、婆羅門教に屬する中部十六殿、闍延那教に屬する北部五殿を合して三十三を數へ、延長一哩四分

一に亘りて莊嚴を極めたエルーラ窟院の偉觀を想へば、こゝに並べられた作品に接すれば、太古の森林を贊したあとに植物學者の小さき胴籃より取り出された、植物の幾莖を眺むる程の感銘しか惹かなかつた。一個に就いて眺むるも、カリ寺院に見る如き乳房を刺さば血の迸るかと怪まるゝ、官能的な神品もなく、毛髮悚然、敬虔襟を正す崇高なる作品にも乏しく、エレファンタの壁面を飾る如き自由なる變化の流露せしものも見ず、甚だ物足りなさを感ずるものであつた。ガンダラ彫刻の一室なども尊いと云ふよりも、寧ろ面白いものであつた。釋尊の事蹟を細く刻んだ中に、出城の太子に別れを悲しむ愛馬が、膝を地に折り太子の履に接吻してるのや、其他に叙情的な面白いものが多かつた。屢ゝ通つた中に、圖書館長のチャンドラ氏とも親しくなつて、特別室にある澤山の小畫をも見た。こゝにある作品には皇室の什寶であつた印章も捺されてあり、是等の作者は、生前に於ては、アクバー大帝や、其子のジャハンギル皇帝から、親友として待遇された程、高い名譽を荷つた人々であるが、多くは徒らに精緻をのみ競ひ、只中古の王族達の挿話に於ける、管絃、狩獵、船遊等の狀態を、精緻を極めて記號的に覗ひ得る以外タゴール氏の畫室で見たカウダストの描いた「聖なる牧牛人」の樣な種類のものは殆んど無く、大した藝術の尊さを求むる事は能きなかつた。チャンドラ氏は私の花鳥畫をつくる事を知て、是れ等の殆んど人物畫によつて滿された作品の中に、只一人の花鳥畫家の作つた袖黑鶴、七面鳥、巴鴨などが描かれた前に私を導かれた。夫等の畫の中には數年前、ハベル氏の著書中に挿まれたのを見て、不勘賞讃をはらつた記憶を存する畫で、こゝに偶然其原畫に邂逅した喜びは可なり大きかつた。そして是等の花鳥畫の一見幼稚な樣に感ずる背景は、印度の野外の印象を最も自然的に表現されたものである事を、聯合諸州に旅して後知る事を得た。

參考室に、南洋の手藝品の積み上げてある裡に爪哇島のボロボドールの釋尊一代の事蹟を現はした石刻を、前の館長かゞ自から寫したと云ふ大寫眞帳は實に立派であつた、如何にしても印度では彫刻

が一番いゝと思つた。

私は博物館よりも、植物園の方に多く日を費した。植物園はローヤサクラロードの二二五の旅寓から、殆んど八哩を隔てたシブプール村にあつた。ハウラとカルカッタを隔つるフーグリ河は、恒河の一支流であるが、殆んど萬噸の巨舶を河口より八十哩のこゝ迄遡らしめて居た。其の洋々たる大河には只一流の舟橋が、カルカッタとハウラとの大動脈となつて、多くの群集を循環して居るのだ。私は毎日此長橋を通過した。水牛の運搬車、數百頭の群羊、雜多な列に卷き込まれて、快速なるモートルも此橋では焦々しげに警笛を鳴らすばかりで、鈍い群集に伍して、自然的に排出さるゝを待たなければならなかつた。橋を過ぎてから、血の滴る羊を嚙く不愉快な土人街を過ぎて仕舞へば、古々椰子や、綿花木の繁つた村落を辿つて、更に一歩を植物園内に入るれば、天清く樹旺んに、亭々たる巨木、欝勃の椰子林、天に接し、芳草異芬地に舗さて、塵寰を隔絶したる樂園の雰圍氣は、隨處に深山幽谷の氣をそゝる。紀元千七百八十六年に、森林沼澤の自然の一角を直ちにとつて、植物園たらしめた廣袤三十萬坪の此苑内はバルメラ通路（通路は嘗て園長たりし人達の名を冠せられてあつた）の扇椰子オレヲドックス通路の大王椰子其の他二三の普木が、人爲的に均齊美を調へてる外全く分類的區劃を施さず、自然の狀態に錯綜繁茂した植物は自由に大小二十有餘の池沼を、或はその紅の袂に掩ひ、或は銀簪を其の鏡面に倒影して居る。何等の制限を受る事なき熱帶の植物の景觀は、見るからに旺盛に、壯大に、重厚に、絢爛であつた、菩提樹の老幹に蘭類の夥しく寄生してるのもあつた。ベンガル菩提樹の高い梢と入り亂れて、雲井椰子の婆娑として榮えてるのもあつた。トムソン通路の寶冠木の林に、珊瑚色の花が咲き出してからは、日毎に葉間を彩る花の數增す毎に幾日も續いて此森に來た。それから、アングルソン通路から、朝日葛や、薄雪葛の、穹窿を掩ふた日陰室に入つて、扁栢類羊齒類の咽せる樣な綠の暗の底に、星の如く閃く、夥しい蘭花の間にも、日を重ねた。繪具をとく水を酌みに、

傍の池へ出ずるといつも定つた樣に、紅花の睡蓮の上にあつて、廣東にも產する富財鳥が、白綠色の、纖細な翼を飜へして飛んで居た。

ペラデニヤ、ピナン等の植物園のそれよりも、一層市街を離れた此の園には、折々に遠來の觀光客が驅るモートルの影を、木の間に隱見するが其の他に減多に人は訪ねなかつた。名も知らぬ鸚哥の類が梢を傳ふのを、無心に其のあとに隨ふて森を徜徉した事もあつた。折々はフーグリ河から鰐魚の來つて池に泳ぐ事さへあると云ふ。森の中には、季節風の交代期に起る颶風の、ベンガル灣より襲ふ衝路に當る地方の、年々被る犧牲として倒壞した巨木が無殘な姿を狼籍と重ねあつてゐた。一團の縞栗鼠が此殘骸に棲んで飛び廻つて居るのが、いかにも寂だつた。深山に等しい此園內では、一杯の曹達水をも得る事の出來ない不自由さを忍ばなくてはならなかつた。私は寫生に疲るゝ時定つた樣に、大榕樹の下に憩ふては、奇異なる生活力をもつた此樹が作つた氣根の森に見入りながら、携へた密柑の熱く蒸れた樣な滴りを吸ふた。此老榕樹は此の園の最も誇りとする名木であつた其の奇異なる生活狀態より成つた此の木の地上を領した延長に於て、恐らく世界に其の比を求むる事は能さないであらう。周圍五十四尺の主幹から、蜘蛛の巢の如く八方へ擴つた梢の梁は夫より無數の氣根を垂れて地上に達しては新たなる生活力を加重して、梁を養ひ枝を擴げ、氣根の地上に達して、樹幹の形態を形づくるもの實に六百を超へ、枝幹の識別に苦しむものさへ二三に止まらず纏絡する葛の類、其他の寄生植物是を掩ひ、宛然一群の森林を形成してゐた梢は今丁度楠の樣に嫩葉新綠を吐き、古葉は片々として地上に積つて居た。そして梢に當つて、姿は見せず、佗しい音を立てる鳥が頻りに啼いた。透徹した夕に近い空に、正しい間隔を保つて、定つた律呂に鳴く此の鳥の音は、萬里の外の遊子の身に、故國の砧を聽く思ひをそゝり乍ら、餘韻を森に響かせて居た。夕の空が、池の面に椰子の肩を越して覗く頃ともなり、一日の寫生を片付けて、木立の間を踏み分けて歸る心よさは、遠い旅に伴ふ感念を忘るゝば

かりの、親しい氣分に自分を包んで、日日に此の地に磁石の様に自分を誘ひ寄せた。

花木の破蕾を持つ間には、動物園へよく通つた中で一番好きなるは極樂鳥であつた。此の鳥は僅か三世紀の前には、歐洲の學者達が、偶々得たる無足の剝製を見て、地上に下る事なき雲上の仙禽なりとの異說の下に、無足風鳥との學名をさへ冠せられた深秘な禽であつた。三十餘種に達する彼等の種屬は、主としてニューギニヤ、セレベス、チモール、アルー、バタンタ等の蠻人の森林に棲んで居るのだ。私は幾日も極樂鳥の館内に三脚を下して寫して居た。室の充分の廣闊さと、彼等の鄕土に適つた恩惠に、凡ての鳥獸は天眞を發輝して、自由に動いてる中にも、とりわけ極樂鳥は、ゆるやかな檻の裡に、天與の美しさを整へて居た。數十羽の鸚鵡類が、一區の中に、群り翱翔して居るに比して大極樂鳥は　優れて廣く高い一室を只一羽にて、占有して居た。傍の室に飼はれたる、數羽の紅極樂鳥の、不思議な綠色の毛冠を立て嘴を鳴しては、絕えず繭蛾の様に翼を顫はせながら、緋色の脇毛を垂れて、蕃瓜樹の枝から枝に、芭蕉の葉蔭を潛り飛ぶ輕捷さに比して、彼れは女王の様な落ち付きを持つて居た。朝の内、彼はよく、見上ぐる梁上にとまつて居たが、其の中幾度となく圈を描いて下りて來、噴水の迸しる築山へ身を寄せて、飛沫を浴びては、彼れの翼を梳つて居た。彼はまるで恐怖と云ふものを知らないもの丶如くよく彼れの濃綠色の金屬性に煌めく天鵞絨の様な胸元を自分の筆が觸れ得る所まで近かよらせたり、又或時は、地上に近い止り木に身を支へて、豐麗な飾毛を微風に弄らせながら鳳凰の様に翼を張り、飾り毛を一ぱいに擴げつ丶姿態を緊張させて、ハタ〳〵と羽搏きした。それは此の鳥の有する、息をもつかせぬ美しい一種の舞踏であつた。孔雀のそれの様に傲慢でなく青鸞のそれの様に奇矯でなく、彼れが高き梁上に轉々として、此の舞踏を試みながら、金絲銀絲を束ねた様な飾り毛を、靜かに垂下するさまはさながら、極光を想はする神々しさであつた。彼れの聲も亦姿に相應しい仙鳥の音色をもつて居た。彼れが故山の森深く、此天與の霓裳羽衣を、靜かに異香薰ずる蘭

花咲く、梢の間に懸くる時彼れの滅亡を齎らす吹矢を隱した、獰惡なる蠻人が下を過ぎても、彼れの淨よい頭には、醜惡な人間や、慘虐な毒蛇を心にもとめず、謳つてゐるであらう、惡魚の潜む波の深間に類ひ稀れなデリケートな細鱗が泳ぐと同じ樣に。

室を出でゝ、遙かに隔つた爬虫類の石室に入つても、長く連續した猛獸檻に移つても、彼れの放つ高い朗音は、凡百の雜音と全く離れて、高く澄んで自分の耳に送られた。

ダージリン

雪山の麓を銷すネパール、ブータンの兩國に挾まりて、バンティム（二二〇二〇呎）シニオルチュ（二二五〇〇呎）ゴミオモ（二二四三〇呎）カンチンジャウ（二二七〇〇呎）等の諸峻嶺を、其領内に攢簇せしめ、千古の氷河と萬疊の雲霧と、凝つて咲き出づる四十幾種の石楠の、芳芬を漂はすシッキム王國に旅する事は、順禮のプログラムに加へた樂しみの一つであつたが、英官憲の猜疑の眼に入國は許されず、大谷尊由師より王に送られた紹介も、ダース氏から祕書官へ充てた斡旋も、過敏な官憲の手に葬られて仕舞つた。

こゝの山國王は我國へ來朝して、水車を興がつて模型を彼れの鄕土へ齎した事もあつた、彼れは又、劒橋の大學に遊んだ若い國王であつた、相會ふ機會は、心なき雲に遮られた、或はチェン河を溯つて、チオロモ湖からカンチンジャウを一周したいと思つたが、シッキムの峽中を旅して、虐殺され行衞を失つた幾組かの遭難者が、政府の仕事に落ちたのだと云ふ流説を聽いて、誤られた犧牲を進んで受くる愚さを刪除する事とした、實際彼等は其頃輕井澤に起つた宣敎師の橫死を、日本の政府の仕事だと考へてる程、陰險であつた。

熱帶燎亂の花の寫生の間から、山に戀して雪山の懷ダージリンに着いたのは、一月十九日の午後一

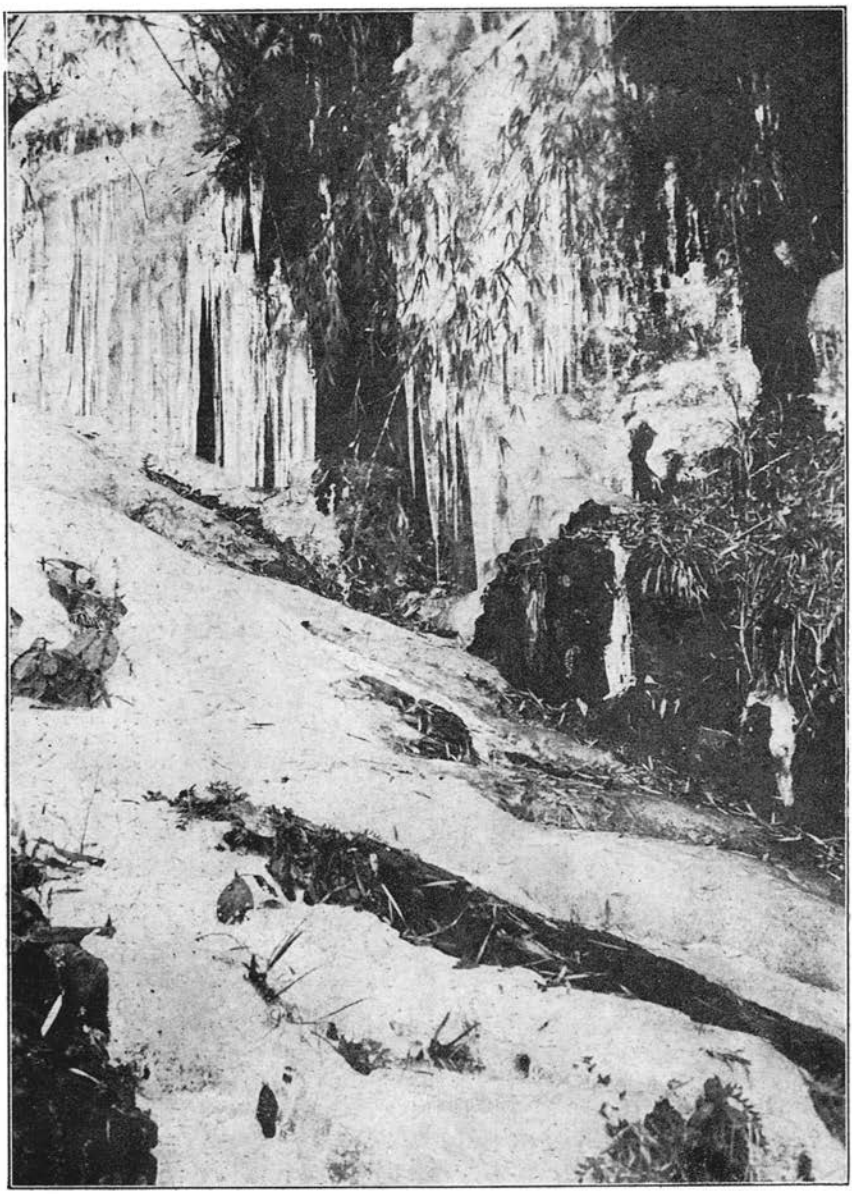
時過ぎであつた、昨日の夕四時半にカルカッタのシャルダ驛を出たダージリンメールで、日沒後に恒河の長橋を走つて、九時過ぎにサンタハラで乘かへ、今朝の六時に、ベンガル平原の北端、ヒマラヤ登山の起點シリグリの驛に着いて、曉の夢を醒した。カルカッタを遠ざかつて僅に三百三十哩に過ぎないが、山麓の氣溫は著しく冷かに、近村一帶に立て罩めた朝霧の裡に、夕顏の花白く農家の軒に咲き殘れるを見た。

こゝに仕立てられたデリケートな登山列車は、すぐに蓊勃たる喬木と、連綿たる纏絡植物との、執拗なる生存の爭ひに釀さるゝ、晝も尙黃昏の氣立ち迷ふ太古の森を貫いて行く。森の爭ひが、少し途ぎれた空の透き間には菩提樹も見えた。榕樹の類ひも見えた。そして夥しい天南星科植物と共に、絲の樣に長き氣根を、見上ぐる梢から、叢の裡へと垂下して居た。ループを描き、レバーシングを繰返し、奄々として喘ぐ列車が、闊葉樹林を脫した沿線には、四季の花を一團とした樣に、露兜樹や芭蕉に猛々木が交つて、其の中に珍らしいのは、日本に於けると同じ桃花が、咲き誇つた枝から、淡紅色の葩を、列車の窓へ送つた事であつた。

列車が次第に山上に移るにつれ、山岳の高度が垂直的に植物の分布を染め分けると同じ樣に、民族と凡てのローカルカラを一變して、曲玉に似た頸飾を裝つた冬裝束の、亞細亞系の女苦力の風俗などが、珍らしく眺められた。

幾つもの山驛を經てから、闊く見渡す杉の峽谷を流るゝチスタ河の奔流を、雲の絕間に瞰下し乍ら、終には雲の往來の激しい只白い世界を貫て行く。白雲の搖籃に包まれて、溪の囁きと火輪のあがきを聽き乍ら、熱帶の熾烈な光の巷から遁れた身は、ともすれば眠りに誘はれつゝダージリンに着た。

七千五百尺のダージリン市街の氣候は、今丁度故國の一二月と大差なく、寒いながらに霞罩めて近い山々さへ薄紫に隈どられて、四十五哩を隔つるヒマラヤの山谷には限も知らぬ霞の幄に、山脈は那



トンゲルル附近溪流の結氷　　石崎光瑤氏撮影

處にそれと、想像する事も能きなかつた。そして折々去來する白雲が老杉の翠と赭い屋根の美しい山上市街を呑吐した。

セントラルホテルに投宿して翌曉の、三時頃でもあつたらう、ネパール生れのボーイが、扉の外へ來て、もう馬が來たと告げて呉れた。一體タイガヒルは、ダージリンに來た人の定まつた樣に行くところだ、そして又定まつた樣に歩かない、サンダクフへ行く許可證が下りて來れば、タイガヒルなどは如何でもよい。標高にしてからが、ダージリンとは僅かの相違だし、おまけに、いくらかまだ、當のヒマラヤとは遠くなる譯だからと、恐ろしく輕く見てゐたが、月並なところも一通りは尊重しやうと思ひ返して、昨夜ホテルのボーイに命じて置いたのだ、其時彼れは、馬にするか轎にするかと訊ねた。轎は四人の苦力が御輿の樣にかつぐのだそうな。歩るきたいのに、山路をかつがれて行くなどは、以ての外だと云ふ肝癪玉が、つひ不識の間に、馬にすると答へて仕まつたのであつた。一體印度では歩るくのは階級の低い人として凡て命令を肯かなくなる習慣を有してゐる。

熱帶から脱れ來つて、昨日から故國の正月にさも似た氣候に入つて、加ふるに、靜寂な山上市街の雰圍氣は、自分の心をば、妙に落ち付いた、休養的氣分に誘ひ入れて、今朝は譯も無く、眠くてたまらなかつた。一杯の紅茶に目を覺して、用意を整へ、立出づると、夜目にもしるく、一頭の白馬が牽れてあつた。亂暴にも馬術の素養も無い身で、闇の中を白馬に跨つて立ち出でた。俄仕立ての此騎馬姿は、京の平安宮の時代祭りの行列に見る、附け髯陣羽織の野郎尊大な假裝騎馬武者の光景よりも、もつと奇妙なるものであつたに違ひない。折からの烏羽玉の闇が、是れを知らしめたのは、自分と白馬とのみに止めて呉れたのこそ幸福であつた。

途は山上市街の一端を通過しつゝ、老杉の茂つた坦々とした廣場を過ぎたり、脚下に溪の音を聽く急斜なる細徑をも過ぎた。今や夢濃かなる靜けきダージリン市街は燦々たる電燈の光を樹間に瞬かせ

て、淡き水蒸氣に星の光を隱した此夜更けには、銀河を地上に移したかの如くに、冷かなる光を放つて居る。此燈光を見捨てゝ左へ細徑を辿り、下り盡したところに、昨日經由した、ダージリン登山鐵道の軌道を、踏み切る時に、ランタンの光影に照らし見て、其優しい軌道に更に驚かされた。此村驛を横ぎつて追々とタイガヒルに近づいて行く。ロードデンドロンの老幹が枇杷の樹の樣に夜目にも、蓊鬱と眺められる。霧藻や其他の蘚苔植物が、冬枯れの梢より亂れかゝつて、ふら〳〵と曉風に搖れながら、冷かな戰きを時に頰に傳ゆる事さへあつた。

寒氣は却々に激しかつた。馬背に身を委した自分は羊腸たる坂路を意に介しなかつたが、甲谷陀から伴れたボーイは、訴へる樣な聲をあとよりかけたのに、如何した事かと立ち止まると息切れのする苦しさを極度に說いて死ぬる樣な表情をして聲を絞つて居た。實際それは見兼ぬる程切なさそうであつた。

丘の上に到着した頃は、濛々たる雲が谷から起つて、迚も、ヒマラヤは絶望らしく見えた。太陽の現はれる頃少しの雲の切間にも、片鱗をなと現はしたならばと、寫眞器を据付けて、小さなバンガローの爐邊に隱れて火を焚きながら待つたが、遂に晴れなかつた。

差し出た雲よ、今日妨ぐるとも、サンダクフ數日の旅にヒマラヤの山容には心ゆく迄親しむものにと、輕い失望をすら感ぜずに、下山の途に就いた。明けはなれた天地に今迄祕められし、雜木林の奇景を賞觀しながら、歸途を急いだ。曩の鐵道線路を越して、ダージリン市街に通ずる半腹の急斜路を半ば登つた時に、白馬は何に驚いたか、見ても底氣味のわるい深溪を控ゆる此坂路を驀然として狂奔し出した。人馬諸共墮落などは、實際に味つて見る氣にはなれないので、疾走せる馬上より、思ひ切つたる飛び下りの放れ業を敢行したばかりに、掌の一部にロードデンドロンの花瓣の樣な色を呈したに止まる事を得た。今朝息切れをして死にそうな顏のボーイは、興ある事に眺めたに違ひない。飛ん

だ失敗にボーイの手前頗る器量を下げてホテルへ着後、晝飯を濟してすぐと植物園へ寫生に行つた。園には若木ではあるが、ロードデンドロンの種類は可なり植ゑられてあつた。ダルハウシイ、グランドウイツト、エーゲツオルシー、アルボレウム、フアルボレウム、シリアトム等を見たが、春寒に傲る是等の花も、未だ何つれも、芳唇を開かず其美しさを知るよしもなかつた。流石に冬とて花は他にも見出す事が能きなかつた。春の魁を告ぐるマクノリアカムヘリーも、無數の蕾を枝頭に連ねながら、未だ固く、只一株の朱色の寒木瓜の開花に園の彩りを讓つて居た。低い流れに臨んで簇生した群青色の幹をもつた篠竹が珍らしかつた。

木生ひ羊齒の美しい集りを見て、私は上の徑を辿つて、ロードデンドロンの豐滿な葉並を寫生に著手した。我國の山中に咲く淡紅色の石楠花の葉に比すれば、丁度芍藥の葉と牡丹の葉の差程の懸隔があつた。私は何づれは是等の開花を、迦濕密羅の旅に於て、見る事が能きるとの期待を有して居たので蕾の固い此葉ばかりの石楠をも其葉の面白さに牽引されて、落ち付きはらつて寫生に熱中して居た。彼方の森の透間より、薄い霧が流れて來た。木々の葉裏を巧みに拔けて、しづ〳〵と押しよせて來るのが遠く眺められた。遙の樹々の梢を見上げると、もうそれ等は早や、次第にかすかに、霧の裡へ包まれそめて居た。寒も急に身に泌みて來たので、寫生を片付けてホテルへ歸つて來た。

ダージリンのラッサビラには、前年我國に來朝した、西藏遠征の碩學チャンドラダース氏の子息が居る筈なので、訪ねやうと思つたが、折から訪ねて來られた青木松居の兩師に聞くと、此七日に、バアマのチッタゴンでダース氏が逝去したので、其訃に趣いて不在だと知つたので、出かける事をやめにした。ダース氏が日本へ來朝したのは、其前々年の夏の終りで、東京の旅寓に訪ふた後其秋の末に京都へ觀光に來た時には、父子共に、自分の蝸廬に滯留して居た。其時に於てもダース老は、ひどく羸瘠して毎朝定まつて沐浴する時には鷺の樣な脚どりで、あるいてるのが痛々しい位であつた。息は

至つての孝養家で、細心の注意で、定省の勞を盡して居た。あの老軀では餘り、長壽は保たれまいとは思つたが、當時より一年半を經た今日萬里の外に、相會はんとして、此訃を知つてそゞろに懷舊の念に堪へぬものがあつた。窓外を走る白雲を眺めつゝこんな事柄を考へながら、暮るゝに間があるので、ストーブの火を搔き立てゝ、忘れぬ間にと、スケッチに傳彩を施したり、家信を書いたりした。

此夕ダージリン縣の政務官から、サンダクフへの旅行券が下附されて來た、サンダクフは、ダージリンからネパールの國境を劃する山稜を、四十哩雪山に近接し、標高もダージリンよりは更に四千四百三十呎を抜き、石楠の王花ダルハウシの森を過ぎて、雪山の偉容に親しむ事に於て、最も幽邃なる山地であつた。西藏へ遠征を試みた幾人かの我宗教家には、密に此峻嶺を走つたものもあつた。風聲鶴唳にも氣を勞らす英國の官憲は、容易にこゝに異國人を通さなかつた。カルカッタの我總領事の人人が可なり長い時日を交渉に費したが遂に曖昧に歸したのに比し、曩に大谷光瑞猊下がトングルに迄旅行されたのと、自分のサンダクフ迄の許可證は、殆んど異數だと云ふ事であつた。旅行券の下りたのには、丁度長い西藏の旅から出でゝ、トンスンに假寓を定めて、其整理に沒頭して居られた青木文敎師の機智の下に、願書に森林や雪の山脈を寫す畫家にして、何日に何處を通過し云々と明記された鮮さによつて、官憲も意外に正しい解釋を下したからであつた。

大正元年九月に、ネパールからウルンゾンゴラ、及シガッエを經由して、翌二年二月ラッサに着き、三年の滯城の後、キャンツエ、チュンビ溪道を經由された同氏は此地方百般の民俗習慣に通曉され、同じ家に、梵語の研究に從つて居られた松尾善英師と共に、自分の山地旅行に就いて、懇切な注意や、斡旋を拂はれて、自分は幸福に旅立つ準備を整へ得た。

ダージリンよりトングルへ

旅立つ朝、茶を運んだボーイに扉を叩かれて、ベランダに出た刹那、キンチンジャンガとジャンヌウが研ぎ出した様に碧瑠璃の空に浮んで居た。すぐと女の苦力を一人つれて、近いオブザベトリーヒルに登つて行つた。

ヒマラヤ雪峰は、春の霞に、裾の翠を空の碧りと融け合はせ、さながら海洋の只中に浮んだ大氷山の様に、天に連つて居た。何れは是等の山々には、數日の後に呎尺し得る再會の喜びを包みつゝ、ヒルの中央に旗垣めぐらした禮拜所に、西藏の僧侶の讀經の樣を眺めて、ホテルに歸つた。

料理人と馬夫とボーイと三人の女苦力とを纏めて十時にホテルを立ち出でた、この國では勞働は凡て女が負擔してゐるのである。階級制度を固守する此の國を旅行するには、是れは節約した一行であつた。

今日の途は、概ね八九千尺より一萬尺の間にあるを以て、白雲は常に一行を包圍して、時折重々しく霧藻や蘚苔類に、掩はれ盡した異形な梢が、海底の植物を見る樣に森の一部を現はす事もあつた。森の中には珍らしくも我國で專ら花戸にのみよつて取扱はるゝ瑞香花の淡紅純白二種の花が、いとも匂やかに螺鈿の如くに、浮き立つて咲きみちて居た。端無くも此花の鄕土にめぐり來た一種の喜びを懷きながら、辿り行く自分に先つて、一羽の瑠璃ヒタキがミチオシへの樣に路傍の石から石へ、我等を導く樣に霧の中を移つて行く。

終日の沈默を破つて眞白な濃霧の中から、突然鷲鳥の高い叫びに迎えられ、スキャポクリと云ふ村市に入つた事を知つた。霧の透間に窺ふに、こゝはバザーが開かれて、近鄕の人々の集るところらしかつた、そこから今夜泊るジャウボクリはすぐであつた。ジャウボクリのバンガローに着いた時も、一面の霧であつたが沮洳の池がある事と、森々たる若樹に圍まれた地である事は、苦の香りや何かによつても其れと察せられた。地圖には一萬一百尺と示すが、祖國のそれに比し緯度の相違は此高度に於ても

猶壯大なる闊葉樹をつくつて居た。

此夜瑞香花の暗香がバンガローの窓より漂ひ入つて、羈旅の夢は香しかつた。有明の月に窓を照らされて雪かと惑はされては、又眠りに入つた。

明くれば今日も亦、霧の旅行を續けてトングルに向つた。とある小村落から、直ちに萬仞の谷を下りて行く。久しく焦土を踏んだ脚底に、柔き落葉を踏み、森林の香りを聽き、中和な萬象が、さながら自分を故山の幻覺に導いたのであつた。

十時頃に下り盡した藥研の底の如き窮谷に介在せるマネバジャンゲ村を過ぎた。左の人家はネパール領で、樹下に機を織て居る人が、好奇の視線を、自分の一行に注いでゐた。

左の峽間に散在するネパールの村を看下しながら、急斜面を上り行く、一行中の三人の女苦力は凡て牛の如く强靭な力を有して、如何なる急坂にも、彼等は行厨を認むる他には憩ふ事を知らなかつた。

十二時にチッテリャの民家に着いた。曠茫たる空山の一斜面に點在する僅か二戸の山村、家あれば必ず樹つる幾本の、色褪せし白き幟は、吹き揚ぐる霧の中に、ハタ〳〵と翻つて、細く顫ふ山羊の聲が、斷續して、行人の腸を斷つ。霧に明けて霧に暮るゝ人の生活の寂しさよ。走る霧の裡に茶を喫してこゝを立ち出でた。彌が上に霧を驅る山風に、オーバの裾を翻へして攀ぢて行く。

森林と雲霧の變化の美しさに、足を停むる事幾度とも知れず、ロードデンドロンダルハウシーの大樹、我國の山毛欅の老樹を凌ぎ、蒼龍の如き其の巨幹を蟠屈して、天空を塞ぎ、深谿に懸り、蘚苔の類狼籍として纏絡し、雪山の靈氣萬谿に滿ち、山神鍾愛の幽境を辿る心地は又なく神々しさに蔽はれた、名も知らぬ山鳥が幾種となく出沒した。

トングルに近づく二哩許のところより、呼吸に苦しさを覺えたが、林間の景象を賞しつゝ敢て行路を

急がぬ身には、さして氣にもならなかつた。五時にトングルのバンガローに入つた。附近は既に殘雪斑斑として、軒の涓滴は氷柱をかけ、沍寒身を刺し、ロードデンドロンの枝を焚きて暖を取つた。五體の安靜を待つて、高山の頭痛が烈しく襲つて來た。外には凄じい西風が怒號して萬木の梢を鳴らして居た。

トングルよりサンダクフへ

朝窓から眺めると、キンチンジャンガが鋭く光つて居たが、一面の雲海が程も無く、近い山々に湧き立ち騰つて展望を失つた。

風和らぐを待ち、十時に出發してサンダクフに向つた。二千尺餘りも下つて、森林へ入らんとして振返た時には堡砦の樣なトングルの高地はもう見えなかつた。リゾラント河の響にや、脚下白雲の底に潺湲の聲を聞くが、自分の横ぎる細かき溪々の懸瀑は、凡て氷結して一齊に銀簾をかけて居た。

森林を出て、稍廣闊なる高原に出で十二時頃馬背の如きネバールの國境を傳つて行く。霧の勢力は、此時最も激しく增大して、ネバールの谷から奔騰し來る霧と、北シッキムより驀進し來る霧と此の山稜に相擊ち相亂れて、旋風の樣に縺れ合ひ、押し合つて天に漲る霧の深みに沒して行く、三時に小さい池のほとりを過ぎて、霧の裡に毛の延びるに任せた三頭の野馬が、淡く輪廓を出沒させた。こゝはカラポクリの民家であつた。ポクリは池の意であつた。チッテリヤよりも更に寥々として、民家は實に一戶に過ぎなかつた。傍らに一面の灰燼の中に斷礎の埋もれたのがあつた。

苦力等の食事を待つ間に自分は、人手を集む可きよすがも無い此山民の一族が、猛る山風に狂ふ大紅蓮の、炎々として山中の霧に反映するに委ねて居た祝融の禍を被つた人達の、悲慘な心もちと悽絶な光焰の閃めきとを、勝手に想像して居た。

こゝからネバールの間道をとれば、四哩にしてサンダクフに達すると云ふ山民の言を採りて、三時

四十分にこゝを去つた。

何時の間にか自分の一行に見慣れぬ男が一人加はつて居た。彼れは二尺許の山刀を佩いて、手に半弓を携えて居た。これは御叮嚀にも、自分の擧動を監視する爲めに尾行した警吏であつた。彼れは自然を賞讃して思はず放つ自分の歎聲に和して、よく奇聲を發して哄笑した。吏臭を帶びぬ好漢は、何等の感興を傷ける事は無かつた。

途は次第に嶮峻になつて、雲霧の往來は益ゝ烈しく、一行を白盡の天地に葬り去らん勢を示した。山路の巖も草も樹氷をつけて、天地は更に白さを增した、歩一歩長鎗の穗を思はする其氷は、幾寸に餘つて、一齊に尾花の靡くが如くに烈風に肯く妖麗さは、殆んど怪奇に近い美しさであつた。

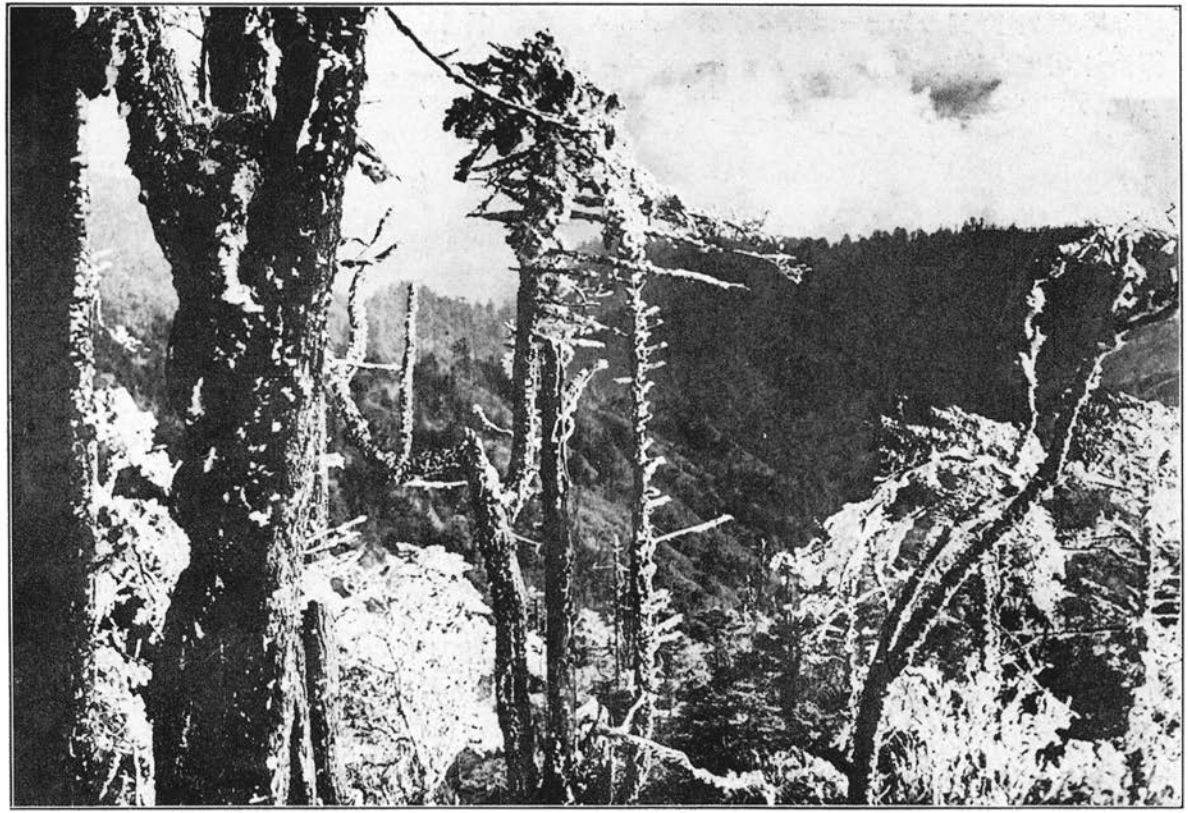
霧に遮られ、氷に掩はれ、屢ゝ路を失はんとしては、大聲呼應して進んで行く。霧愈深く崖益ゝ急に、遂に馬は屢ゝ氷に跪き進む事を得ずして、馬夫は他の途へ引返した。苦力の頭髮は凡て氷を結んで、相觸れて憂々として鳴り、打ち振れるステッキにも、無數の樹氷針の如くに生ぜるを見た。

滿山の闊葉樹林は、何時か既に嚴肅なる針葉樹林と代つて居た、風梢に鳴り、樹枝の氷をつけ碎けて山腹に舞ふもの、白鷺の亂れ翔るに髣髴した。

此先迄は折々に上層の濃霧を透して、一抹の淡き紅雲の覗きしも、今は谷に漸く暮色を生じて、刻々に暗澹たる濃霧は、暮れ行く空にみち〳〵た。途は猶前に、峨々たる山勢を控へて、人の心は皆一種の不安に銷されて、吐く息は虹の樣であつた。

いつか一行と離れて猛進した自分と警吏は、遂にバンガローの屋根を發見して、少しく下つて一行を呼んだ。吹き荒ぶ岩頭に馴鹿に似た獸の姿を瞥見したが、直ぐと姿を霧の中に消した。

馬悲無く到り、苦力等又續いて來り、相宰ふてバンガローに入りて火を焚いた。此地標高一萬二千尺、峻烈なる寒氣と頭痛の爲に、横はる事を得ずして、終夜火に寄り、椅子にもたれて、寸眠を得た。



サンダクフ附近の樹氷

石崎光瑤氏撮影

夜の嵐はトングルよりも更に激しかつた。

白々と夜の明けそむるを待つて戸外に出でた、巨砲を吊瓶打ちに放つ樣な響が、全山を轟かし、寒威五體に滲徹し、雪山の曉の勤行は、人の子の親しみ難き神祕な威嚇を示して居た。

烈風の僅かの絶間には、山上を走つて、風蔭に身を潛めて、明け行く雪山の莊嚴さを眺めた。

ダージリンより四十哩の此高原からは、大雪山は只、眼前のフラットの雪原を前に隔つるのみで純白の絶壁、氷河のたゝすまひ、殆んど握手せん計りの近くに呎尺して全身を現して居た。一萬尺に滿たぬ萬山は、皆雲海に封ぜられて、飽く迄透徹した嚴冬の晴空に、宇內有數の群山が、天空を領した壯觀は、殆んど現世を超越した莊嚴美麗な大觀であつた。感極まつて默然として對するに萬里の長風は、覺めなんとするキンチンジャンガの肩のほとりに、濛々たる一朶の吹雪を捲き起すのも見えた。時移る程に、曉の色は次第に山々を分明にして、軈て東の方、雲表未だ金烏を見ざるに既にキンチンジャンガの峰頭は光芒を浴びて火の如くに輝き、近きジャンヌウの肩にも金衣の落ちかゝるや、幾十の崇岳閃々として、其氷雪を染め、蜿蜒萬波の如く一齊に蒼穹に輝きそめた。最も近きガブル（二四〇〇〇呎）はキンチンジャンガ（二八〇〇〇呎）の胸に塞り、ジャンヌウ（二五〇〇〇呎）は、稍後方に位して其廣き肩を張り、バンテイム（二二〇〇〇呎）はマッターホーンに彷し峻拔の英姿を天に刺し、優麗なるシニオルチュ（二二〇〇〇呎）ナーシング（一八〇〇〇呎）等、蜿蜒連亘し、更にゴミウモ（二二三〇〇呎）、ターチヤム（一九二〇〇呎）ケンチンジャヌウ（二二五〇〇呎）ドンキアリ（二三一〇〇呎）、ナリム（一七六〇〇呎）、ドペンジカング（一七五〇〇呎）等の萬岳、悉く千古不滅の雪を輝かして、轉じて南の方を眺めると、實に二九〇〇〇呎の、エヴエレストは、ピラミッドの如き奇しき雄姿を現して、帝王の如くに萬山を睥睨し曉嵐怒號萬山を搖さんとする朝まだき、雲海洶湧の表に立つて、此觀に接しては、形容の辭も無く、神秘なる此大自然に對して、跪いて銀冠縞裳の巨

人の群れに見入るのみであつた。

二日の後ダージリンに歸り、トンスンに家を借られたる青木師の許に一泊して　夜もすがら盡きぬ話にふけりつゝ、西藏から伴れられたボーイが作つた西藏料理の御馳走を味つて居た。

カルカッタに歸つて二月も半ばに及んだ頃には、釋尊降誕によつて有名な無憂樹の花が咲きかけた。常綠の印度にも春は環り來て、野にも森にも、熾烈な色の上にも、更に一段の若々しい色と光が漂ひ溢れて來た。春に咲く花の大樹には殊に朱色のものが多かつた。日本の彼岸草をダリヤの花辨で造りそれを風車の形に集めた眞紅の花が、天を掩ふて咲きつめたのもあつた。甲谷陀の三井の社宅の庭には、菩提樹と相並んで、薮椿と木蓮とを交へた樣な、珊瑚色の厚肉の五瓣の花が、見上ぐる高い梢に咲き滿ちて、バタ〳〵落椿の樣に地を彩つて居た、そうして此樹には、晝の間は絶えず叭々鳥に似た椋鳥の一種が、白斑のある翼を張つて群り飛んで、此蕾を喙んでは落して行く。

日に薄暑を增して來る二月十七日に私は聯合州の旅を志してこゝを去つた。

冬の鈴谷山

六鹿一彦

一

日本の地誌を讀む毎に何時も樺太山系と云ふ文字が目につく。だが此の山系の有する山岳が土地の偏在と高度の低夷との爲に現在の日本の登山者間には全く顧みられぬ樣子である。尤も日本アルプス

の峰あさりに飽きた山岳通の人々は黒部川などの深谷に入られる樣子であり、又東北地方から北海道方面の山岳へもそろ〳〵と足が伸び始めたから、北の國に聳える山々も漸く世人の頭に入り込んでは來た。けれど殘念な事に何分高度に於て劣つて居る上、山脈の單調な爲、地形と山容とから見てはどうしても本洲中部の山岳とは比較にならぬ。唯之を補つて居るのは北にあると云ふ事のみである。即ち植物帶の珍らしい事と殘雪が比較的低夷な山にも永く存在する事である。殊に人によつて汚される事なく嚴重に保護されて居る自然を至る所に見出し得る喜悅が自然憧憬者の心を強く惹きつける。山岳の生命を半以上も奪ひ去るかの如くに感じて自然の破壞を叫ばしめる森林の伐採すら、北海道から樺太に至つては人間が自然を破壞して居るとは感ぜずに返つて自然が人間を懷深く引張り込まふとしてゐる趣がある。全く人事と交沙を絶つた自然は落寞の感を與へる。人間を峻拒する樣な嚴肅さが餘り濃厚である。其れ程、自然は人間の手から遠く離れて保護されて居る。

しかしながら之は樺太山系そのものとは全く異つた事であつて、原生林の壯嚴な美を說いたからとて樺太山系を讃美する事にならぬ。之によつて登山者から忘れられて居る日本の大山系に登山者の愛慕の念を涌き立たす事は出來ぬ。寧ろ平凡單調な山容が自然構成の他の要素の爲に窒息させられてしまふ恐がある。樺太山系の爲を思つてした事が返つて其れを現在よりも益々世人の腦裡より離れしめる樣な結果になる憂がある。尤も北海道方面には登山者の心を涌き立たす山岳は多々數の多い事である。しかし多くは火山であつて眞に樺太山系の爲に氣を吐く物は寥々たる物である。

樺太山系の名を得た樺太島に於ての山岳に至つては全く現在の登山家からは一顧をも與へられぬ。土地偏在の結果は恐ろしい物だ。自然も人間社會と同樣である。殊に其處に特別注意に値する事物の存在せぬに於ては當然の事であらう。

樺太の山岳は高度に於て誇る事は出來ぬ。又山脈の構成に於て單調なるを免れぬ。だから此の哀れ

な忘れられた山岳の爲に紹介の勞を執るのは困難な事であり又無益な事であるかも知らぬ。だが日本群島を構成する二要素の一なる此の山系が、しかも其の名稱を得た樺太本島内に於ける山岳が、我が國の登山家から全く忘れられて一篇の紀行文すら有しないのは餘りに氣の毒な感がするから、拙文をもかまはず、貧弱な智識から此の一文を草した次第である。

一

元來樺太には南北に併走する東西二個の山地帶が存在し、西部山地帶に邦領樺太を形成する主要なる物で、南樺太の最高峰アンバーマイト山（ニンクツノボリ）は一二五〇米突を有して居るが山容はすべて平凡單調なものである。東部山地帶は即ち鈴谷（スヾヤ）山を含む鈴谷山脈であつて、知床半島を構成するものである。此の山脈は古生層及び深成岩より成立し、東方には幾多の支脈を派出して急傾斜面の複雜な地形を呈して居るが、西方には緩傾斜をして鈴谷川の育む平原に低夷して居る。此の中に聳立する諸峰は西樺太山脈と異つて山勢峻嶮を極める者が多く、山頂は峭壁斷崖に富み森林帶を拔き出て、本洲中部に於ける八千尺程度の山岳を想はしめる。

鈴谷山は海拔一〇二一米突（大日本地誌によれば一〇七〇米突と記されてあるが、豐原に於て鈴谷山と稱して居る峰は其れよりも南方の一〇二一米突のものである）の高度を有し、東南に近く東海岸の潟湖トンナイチャの水を望み、西方に一谿を出して鈴谷川の一支流を作つて居る。豐原市街からは東北三里の位置にあり、其の峨々たる峰頭は豐原に一美觀を添えるものである。豐原方面から望んだ鈴谷山は山腹の七分まで眞黑の針葉樹林に包まれ、山頂近くまでは褐色の樺林に飾られ、山頂は這松の綠に彩られて居る。（但し、私は冬季に行つた爲眞の山頂は綠に見えるか、或は裸出した晶質剝岩で灰色が混在するかは確言出來ぬ）。

中央に一の主峰が立つて南北へ廣く肩を張り、其れが西方に腕を擴げる邊から次第に低くなって、此の兩腕の間に火山の爆裂火口を思はす大きな谷を抱いて居る。私が此の山を望んだのは積雪の深く樺太全土を鎖ざした三月中旬で、森林帶を拔き出した部分は純白に輝いて居た時であつた。そして其の魁偉な山容に全く心を奪はれて翌日早速に登つてしまつたのである。

三

私が此山に登つたのは大正九年三月十二日の事であつた。私は當時札幌の農學部に居て三月七日に豐原で催された樺太全島のスキー大會を見物旁々、久しく憧憬れて居た雪の樺太に接したいものと友人五名と共に、當時二月に行はれた高田地方のスキー大會に參加した樺太の櫻庭留三郎氏と同行してやつて來たのであつた。處が亞庭灣を一面に埋めた氷の爲に碎氷裝置のあつた弘前丸さへ、能登呂岬の近くで五尺に及ぶ氷に塞ぎ込められて、二十四時間氷と共に漂流する憂目に遭ひ、平時は小樽から二十一時間で達する大泊へ八十九時間の後にやつと上陸した次第で、甚興味の多い船旅ではあつたが、遂に大會へは間に合はなかつた。其後犬橇（ノソ）や露西亞橇（ストー）を見たり、露國式の丸太小屋を見たりして、樺太の冬も略々味つたので、豐原へ來て何處か一つ登山をして見たいものと思つて居た。そして其の事を樺太スキー倶樂部の人々に話して此の鈴谷山を紹介され、且案内さへも快諾されたのである。

私等はスキーが目的で話に聞く樺太の粉雪に憧憬れて渡つたのであつたが、此の年は例年よりも寒氣のゆるみ方が早く、街路の雪は勿論の事市街附近の丘陵でさへ著しく融雪して、此の日までに歩いた範圍では至る所凍雪（春季に見る大粒のザラメ砂糖を見る樣な雪で、夏に見る殘雪の多くはそれである）に變つて居る爲、大いに悲觀し、せめて一度でよいから粉雪で滑つて見たいと希望して居たの

で、登山慾の滿足と同時に滑走慾の滿足と云ふ慾の深い計畫であつた。

十二日は渡島以來の快晴が尙繼續して、宿泊して居た樺太殖産株式會社の倶樂部の窓硝子には例によつて美しい霜花が人の知力では及ばぬ種々の模樣を現して居た。八時頃出發する。前日に融けた雪が凍つてスキーの條痕が深く印せられたまゝで固つて居るので、至極歩き難い。スキーが横滑りをしたり、ガラ〳〵と惡いショックを受けたりして氣持が惡い。此んな有樣で登り始めたならば後滑りが酷くて堪らぬだらうとは思つたが、「山にかゝつて林に入れば未だ粉雪だらうし、幾ら後滑りで苦しんでもたかゞ三千尺の登りなら普通一時間歩けば千尺登れるから、二倍かゝるとしても六時間だ。降りは精力は零と見てよいから、ナーニ、關ふものか」とザラリ〳〵とザラメ雪を踏みつけて滑つて行つた。

今日の東道役を引き受けられた櫻庭氏が準備の都合上遲れるからとの事で、豐原市街の北東にあるパルプ工場から北に當る森林に入つて暫く待ち合はす事とした。K君は「樺太の Polyporaceae は未だ誰も調べて居らないから持つて歸れば此方面では世界のオーソリティになれるぜ」と頻に樹木の幹を調べ始めた。樺太は森林の國である。至る所眞黑に生へ茂つたトゞマツ、エゾマツの深い森で蔽はれて居る。しかも何れも皆原生林であつて老木は枯れた儘、風倒木は腐朽するが儘に放置されて居る。從つて此んな種類の菌類が繁殖するには最都合がよい。況んや樺太名物の山火が一度襲つた爲多くの燒損木を生じた所等は全く自然の培養基を形成して居て、多くの種類のサルノコシカケが殆んど至る所に簇生して居るのを發見する。時間潰しには持つて來いの仕事なので一同鵜の眼鷹の眼で雪眼鏡の後に眼玉をキョロつかして我こそ新種をとあさり始めた。本當に豐富なものだ、品種の數に於ても、量に於ても極一小面積であつたのに相當に集つた。新種の點は何等の智識もない私等には判らなかつたが、兎に角豐富な爲に喜んだ。だが未だ辨當さへ減らぬ處へ意外の荷物が增加して餘り有難く

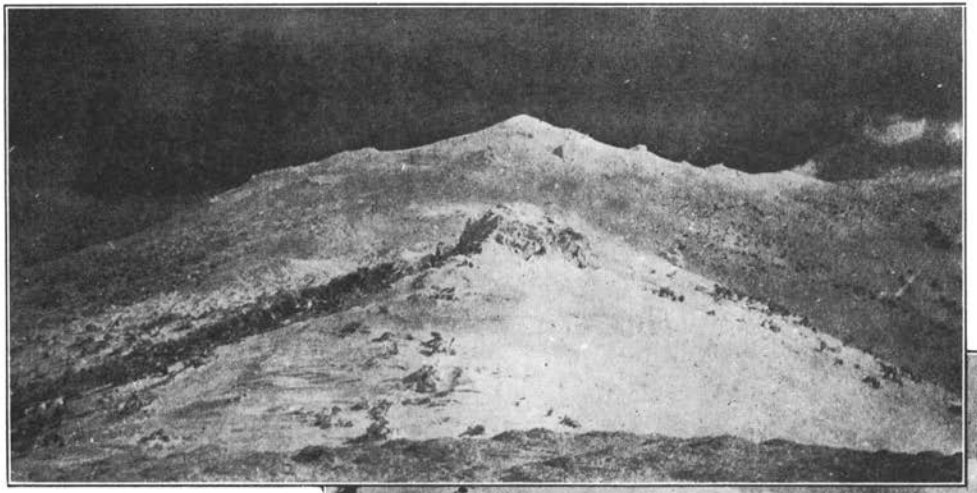
も感じなかつた。

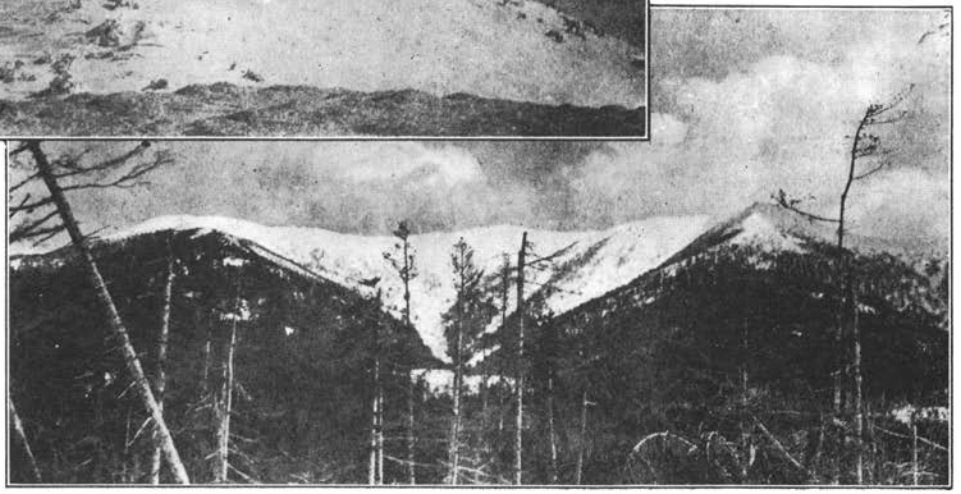
此んな事で三十分も待つたが櫻庭氏はやつて來ない。どうせ此の澤を遡るのだからそろ〳〵と出かけ樣かと鈴谷山の馬蹄形をなした峰が中央に含む谷から流れ出す溪流に沿つて歩き出した。此邊は畑にでも拓かれて居るのか、或は單に山火の跡の草原であるのか、雪の積つた時の事とて明てはない。此う云ふと、何だか山火の跡と畑とが區別出來ぬとは變だと思ふ人があるかも知れぬが、北海道邊りの新開地を見た人々には首肯される事である。山火の爲に枯れた樹木が白くされて林立して居る處を畑に拓いた場所を見る事もあれば、又切株が一面にされていかにも開墾の爲に伐木した樣に思はれるのに案外熊笹の繁茂に任してある土地があつたりして、冬季には見分のつかぬ事がよくある。だが此邊は平地である上に切株の殘つて居るのを見れば開墾地であらうと思はれた。此の無立木地からは今日征服してやらうと云ふ鈴谷山の全山容が何の障害物もなしに望まれる。空はあくまでも晴れて、紺青の大空へクッキリと拔け出した雪の頂が如何にも潔く、氣高く仰がれる。樺太の森林は此上もない密林なので、山腹まで這ひ登つて居る針葉樹林は少しの空隙もなしに生へ茂つて居る爲、其の下に白い雪があるとは想像されぬ程、山の膚を黑く包んで居る。其の上には純白の峰頭が三の波を打つて聳え、夏の雲の峰に似た雲が時々峰の後に現れる。太陽は朗に照り輝いて空氣は少しの微動もない。雪の面からメラ〳〵と陽炎でも燃え上りそうで、冬に樺太の山へ登ると云ふよりも初夏の候に殘雪の深い南山へ向ふ樣な氣分になつて、汗ばんだ額を脫ぎ去つた手袋で拭ひつゝ山を仰ぎ見た。

九時過になつて、櫻庭氏は汗で汚れた顏をして大急ぎで追つて來られた。白く風雨で漂泊されたトゞマツ等の燒損木が林立する山火の跡を通り拔けつゝ一直線に東へ向つて、西に口を開く谿谷へ進んだ。倶樂部を出てから一里も來た邊で森林へ入つた。本當ならば谿谷の最低所の溪流に沿つて遡るのであるが、本年の融雪が例年よりも早く來た爲、溪流の上を覆ひ隱した雪が所々で陷沒して二間餘下

方を雪融の水がもう二尺以上の深さをなして流れる二間幅の川が雪の間に黑く斷續した一條の線を劃して居る。そして所々對岸に渡るを餘儀なくせしめる樣な地形の間を迂曲して居る。尤も陷沒しない雪が流の上を埋めて危い雪橋を形成しては居るがスキーでは餘りに行路が迂曲して不利である爲、一氣に川の右岸の丘上に登つて之を傳はる事にした。そして左手の斜面を登りにかゝつた。

遠望した時に夏の山かと思ふばかりに眞黑く密生して居た森林は、其の中へ入ると豫想以上に密生して暗い。樹下の雪面上には樹葉を通して洩れる日光が點々と白斑を作るのみで他は全く暗い、ゴッグルを懸けた眼には殆んど暗黑かと思はれる程である。しかも樹幹の細い、下枝の低いのがギッチリと立ち列んで、身體を押し入れる餘地もないかの如くに思はれる。況んや七尺近いスキーで乘り込んでは「雪隱で槍」以上の苦しみを感ずる。スキーを割り込ます空所を探す間に、低い枝の爲帽子を奪はれ顏を引き搔かれる。大事な顏に傷をつけまいと注意すれば忽ち進路が閉塞されてしまふ。先登に立つた者の苦痛は一通りでなかつた。話に依れば樺太の土層は極めて淺く樹根の發達が不十分な爲、五六十年生に達した樹木は樹冠との權衡が破られてしまひ、樺太特有の强風に襲はれて倒れてしまふのだそうだ。如何にも谿谷の低所で、土壤も多く、風當りも少い所には可成大きなエゾマツを見るが、山腹は勿論の事平原でも徑一尺に及ぶ樹幹を有する物が最大の樣に觀察された。だから樺太の森林は木材としてよりもパルプとして價値を有するのだとか。私等には其んな事はどうでもよかつた。唯も少し疎生して居て欲しかつた。此んな樣子では降りの苦痛が思ひやられると碌々方角すらも判らない闇の中を無我夢中に這ひづつて行つた。併し、唯一つ感謝してもよかつたのは、トヾマツの純林で全く灌木や蔓莖の繁つて居ない事であつた。此上此んな種類の物がのさばつて居た日にはまるで足の踏み入れ樣もない。其上、此處へ名を記すのに植物分類學に對する智識の缺除して居る私等は大いに苦しまねばならなかつたのだ。登山記に植物名を記入するのが規則かの樣に思はれる時代だから。





上　北より望める鈴谷山主峰

下　山麓より望める鈴谷山

六鹿一彦氏撮影

幸にして恐ろしい密林は十町餘で終つて、一度丘の上に登り切つた。すると前面には急に大きくなつた鈴谷山の全姿態が目近く突立つて居た。（圖版參照）もう此處まで來ると針葉樹林の盡きた上方と無立木裸地（夏の事は知らぬ、冬にはそうだ）の下方との中間地に生へ茂つたダケカンバの一本一本が明に區別せられる樣になつて來た。白い雪の上に褐色のダケカンバが茂つて居るのは一種の柔く暖い感じを與へて、暗綠色の針葉樹林が示す美とは異つた華麗な印象を與へる美を形成して居る。私等は此の丘の上から一度前の谷へ降つたそして十町餘も直西に向つて、未だ溪流を埋めた雪が陷沒せずに廣い谷になつて居る澤を、爪先上りに上つた。夏ならば背を沒する根曲竹の茂みが一面にはびこつて、唯一の進路である溪流さへ、兩岸からのさばり出した竹の爲に隱されてしまひ、苦痛以外に何物を感じない場所ではあるが、冬の有難さには悠々閑々として枝が下垂したエゾマツの一本〳〵を嘆賞しつゝ登つて行た。實際、エゾマツの姿は眞の北國情緒を示して居るものと思ふ。ハイネが吟つた

Ein Fichtenbaum steht einsam
Im Norden auf kahler Höh'.

の詩を想起する。そして灰色の空の下で暗い顏をして氷と雪との中に閉ざされつゝ黑潮の高鳴る南國を戀ひ慕つて居る姿を此の詩によつて聯想する。圓錐形に作られた樹冠と云ひ、なだらかに下垂した枝條と云ひ、美しい斑紋を表して龜裂した樹幹と云ひ、陰鬱な暗綠色の樹葉等、一として自然愛好者の眼に快く感じない物はない。陰鬱な北國の冬を飾る風物として全く適當なものであらう。

やがて右手の斜面を攀ぢる。此の邊りから雪はザラメ雪の狀態に達して居らず、日光の照射する部分は十分に水氣を含んだ雪になつてスキーの底を濡らし、其れが樹木の蔭に入れば、未だ良好な粉雪である爲、スキーに雪の附着する事が甚しい。それが今までの密林と違つて所々に空地を開いて居る爲、日光で融けた雪の部分が仲々に多い。しかも之までは一直線に爪先上りで上つて來たのが、此處

からは二十度位の傾斜になつて電光形に登り始めたので、どうしても通路に自由が利かぬ。之が樣ならば自由に曲れるが、スキーとなれば登る角度は略一定して來るから、其んなに自由に曲れない。又曲つて居ては時間を取つて仕方がない。だから雪の融けた處や融けぬ處を間斷なく出入するのでスキーに雪の附着する事は夥多しいものだ、幾らこすり落としても直に五六寸は底についてしまふ。此うなるとスキーは滑らず、一歩毎に持ち上げて歩くから足の疲れる事は此上もない。其上、澄み渡つた空からは太陽が强い光線を放つて雪面からの反射と兩方で照りつける。登りは何處までも續く處へ櫻庭氏が案内振りを見せ樣と一心になつて登り續けるから私等は全く參つてしまつた。期待して居た雪は絶望に近い上、景色は北海道と大差がない。唯殘る所は峰に達したいと云ふピークハンターの野心と、斃ばつたと云ふ汚名を樺太に殘して置きたくないと云ふ痞我慢があつたのみで、實際登山の興味は、流れ落ちる汗と共に殆んど全くなくなつて居た。

しかし森の中に座り込んで早い晝飯を食べ、腹の方に不平がなくなるともう苦痛も忘れ始めた。其處へ冷い風が森の奥から吹いて來て汗も乾いて來ると流石は未だ冬だけの事はあつて、休んで居ると、寒くなつて來た。動かねばならぬ、となれば矢張自然に足は上を向く。だが五六町歩くと直又厭になつた。頂上の見える處まで行けば歸らうぜ、などゝ喋舌りながら白い丸太棒の樣になつたスキーを引きずり〳〵登つた。十二時半頃やつと頂上の見える峰、即ち鈴谷山の馬蹄形をなして西に伸びた峰の北の方で、最西の部分にある峰の上に出た。圈谷の樣に圓く三方を取り圍まれた谷の向ふには丁度私等の立つて居る峰に相對する南方の峰が立つて其の間は一面に眞黑の森が下の雪も見えぬ樣に深く茂つて埋めて居る。其の黑い森が次第に上るに從つて薄くなり、黑い針葉樹の數が減つて褐色のダケカンバに取り替へられて居る。針葉喬木帶と灌木帶（ダケカンバは其の中には入らぬか知らぬが）との變異線が明に示されて仲々面白い。純林と混淆林との成立が一目で見渡される。其の間を破つて白い

雪の線が一直線に谷へ走つてガレの存在を表示する。此等の上は全く純白に輝く部分で左に長く小凸起を表しつゝ連なつて居る。だが眞の頂上は未だ前に連なる峰の爲に遮斷せられて望まれぬ。幸な事に此處からは雪の質が一變して良好な粉雪になつたので、もう歸る氣などは少しもなくなつてしまつた。風が今までは森の爲に遮ぎられて來なかつたので雪も融けたが、オネへ出ては可成の冷い風が通つて雪も日光の熱を奪はれて融けられないらしい。スツカリ元氣を恢復してオネ傳ひを始める。

陸地測量部の五萬分一測圖も精確だと思はれぬが、ベレズニヤキー圖版の六五二米突と記入されてある峰が此の邊に當るらしい。だが一個の峰とまで行かず、唯長く西へ伸びたオネの最西の端の部分であつて、オネは次第に頂上へと高まつて行く。もうエゾマツは樺に變つた。雪はサラ〳〵とスキーの先に蹴散らされて路は面白い程はかどる。五町も登ると樺の丈けが急に低くなつて風にいぢめられた枝幹が變な工合にこゞれた姿を表して居る。そして其の枝幹の東北面には七八分の厚味を持つた霧氷（花ぼろ）が一面に附着して砂糖細工の樣に眞白に輝いて美しい。冬季の山上では屢〻見る氣象學上の一現象であるが見慣れぬ眼には實に異樣に眺められる、イヤ見慣れた眼にも美と云ふ觀念を起さしめるには變りがない。之で見ると美の要素として珍奇と云ふ事は唯單に其の觀念の誘因として又强勢因として存在するものである事が首肯れる。霧氷は雲霧が地物に吹きつけられる時に凝結して生じた粗鬆な氷層であつて冬季の寒夜著しく氣溫の低い時に空氣中の水蒸氣が低溫な地物の上に昇華して出來る彼の信州邊でナゴと稱する木花とは全然成因を異にするものである。外觀に於ても霧氷は地物の一測而にのみ霜柱の樣に生長して居て、明に區別されるが遠望してはよく誤るものである。氣象學上では此物を樹氷と云ひ、ナゴを木花と稱して、其の兩者の總稱として霧氷と云ふ語を用ひて居る樣だが、木花は雲霧とは全く何の關係もないものだから、此の霧氷の語の中に入れてしまふは變である。元來全然異る二物を少しの類似點から一束にしてしまふなどは感心出來ぬ事で、又其の必要もあ

るまい。蜘蛛をムシと云つて昆蟲と一緒にするのは少し科學的智識のある人には出來ぬ事である。況んや氣象學と稱する以上は此んな幼稚な命名法は廢したが當然と思ふ。木花には北國で一般に使用する樹氷を用ひ、此の物には霧氷の名を冠せるが成因上からしても又外觀上からしても、尙又兩者の稱照上からしても「霧氷」「樹氷」と定めるのが良いと思ふ。兩者は何れも裸出した地物の表面に附着して黑い岩も灰色の樹幹も或は褐色の樹枝も總て一樣に純白の絹を以て包んだかの樣になる。樹氷の美は枝條の細い落葉樹に於て極致に達する。特に樺の林などでは褐色の膚は包み隱くした樹氷の白絹を透して照り映える朝日に薔薇色に燃え立ち、輝き渡る日光をキララと四方に射返へして、世にありとあらゆる寶石を一時に集めて懸け連ねたかの樣に燦き渡る。其の示す美は纖細華麗で女性的と稱し得やう。だが霧氷は其れよりも粗鬆な氷層から成立する爲、豪宕壯麗で男性的な趣がある。高山の山巔近くで樺の茂みが眞白に枝も幹も判然せぬ程霧氷に包まれて、馳驅する雲の間に淡く烟る時等は、話に聞いた雪女郎かとも思はれて胸をどきつかせる。又、山巔の一角に吹き荒ぶ山風に逆つて立つ三角測量の櫓が、全身霧氷に厚く取り卷かれて紺碧の大空にクッキリ白く浮かび出して居るのを仰ぐ時は、激しい心の動搖を感じて思はず胸をときめかす。之は冬季登山に於てのみ味はれる喜悅である。

其の喜悅が「山巔近し」の聲と共に益々足の進みを早めて呉れる。處が數日來の快晴で霧氷の一部分は融解して枝から離れ、雪の上にはガサ〳〵した霧氷が一面に敷きつめられて居るので、スキーが此處では急角度を取る事が出來ず、早く頂へと思ふのに少しの急斜面でも電光形を餘儀なくされて、氣の揉める事が一通りぢやない。其の上、あれ程一片の雲影もなく晴れて居た空に雲脚の亂れた雲が吹雪を思はせて次第に增加し、時には右に見える峰の頭をかすめて走る事さへもある樣になつて來た。風は今日は南西から吹く。もう春の風だ。だが三千尺近い峰では櫻の蕾を綻びさす風ではない。流れて居た汗も引いてしまひ、脫ぎ棄てた手袋も再び取り出して、帽子の耳覆ひを垂れて最早樺さへも見

られなくなつた硬雪の壁を大きな電光形を切りつゝ登つて行く。岩陰の雪の少ない處には這松が苦しそうに青白い葉を擡げて日光を求めて居る。今此處で生命を有する物として目に觸れるは唯此の這松のみである。生命のない事程淋しい物はない。一草一木の生すらも見出し得ぬ所程落莫の感を起すものはない。死の國にも美はあるかも知れぬが、あまりに寂しい。如何に理想的の線と色彩とを以て調和されて居樣と、生命のない處には恐怖の感情が醸成される。雪に包まれて山巓に立つ時は何時も此の感情に打たれる。人間による自然美の破壞を高唱する人は、或程度迄は人間味の加はらぬ自然は慰安よりも脅威を與へるものである事を知つて居て貰ひたい。そして山岳地方の開發に絶對的に反對する態度はとりたくないものだと思ふ。だが山岳が與へる此の脅威に快感を味ふと云ふならば其れは別だ。

オネに出て三十分の後、即ち午後一時に鈴谷山の主峰から南北に伸びたオネの最北端の一峰に辿り着いた。周圍は雪以外に何物もない。頂は五六坪位で南に連る一脈以外は三十度餘の傾斜をなして谷に落ちて居る。此時雲は次第に其の量を增して周圍を包み始めた。風は烈しく當つて寒氣が甚しい。シャツを一枚重ねるや展望は其儘にして大急ぎで南方の主峰へと急ぐ。(圖版參照)雪は風の爲に叩きつけられて居るので全く硬化してスキーの跡を留めない。しかも波形を呈して硬まつて居るのでスキーで二町も滑り下つて次の峰に達する間の不快な衝動は、スキーを凸起に當てゝ折損しはせぬかとの心配と混合して厭な思をさせた。下り切つて三十間も歩けば夏ならば大きな岩であらうと思はれる高さ四間に餘る大雪塊の下を通る。西南から押し寄せる雲は益々密になつてチラリ〳〵と主峰の頂を埋める。風は强くなつて雪も散らつき始めた。帽子の垂をスッカリ下してしまひ、ガラ〳〵に硬化した雪の凹凸甚しい斜面を只管這ひ上つて行く。オネは綾く波打つて居るので登るのには困難でない。だが吹雪襲來と云ふ恐が氣をいら立せて足が早まり息がはづんで來る。今までゴッグルを透して黄色

に輝いて居た鈴谷川兩岸の平原は押し寄せる暗雲に日光を遮ぎられて灰色に鈍く横はり、遙か南方に其れかと望まれた大泊の海も最早一面の灰色の中に融け込んでしまつた。眼の高さの處で脚の亂れた密雲はひつきりなしに去來する。樺太特有の大吹雪が今にも襲來する氣合である。吹雪は別に恐ろしいとも思はぬが、厄介な物である事は事實である。殊に春近くの吹雪は雪の性質が軟雪に近い爲、スキーの滑走を妨害するのみならず、衣服に附着した雪が融けて濡らす恐がある。特に私等の着て居た亞麻製の上被は風の透通は防ぐが、防水が餘程利かなくなつて居るから雪が融け出しては堪らないと少々心配になつて來た。それで兩杖を突張り〳〵滑るスキーを無理に急角度を取つて登つた。北から一直線には無理だつたので左の方へ迂廻して主峰の東部から攀ぢ登つた。二時漸く頂上に達した。

山頂には何物もない。五六坪の土地が人を坐らすのみである。西には白い長い斜面が谷に下つて針葉樹林の黑い中に走り込んで居る。山峰を二つも越した森の向ふに豐原らしい鼠色の一區域が下瞰される。章魚の手の様に幾筋も東へ伸びた山脈の終りには黑白斑々たる平原が望まれる。其れが氷に閉ざされたオホーツク海だと云ふ。東南には黑い森の中に白と黑との富内湖が山懷深く入り込んで居る。總べての物は黑と白とで彩られて居て、之が冬の景色の特色である幽玄崇高寂寞の感じを表現して居る。風は止まぬ。雪も少し多くなる。登山者として山頂に達する希望はもう滿足させられた、殘るのはスキーランナーとして壯快な滑走を貪る事である。兩者に兼ねられた眺望はもう叶ひ難い。五分もして直に南へ向つて滑り出した。雪は未だ〳〵硬い。私等は半制動滑降で滑ると櫻庭氏は直滑降をクリスチャニアで制限しつゝ降つて行く。樺太のスキーランナーが飽く迄スキングに熟達して居るのは感嘆に値する。だが從つてスキー場のスキーランナーで登山者でない事の缺點は遂に暴露した。馬蹄形に谷を取り圍んだ峰の内側の三十五六度の斜面に硬雪の被覆した所を滑降する時、半制動の必要を重視せぬ畑スキーランナーは大分弱つて居た。吹雪は遂に本物になつた。裸出した頰の一部が眞向か

ら吹きつける雪と風とでヒリつき始めた。顔を伏せて只管斜面に嚙りついて降つて行く。其内馬蹄形に谷を圍んだ峰の最四端に達し、之を南へ迂廻して樺の林を滑り續けると吹雪も止んで雲も散つた。紺碧の大空が前よりも一層潔らかに澄んで現れ、太陽が快い光線を投げ始めた。樺の純林の中は今の雪が二寸も積もつて理想的な斜面を提供して呉れたので十町以上も一直線に斜滑降を行つて再び暗いエゾ・トドの森に入り込んだ。

此れから十數町の間は立ち列ぶ巨木の間を縫つて相當快い滑降を續けたが其内に大變な事になつて來た。再び登路と同じ樣な密林が前面に現れて來たのである。此の後二里餘の行程は今から考へてもどう云ふ風に滑つたものか釋が解らぬ。測量部の地圖を眺めても、地圖が不完全な上、記憶が明でないのでトント見當がつかぬ。兎に角出來るだけ密林の少い所、樹幹の空隙の多い所と睨んでは降つたので方向などは全く判らぬ。それで密林の中ではスキーを木に當てぬ樣、枝で顔を毆ぐられぬ樣、其の上時間のかゝらぬ樣にと降つたので苦しかつた事は此の上もない。何しろ頂上を去つたのが二時だから日の短い北國では三時と云へば何だか今にも日が落ちそうで不安でならなかつた。だから二つ三つ枝で毆られても出來るだけ早く遮二無二林の中を突切つて轉げ降りた。だから山火の跡で骸骨の樣な枯木が疎立して居る所へ出た時には、人里近いと云ふ以外に進路を妨げられぬと云ふ點で大いに山火を讃美した。そして斧鉞入らざる原生林等に隨喜の涙を流す連中が癪にさはつて來た位、氣がいら立つて居た。其内に左手の谷を距てた樺太神社のある旭ヶ丘を望む所まで來ると、恐ろしい暗黑の森林も終つて切株の點々たる畑に出て來た。ヤレ〳〵と思ふともう歩くのが厭になつてしまふ。豐原の市街よりも餘程南に出たので、緩く起伏する丘陵を二三乘越して行かねばならぬ事になつた。日は餘程西に傾いた。光は褪せて風が冷たく頰を撫でる。ヒョロ長い二十間にも達する影が凍り始めた雪の上をヒョイ〳〵と足を運んで行く。何時もならば丘の上へは出來るだけ高く登つて滑り越すのに、今日

はもう山腹を水平にカランで大迂廻をしながら登る面倒を避ける。疲れたからと云ふのが業腹だと云ふので「登るのと滑るのとには飽きた。平地滑走も面白い」と負惜味を云ひつゝ變な格構に尻を振つて居る。

スキーヶ丘に來ると未だ二三人が滑つて居たが默つて素通りし、犬にスキーを牽かせて歸る人を羨しそうに見送りつゝゾロリ〳〵と足を引き摺つた。倶樂部へ着くと丁度五時。

爪哇メラバブ登山記

武田信

數ふれば今は五年の昔、自分を載せた渡南の船が始めて風馨る南國の港バタヴヰア（タンジョン、プリオク）に着いた。上陸して見ると、世界第一の火山國東洋の樂園と、豫期してゐた自分の目の前には、唯だ暑苦しい田圃と、砂ぼこりの立つ汚い町と、吃驚する程濁つただるさうに流れてゐる川と、想像した程の風趣は探しても見當らぬひからびた椰子の樹とが出現したので、少なからず失望した。船は再び纜を解いてチェリボーン港に立ち寄つた明けの日、派手な模樣のサロンの產地として爪哇には有名なペカロガン港に船がゝりした。夕暮に船首に立つて蒼茫と暮れ渡る海面を眺めながら、暮靄の罩めた陸地を指して歸り行く獨木舟（カヌー）の帆影を追ひ、靜に船べりに囁く波の音に耳を澄してゐた折しも、忽ちパッと四邊を照らす輝きに、現の夢から醒めて西の空を見上げると、今しも地平線下に沒した太陽の餘光に榮えて、一面に紅蓮の炎のやうに燃え立つたのであつた。

瀲灩たる漣波は黃金を溶し、漂ふ暮雲の低きは朱の勝つた紅に、更に高きは橙黃、橙卵黃と、微妙鮮麗なる色彩の變化に、人智の企及す可からざる大自然の技巧の精妙なることを示してゐる。

その卵黄の雲が澄み切つた淺黄色の空に浮ぶあたり、峰頭海を拔くこと一萬一千三百尺、東西に曳きたる雄勁なスカイラインの、綏く長く延びて裾野のスロープに續く柔な曲線美を見せてゐる山の姿は、雪こそなけれ富士山其儘の秀麗さで、位置さへ近く海に面して、三保の松原にはあらねど、椰子の葉影濃かなる長堤に抱かれた入江らしきものも、暮靄の裡に白く光るのが見受けられた。斯くて始めて夢想してゐた南國の美しさが實現された嬉しさに、飽かず山の姿に見入つたのであつた。それが瓜哇第二の高山スラマット山であることや、西五十哩（概算）を隔つるチェリボーン港から、晴れ切つた曉の空に一條の噴烟縷々として、峰頭より立ち昇る此山を見得る日は、必ず大雨が降るといふことなども、後に聞いた話である。

スマランに上陸して第一に覺えた馬來語が、始めての日本人には誰にも皆異樣に感ぜられるバナナ（ピーサン）と天麩羅（ゴリン）とで、第二が市の背後に迫るウンガラン山を指して、グノン（山）と敎へられたことである。山好きな自分が外國に來ても矢張り山といふ言葉を早く覺えたのも緣がない譯でもないなぞと思ひながら、五年の歲月は過ぎ去つてしまつた。其間五六千尺程度の峠道や、其近くにある茶山や規那山などは、幾度となく歩いたとはあるが、獨立した一峰の頂を極めたとは一度も無かつた。それには幾多の理由が存在してゐる。乍併最力强い障害は、他のすべての日本人を拘束してゐると同樣な、記錄皆無登路不明と云ふ、單簡にして而も重要なる理由からであつた。蘭文の記述ならあるかしれぬが、辛くして高い安い程度の言葉丈け最近に覺えた丈けでは問題にならぬ。蘭國領土に住みながら蘭語が話せぬとは心得ぬと思ふ人があるかも知れぬが、馬來語で足らぬ用事は覺束ない英語で補へばさして差支へはない。そして夫が瓜哇在住の日本人の常態である。其結果山の勝手は皆目判らず、中腹以上欝葱たる密林に蔽はれた、虎と猿と蛇との棲家であるらしい瓜哇の山は、登攀不可能と云ふ、直截簡明な結論に逢着するより外はなかつたのである。

然るに昨年思はぬ成行から住所不定の風來坊となつて、結局暇の出來たのを幸に、且つ爪哇の勝手もどうやら少し判明した故、此機會を利用して豫て狙つた山を二つ三つ征服しやうと決心して、第一着手に植物園で有名なブイテンゾルグの背後に聳ゆる西部爪哇の重鎭ゲッデ山（最高峰パラゴン山の標高三〇二二米）の登攀を試みて、存外樂に成功した。次に爪哇の山都バンドン市の北嶺タンクバンプラフ山（二〇七六米）の噴火口を見物し、更に爪哇刀（クリス）を腰に金色の日傘をかざして、悠々參百年を白日の夢と暮した南國の大宮人と、昔日豪華の名殘を止むる水城とによつて有名な中部爪哇の古都ジョクジャカルタ市を南の山麓に抱へ、佛蹟を以て世界に鳴るボロボドールを西麓に戴せ、關東八州の野よりも廣きソロ、スマラン、マデオン、レンバン、ケデリー、スラバヤ六州の大平野を俯瞰して、峰頂に千秋不斷の煙を吐く爪哇第一の活火山、標高二九一一米と算せられたメラッビ山を殆ど前人未到の煙の中まで登り詰めた折、北に續くメラバブ山の端然たる山貌に魁せられて、事の序に三一四五米の其峰頂をも踏むで見度なり、翌日それを試みたので、其の見聞記を書いて見ることにした。何かの御參考になれば幸である。

ソロ市とジョクジャ市の中間驛カラテン町なる横山氏宅で登山の仕度を整へ九月廿五日（大正九年）の午前七時三十分發の廣軌線で出發した。これはスマラン、ソロ、ジョクジャ間に敷設された爪哇に唯一の廣軌鐵道であり、N、I、S、（ネーデルランス、インデイッシ、スポールウエーマスカッペー）と稱する會社の所有にかゝる。スラバヤ、ソロ、ジョクジャ、バンドン、バタヴヰア等を連絡する官設の幹線は、かへつて挾軌鐵道である。ソロ、ジョクジャ間には、廣軌の中間一方に偏して尙一條のレールを敷いてあり、幹線の急行車並に最大急行車丈け、一日に二往復廣軌線の一條を借用して疾走する。アプト式でもない三條並行した汽車線路は一寸珍らしい。

此沿道は煙草並に砂糖の產地として名を得たる爪哇に有數な沃野である。現在爪哇で日本人の所有

にかゝる三製糖工場中、最近買收した內外製糖會社のグダレン製糖工場は、カラテン町より東北約九哩、メラッピの山下に位し、操業の成績は極て良好のものださうな。秋潭の如くに澄み切つたコバルトの空からメラッピ、メラバブの兩山が、新しい試に勇躍する自分の前途を祝福するものゝ如くに見守つてゐる。山の桔梗色とうつりのよい新綠鮮な青田から飛立つ白鷺が、翠綠の葉を爽かな朝風にそよがせた椰子の梢を低く掠め、名は知らぬが姿は常に見慣れてゐる黑さまでに茂つた濃綠の熱帶樹の上を高く飛むで軈て桔梗色の山の肩に吸ひ込まれる。

一帶に鳥の多い瓜哇の田舍、殊にそれが何と云ふ名稱であるか見當もつかない大小赤白樣々の鳥の中で、最も普通に見られ、而も自分等にも名稱のわかつてるのは雀と烏を除いては、此鷺と山鳩である。其數に於ても雀はともあれ、烏には劣りはせまい。晝の暑さは知らぬ顏に涼しい夕風がソヨ〳〵と薄の白芒を戰がせてゐるたそがれ時、行人杜絕へた田舍道の稻穗も摘まれた枯田のほとりに、物思はしげに悄然と立つた鷺一羽、それは懊熱の常夏の國とは思へない蕭條寂寥の感じを與ふるのである。或は夜來の雨名殘なく霽れて、太陽の光は山の端白う屯せる朝靄に輝いて、萬物晴を喜ぶの時、爽な曉の大氣を幽かに〳〵搖がせてホロ〳〵と優しく鳴く鳩の音を聞く許り悠閑な氣分はないであらう。

山鳩は瓜哇の田舍の何處にも多く、土人はいたく其啼聲を愛し、日本人が鶯を飼ひ金絲鳥を飼ふより以上に普く飼養してをる。純白大形の鷺は流石に數少く、普通は飛べば眞白に見ゆるけれども翅に黑羽を交へた、丈け一尺二三寸の小形のものである。本來の名稱を知らぬ自分等は、それも鷺と云ひ慣してゐる。無論其一種であらう。西部瓜哇には數少く、中部瓜哇に稍多く、東部瓜哇の養魚池ある地方には殊に多い。

序に山に棲む動物を紹介すると、數に於ては猿と山豚（猪？）が兩大關である。黑い獰猛な面構へした猿や灰色の手長猿から、日本猿に類似した毛並の猿などは、人家近い並木の上を飛び跳ねて、折

角土人が丹精したバナヽを盗み去るのはまだよいとして、或地方の可なり賑かな田舍町の附近では、市場(パッサル)歸りの土人女が幾日かの勞銀に代へて、夫や子供を喜ばすべく買入れた品物を籠に入れ、大原女式に頭に載せて路を急ぐ所を要して、白晝に之を掠めて、お人好の彼女等をアッドウ、サーヤンと吃驚させる樣な惡戲をするさうである。野生の鹿を見たことは一度もないが、咖啡山の中などであれが小鹿だと云ふ鳴聲は稀でない。土人等は鹿の角を好むこと甚しく、少し金持の土人になると、ベランダーの壁や室内の柱に、木作の鹿の首にとり着けた鹿の角の五對や七對持たぬ者はない。三枝位に岐れた立派なものを幾何かと試みに尋ぬると、大抵十五盾位のことを云ふ、高いか安いか自分等には判らない。

土人の所謂マッチャンは虎をも豹をも意味する言葉であるが、瓜哇の山中に野生の虎がありや無しやを知らぬ。乍併豹は斑紋美くしい大豹も、性猛惡と聞く黑豹も今猶棲息するらしく、狩の獲物を誇り顏に其の皮を壁にかけてゐる蘭人も時々見懸ける。野生の孔雀の現存するは確實であるが、それを野で見ることはない。しかしエステートの蘭人の家に放し飼にされた孔雀が、翅を廣げて自由に飛び廻る美しい姿は、動物園の金網の外からあれ孔雀が尾を擴げたと馳せ寄つてみるよりは、確に立優つた見物である。

瓜哇に來て少からず吃驚するものが三つある、野菜と地震と蛇がそれだ。野菜は此處に關係なしとして、地震は火山國に似もやらず、五年をる間にたつた一度しか知らず、しかもそれがずつと舊い人達にとつても珍らしい經驗だつたさうな。火山と地震との一致しないと云ふ事實を始て適切に了解することが出來た。蛇に就てはそれこそ信じ兼ぬる程稀少である。瓜哇に來て三年になりますが未だ一度も蛇を見たことがありませんと云ふ人は、スラバヤ、スマランの都會地許りでなく、田舍の小都會に住んでゐる人に就ても同樣である。村落に入つて農業や物產買に從事してゐる人すらも、蛇を見るこ

とは稀有であるといふ。――其代り土人は蛇を見たら最後、願にかけて殺さねば止まぬ――。人里は兎もあれ山ならばと案じたが、前後四回の登山には幸にして小蛇一疋目に入らなんだ、蛇嫌の人も此點は安心して瓜哇に來遊されてよい。

ソロ市の郊外停車場ブルオサリー驛で、ボヨラリ行支線に乘換る、これも同じN、I、S會社の所有に屬するが、本線でない爲かして、ソロからスマランに通ずる往還の左側に敷設したものである、從て速力も鈍く設備も劣る、尤も廣軌ではなかつた樣だ。

ブルオサリー驛は海拔九十六米で、終點のボヨラリ町は今は確と記憶せぬが四百何米かであつた。即ち此間約十五哩の間に三百米以上を登るわけだが、美事に發達したメラッビの裾野は、始はそれと氣が附かぬ程だ。左の車窓から振りかへると、東へ〳〵南へ〳〵と緩いスロープが擴つて、處々に作られた甘庶畑の間から、甘庶を積むだ水牛車が無感興な土人の鳴らす鞭の儘にノソリ〳〵と、曳かるる者も曳く者も至極天下泰平らしくやつて來る。軈てボヨラリ驛近くなると、右方に代赭色の小丘の起伏が現れて、車窓から吹き込む凉風と共に山に近付いたと云ふ感じが起る。驛の前方に綺麗に耕されたこれも同じ代赭色の丘陵の上に、木綿(カノボ)か何か葉の少ない大木がバラ〳〵と植ゑられた後から、濃い桔梗色のメラッビ、メラバブの兩山が招く樣に覗てゐるのは、故國の初秋を偲ばせる景色で、耳を澄すと何處やらで百舌鳥の甲高い鳴聲が聞えさうだ。バラ〳〵と撒いた樣に眞白な山羊が草を食むてるのも、點睛とまでは行かずとも、確に一段と精彩を添ゑる。

ボヨラリ町はソロからスマランに通ずる街道上の主要驛であるが故に、昔蘭人がソロ王國の攻略に沒頭してゐた時代、同一道路上にあるスマラン州内のサラテガ市を攻戰の前線策源地として、主要軍隊の駐屯地と定めたと同じ意味で、ソロ王軍にとつてはスマラン方面許りでなくマガランよりの侵入軍に對する防禦地點ともなりさうな此地を重要視した事と想像される。從て此附近を詳しく取調べた

ならば、瓜哇征服史に附隨した幾多の興味あるエピソードを發見することであらうが、それは自分の力に及ばないものであることを遺憾とする。今では敗殘の影も止めぬタマリンドの美しき此町には、登山に要する食量品など調ふべき支那店のないのに不尠當惑した、後遊の士は心すべきことである。但しホテルは蘭人のも支那人のも共にある。

スローと云ふ名の村が此度メラッビ登山の根據地となるとは聞いて來たが、其村が何の邊に當るかを知らない、勿論道筋などは見當もつかないと云ふ暢氣千萬な登山旅行は、流石に南洋式氣分を發揮してゐるといふてよからう。何しろ旅行者にとつて第一の手頼りとなる地圖が無いのだから詮方がない、內地の登山者に調法がらるゝ五萬分ノ一地形圖などは飛んでもないこと、確に販賣されてゐる筈の五十萬分の一の簡單なものすら、度々バタヴヰアの知人に懇願しても、遂に手に入らなんだ始末である。それ故下車するや否や道行く幾人かの土人等にスロー村行の道筋を尋ねると、どれもこれも知らぬと答へる、甚以て心細い。最後に物買に入つた支那人店で、漸くそれがメラッビ、メラバブ兩山の鞍部にあることや、ボヨラリからスローまで約十二哩の距離であることなどを敎へられ、そこで町の中央から示された通りに左へ曲つた。マガラン街道は自動車も通ふ立派な道で、御用とならば自動車もボヨラリで得られるであらうが、自分等の旅行には馬車さへも不用、膝栗毛と極めて少し許りの荷物はカラテンから連れて來た苦力に持たせ、いざと許り出發した。

瓜哇の並木、これ丈けは故國の人々に誇り得る價値が充分ある。椰子樹の並木、チマラの並木、其他ラマランにせよ、タマリンドにせよ、皆とり〳〵の趣を具へてゐるが、生憎と此處はまだ樹が若く、精々一抱へ程の太さしかない詰らぬものであつた。並木は何と云ふても二抱へ以上もある大木が見通しもならぬ程立並んでゐなくては駄目である。それでも處々涼しい休場を作つてゐるのを取柄としやう。地盤の高まるに連れて一歩一景と變り行く美しき眺望に氣を引立ぜながら、七哩近く登つた邊に

チボゴと云ふエステートがある、二抱へ程の檜葉の大木が一本道近く植ゑられた廣庭の奥に、立派なマネージャーの白い家が綠の葉隱れに見ゆるのも美しい。續いて四五軒瀟洒たる蘭人監督（オフシーンテル）の家も立並んでゐる。一エステートとしてマネージャーの附近に四五人の蘭人監督の居るものは、可成大きい方であるが、路傍に見受くる茶や咖啡の生育は面白くない、何と云ふても茶の本場は西部瓜哇のバンドン市附近、咖啡は東部のマラン市、ブリタル市附近である。唯規那樹のみは稍勢がよい樣だが、それとても此處にしてはと云ふ前書きつきで、本場の規那樹の樣な譯にはいかぬ。

今度の登山には、此處より外にエステートを通過しないが、バンドン市附近の山中四五千尺の高處に登つて、緩傾斜の丘陵が廣々と起伏する高原地に作られた、新綠の色美はしいあの暢んびりとした茶山の景色を賞翫することは、瓜哇見物に來る程の人にお勸めしたい。産業調査の人々には當然のプログラムとして（然も多くは知らずに歸るらしい）單に南洋の自然美に憧憬れて來る人にとつても、決して失望に終らぬことを保證する。若し美的百姓と云ふ文字が使へるならば、華かな空と麗な太陽と凉しい風とに惠まれた四時常春の南洋の山中に、繪よりも美しい茶畑など作つてをる人にこそ、最もふさはしい文字であらう。當世流行の自動車や別莊を持つ階級の人達は、何時までもせゝこましい大磯や鎌倉に許り執着せずに、稀には瓜哇の茶山など買入れて、國際的の別莊を作り、平素は適當のマネージャーを置き、年に二度冬の避寒と夏の避暑とに遊びに來る位のことを計畫する者もありそうなものだ。瓜哇の山中エステート地方は、六千尺の高處にも猶自動車を疾驅し得るから、交通不便などと案ずるには當らない。避寒は判つてゐるが避暑とは奇怪千萬なと不審がるお方もあらうが、それは書物の上から速斷した結果であつて、暑いスラバヤやスマランあたりで金儲のみに齷齪してゐれば格別、何處でもよいから五千尺程の高原上に、小春の樣な陽光を浴びて、お手のものゝ自動車を走らせたなら、疑は釋然として氷解するであらう。

チボゴからスロー村までは尙ほ五哩許りの登りであるといふ。此邊りから並木の樹木は日本人が南洋松と呼ぶチマラの樹に代つてゐる、此樹は檜葉其の他の針葉樹と異つて、寧ろ低地の暑い地方に多く見らるゝもので、千米を越ーた筈の此邊の並木に植ゑられるのはちと不似合と感じたが、針葉樹には附物の梢に凉しき颯々の音に耳を傾け、路傍に微笑む薔薇の色香に目を喜ばしながら、路の一曲り毎に變り行く展望に心躍らせて登つて行くと、五哩の路も遠しとせず、やがて前庭にコスモスなどを植ゑてある鄙びたしかも一面には風情の乏しくない土人の茅屋の點在した寒村にさしかゝつた。それがマガランへ越す峠道の絶頂に當るスロー村であつた。確としたことは判明しないがほゞ千三百米位と思はれる。此處には最早椰子樹などの影もなく、今迄ついて來た並木のチマラさへ、寒さに堪えぬか見るからに貧弱なものとなつた代りに、南洋に珍らしい桃の木が可憐な花と小さな實さへもつけてゐた。

今宵の宿と豫定して來たバッサングラハンの廣い前庭の歩道に並んだ檜葉の並木の綠に、黃菊、白菊、カンナ、コスモスなどが色とり〴〵に妍を競ふてゐる。秋の霜に傲る菊花の淸艶を綠遍き初夏にめづることは、日本の如何なる富豪にも不可能であらう。然るに此處南洋の高原地では、淸楚な菊やコスモスの側に、躑躅、カンナ其他名も知らぬ熱帶植物の妖艶を配し、更にそれに可憐な菫、牽牛花を點綴して一庭に眺め、夜は床しき螢の淸光を追ひながら、唧々たる蟲聲に耳を傾くるの風流を可能とする。月の夜の美しさは天下既に定評がある、白雨盆を覆す豪快味も惡くない、唯霜氣凛然として一白淸淨なる雪の眺を缺くことのみを遺憾とする。もう一つ野に野生の花少く、山に錦繡の美なしと云ふ實際の遺憾をも白狀しなければならぬ。

瓜哇の田舍を旅行する者にとつて何よりの不便は、食物の不味とホテルの無いことであらう。若し油づくめの土人料理を食し得る人は、鑵詰など持參すればよいとしても、毎晩々々「月ぞ今宵の主なりける」(花が少ないから)と許り濟ましては居られない、是非共蚊帳と蒲團のある家で睡りたいが、偖

それはボルネオの森でダイヤモンドを拾ひ、ドボーの海岸で眞珠を探し出さうとするより、稍容易な程度に於て困難であるから厄介である。一例を擧ぐると、瓜哇十七州中第一の大州で、廣さ八千方哩人口三百萬を有するブリアンゲル州内でも、蘭人又は支那人の經營するホテルにせよ、土人のロッスメンにせよ、旅客を宿泊さすることを以て營業とする家が一軒でも存在する都會は、州廳所在地のバンドン市は別として五ヶ所の副理事州廳所在地と三ヶ處の避暑地とを除けば、片手で數へられる程しかないのである。鐵道の便は相應によいし、道路は有名なダンデル將軍の鐵血政策以來、五千尺の山上にも蒸汽ローラーを引張あげてゴト〳〵地均しする程に立派なものだ、大東京ともあらうものが日曜學校大會のお客樣の前に首都の面目を全潰にした國とは聊選を異にしてゐると威張つてもみようが、旅舍の一點に到つては實に何とも論外である。廣さ八千方哩と云へば四國一島よりも大きいさうであるのに、旅舍營業者の存在する都市町村十五ヶ所に足らぬとは、嘘の樣な事實である。アンペラ一枚の上に寢かされても差支ない丈けの修業を積んでる筈のない日本からの視察者や、スマラン、スラバヤあたりの自動車階級の會社員さん達が、瓜哇の田舍に就て一向知ることなしに歸つてしまう一半の理由は、正に此點に存するのであらう。唯だ此處に一つの便宜は、政府の手で巡視官吏の爲に要所〳〵に建てゝあるバッサングラハンの制度である。賴めば一泊をも求め得るやに聞いておつたが、當該官廳の許可を必要とすると云ふ不便があるさうで、ついぞ一度も利用した事がなかつたが、今度の登山では其れに厄介になる豫定でやつて來た。其許可を得るのが一つと、第一に登山口の問合せや案内者の選定を依賴する爲に、何より先に此地方を支配してゐるアッシスデントウドノと云ふ土人官吏を訪問した。(後に敎へられた事であるが、此村の入口にある別莊らしい建物は、蘭人の經營にかゝる避暑客專問のホテルであつたさうだ。一泊の料金は食事付十盾と云ふことである。ホテルの主人なら英語位話し得るかもしれず、何かの準備も遠慮なく賴める譯だから、內地から來られる人には其方が遙に

便宜であらう)。

最初の豫定はメラッビ登山丈けであつたから、それに就て必要な事項を問糺すと、折よく其處に居合せた一人の土人が、メラッビの登山口ブララガン村の村長(ルーラー)ださうで、自分自身案内もしよう、御馳走なしでよいならば今宵一夜御宿もしやうと云ふことであつた。登山口に當る最高地點の村落の、而も案内して呉れる者の家に泊り得れば、こんな便利なことはないから、早速それと取極めた。

スロー峠の頂上から左へ十町足らず登つたメラッビ山麓最終の部落がブララガン村であつた。もとよりアタップ葺の薄暗い純爪哇式土人の家で、殊にはバンドン附近と事變つて、土人が貧乏なソロ州内故、村長(ルーラー)の家とは名のみ、爪哇慣れぬ人には泊り兼ぬる陋屋であるけれども、時には野營も覺悟の登山者にとつては、割合に新らしい此家などはむしろ贅澤な宿泊場である。

前庭に下り立つて、花壇の如く奇麗に耕されたメラッビの山麓を越へて、山容尨大なメラバブ山を夕燒の美しい雲の中に見上げた景色は、どんなにか美事であつたらう。メラバブ登山の計畫は此時始て兆したのである。

翌日メラッビ山を前人未到の頂上直下約十米、噴煙濛々として凄まじく活動する所まで踏み分け登つたが、其記事は此處に略することにする。

メラバブ山は海拔三、一四五米(測量部發行五十萬分一地圖による、其他の標高も總て然り。)の標高を有して、爪哇に於ける有數の高山である。其位置殆ど全島の中央部スマラン、ケドウ、ソロ三州の境に聳立する休火山で、スマラン市より溫乎たる其山容を望むことが出來る。爪哇で一番風光明媚の地として推稱したいマガラン高原(ケドウ州内の有名なるボロボドール佛蹟は、マガラン市の南約九哩の地點にある。)に帝王の威を以て君臨するものが、西のスンビン山(三三七一米)であるならば、北に並んだシンドロ山(三一五一米)は餘りに同型に陷るから、それは寧ろ同胞とみて、女王の位置

を占むるものは東に對抗したメラバブ山であるといへやう。登路はスロー峠の頂上を昨日と反對に右に曲り、ヒタ登りに登つて行くと、一條の細徑が自づと頂上に導くさうであるが、めつたに登る人もないので、途中木や叢に妨げられて、メラッビの樣に樂々とは登れず、且つ行程も遙に長いとは、案內役の村長の說明であつた。登山に困難は覺悟の上、實は今迄試みたゲッデ山もタンクバンブラフ山も、其日登つた許りのメラッビ山も、格別骨折りもせず、南洋の登山と云ふ文字から聯想される樣な事實に一度も遭逢せずに濟むだのは、幸福な樣で又聊か手持不沙汰の感じもある、困難は寧ろ興味が深い。明日は一つメラバブの案內を賴むと約束して、二十六日は午後の八時に床に就いた。

晝の疲にグッスリ寢込むだが、千四百米の山上の曉は、流石に寒さ身に浸みて、毛布一枚とレーンコートをかけた丈けでは防ぎ切れず、まだ三時半と云ふに目が覺めた、荊棘を切り開いて登ること故、明日は遲立と前夜の村長の話であつたから、暫くは寢床の中にまご〳〵しておつたが、寒さに丸くなつて徒に隙間洩る月光の白きを眺めてゐた處で仕方がない、兎も角も行ける處まで夜明けぬ中に登つて置かうと心を定めてガバと刎ね起き、苦力と村長とを呼び起した。「アッドウ、寒い〳〵。（デンキンディンキン）トワン未だ早過ぎるじやありませんか。」「むゝ、早くともよい、出發だ、出發だ食物其他持物の用意をせい」と命令した。それから小一時間の後には前夜拵へて置いた辨當や飲用水、ビスケット、副食物等を案內者の村長と苦力との二人に分けて持たせ、寒がる苦力にはレーンコートを着せて、午前四時二十分過頃出發した、昨日の道を一旦スロー峠まで下り、本街道を橫過つて直に正面の登りにさしかゝると、はや既にメラバブ山の一角に足踏みかけたことになり、今迄の黑い肥沃らしい砂質の壤土に引かへて、代赭色の乾からびた地質の相違がメラッビ、メラバブの區別を明に物語つてゐる。肥沃な前者の斜面は村長の家より猶上の方まで耕されてゐるに引かへ、瘠薄な後者は峠の頂上から小隆起一つ越えて來ると、直に短い芝草が地を覆ふて、廣々とした草原となる。利鎌の如き月は皎々と空に冴えて、

千草の露は玉と散り、飄々と高鳴りして谷間より吹き上ぐる曉の風は、野分の佗びしさを偲ばせ、啾々となく蟲の音にいとゞ秋らしい寂寥を味はしめる。靜に眠つたマガランの谷には月光ほのかに、其下に雲が白く屯してゐる。闇の戸張りに包まれたメラッピ山の東の裾野には、高く低く星かと紛ふ灯の光が六七點望まれた。

凸凹はあるが、可なりに巾の廣い道は、軈て丈け一尺高さも三尺には過ぎない叢の中に導いた。道もせに咲いた花の色は、月下にそれと識別し兼ねて、炬火を燃してよく見ると、形も色も大さも躑躅其まゝで名は知らぬが畫の美さを思はせる。五時前後に緩傾斜の草原を登り切ると、メラバブから派出された第二の隆起（スロー峠から數へて）の麓に着く。此處から道は次第に山らしい登りとなるのである。

殘の月は雲間にうすれて、星の光は輝きを增せども、山路を辿る賴りとはならぬので、用意の炬火に照らしてみると、路は左右に分岐してゐる。肝心の案內者も暫く岐路に迷ふたらしかつたが、やがて右の路をとつた。これが第一の誤謬であつた。後に聞糺したら此村長はメラバブの中腹以上は全く生路であつたのだ。

第二の隆起の右を搦んで登る路は、一條の細徑となり、やがて全く其東側に出た。道を誤つたとは其時に心附くべき筈もないから、其中には此隆起に續く尾根の頂あたりに取付いて、あはよくば其處から東方一體六州に亘る大平野を俯瞰し、金色に輝く瓜哇海より堂々とさし昇る壯嚴無比な日出をも望み得べき幸運を豫期しながら、急ぎ足に登つて行くと、隆起の頂は一歩毎に近づき來るに拘らず、依然たる東北の方向をとつて、一向尾根らしい斜面にとりつきさうな氣配もない。此あたり既に二千米前後の標高であるかして、瓜哇の高山に通有な葉はカナメに似て幹の膚は杉に類する、西部の土人がフスッバと呼ぶ植物の生育圈內に入り、惜しや眺望は遮ぎられてしまつた。

少時の後の畫の如き日出の美しさを豫告する黎明の柔かき紅色の光の流れは、何處よりともなく寄

せて來て、梢を傳ひ葉を洩れて仄かに白くはや既に四邊に立罩め初めた。若し日出に遲れてはと吾にもあらず心いら〳〵しく、躊躇する案内者と苦力とをせき立て、路もなき隆起の斜面を分け登つた。茨や蔓草の縱横に蔓つた中を、如何に慣れてゐるとは云ひながら素足のまゝに踏み行く彼等は、偖も便利な足を持つたものだとつく〳〵感心した。三十分間程登つた頃、太陽はまだ昇らないが、夜は全く明け離れて、自分等も亦隆起の頂上と思はるゝ少し廣い地點に到達した。

木の間に輝く空と嬉し氣に鳴く鳥の聲とに、名殘なく晴れ渡つた乾期の曉を想像するが、四邊は依然たる二丈位のフスッパの森で、茨の丈さへ身を沒する程に成長して、眺望處か歩くにさへ中々困難である。山刀を持つた案内者を先に立て、切り分け踏み分け、時には自分でそれを使用しながら、何處かに切り開いた場所もがなと、右に左に探して見るが、何處も彼處も青葉の幕が厚く覆ふて、それかと思はれる處もない。其中に木の間を洩れて鮮かな黄金色の空が覗かれた。もう駄目だと觀念するより外はない、今度は登山路を探す積りで左斜に上へ〳〵と登つて行くと、ヒョッコリ三尺巾の立派な路が左から登つて來るのに出遇つた。それは先刻捨てた細徑の續きではなく、案内者が岐路に迷ふた所の左の路であつて、始て今迄迷路をさまよふてゐたことを知り、日出を見たさに焦つた自分の向不見から偶然ぶつかつた僥倖を喜んだのも束の間で、約一町程で右折すると、第三の隆起の下の稍や廣い平地のある處で路は再び左右に岐れてゐる。方向から判斷して一端左に登りかけたが、右の路よりも狹いので躊躇した、兎も角も案内者を待つことにした。

不圖も傍の叢を見ると眞紅の小菓が曉の星の如く綠の葉隱れに點じてゐるのを見出した。それは在瓜哇五年の長い間に、去る六月ゲッデの山に登つた折、八千尺の高處に於て初て見出した藪莓である(山吹に似た幹に痛い刺がある)。幼い折の野遊びに渴いた咽喉を濡した其の味の懷しくて、二ッ三ッ摘んで味つてゐる間に村長等はやつて來た。此處で彼は躊躇なしに右の路を選んだ自信あるらしき顏付

に信頼して二町程續いて登ると始て東方の打開いた優れた眺望のある地點に出た。これが第二の誤てあつた。

今しも旭日は地を離るゝ三竿の高さにあつて、空に漂ふ雲は猶黄金の色を殘し、地に敷く狹霧は淡き紅の色を含むで、靜に醒むる六州の野を閑寂と悠安の裏に包むでゐる。

霞に明くる春の曙を思はせる詩の如き景色に魅せられた眸に、灼熱の激しさを以て寫つた山は甲斐駒よりも鋭い尖頭から、國亡びたるやる瀨なき悲を煙と吐く紫色濃いメラッビ山である。綿より白き煙の一團は、吹き來る朝風に輕く靡いて、心あり氣にボロボドールの方に流れてゐる。國破れても山河は昔ながらの姿を改めず、世界は大戰の餘殃に苦しむとも、吾には侍妾と俸錢の足れるありと、滿足を一身の苟安に求め、社稷の傾覆も一世の不安も、總てを金色の日傘に遮り隱して、天下の泰平を永久に祝福する葛天氏の民、南國の大宮人が今しも朝勤の途上にあるススフナン王の都ソロカルタ市は、晴れなば彼處と思ふあたりを越えて、東南に稍遠く、中腹以下は神秘の雲深く鎖し、巾廣き峰頭を高く三千二百五十九米の天空に擡げてゐるのが、ソロとマデオン兩州の境に聳立して六州の野を鎭護する神の宿りますラウー山である。それより東に遠く隔つて、マデオン、ケデリー兩州の界を劃するリマン山（二五四三米）は、惜しい哉視界の外に逸したれど、脚下直に目も遙々と下界に續く尾根を蔽ふたフスッバの草相林に旭が照つて、山稜と縱谷とを鮮かに染め分けた美しき眺は、それこそ曉の賜である。

此絶景を前にしてしとゞに濡たる芝草にレーンコートを折り敷き、用意の朝食を喫した。小憩の後出發。再度の迷路とは心附かねば、導かるゝまゝに羊腸の路を辿つてほゞ北へ北へと僅かづゝ登ると、軈て路は谷を迂廻し山嘴を越えて、靑々としたフスッバのゆらめくあたりに蛇の如くウネ〳〵と下つて行くのが遠目にも明に認められた。再度の失敗に吐胸をついた案内者の黑き顏にも、掩ひ難い困惑の色が浮んだ。

此處からメラバブの峰頭と思ふ邊を振り仰ぐと、可成り急峻な斜面が上へ〳〵と延びて、名も知らぬ茨や草が寸土も剩さず密生して、足を踏入る隙間もない。處々に亭立した大木の梢より垂れ下る南洋特有の蔓科植物の太蔓も、猿ならでは傳ふべくもない。半ば豫期してゐた困難に、今こそ此處で出逢つたのだ。もとより逡巡すべき謂はない、村長が傳家の寶刀ともいふ可き山刀がこゝに光榮ある役目を果す可き時が來た。「オイ村長、一體これはどうしたんだ。メラバブの峰は何の邊だか崖が高くて見當もつかないよ」「サヤトワン、路が間違つたやうです、峰は丁度此あたりになります。」「やうですと云ふ疑問詞は必要がなからう、まあ詮方がない、お前の山刀の厄介になるさ、先刻の藪とは比較にならぬから、先に登つてしつかり邪魔になる木や蔓草を切り拂つてくれ、用心しろよ」とこんな會話を取り交した末、何が通つたか僅に草の踏みしだかれた跡のあるのを頼りにして登つて行くと、それも忽ち絶えてしまつた。木の根木の枝を傳りながら、なるべく茨の少なさうな處を選むで登る骨折は、尾瀨の燧嶽を案内者もなしに獨りで登り、最初から道に迷ふて散々苦んだ以來六年振りであるが、あの時は石楠やら偃松やらで痛くない丈けまだよかつた。而し此處は南洋の自然の姿其まゝのジャングルであるから、七千尺の山上とは云へ、太蔓の伏兵やら鋭い刺の逆茂木にうかと草や枝を握らうものなら、飛び上る程痛い目に逢はされる。唯だ此の樣な藪に飛込む場合に何より氣懸りな蛇、それは虎よりも豹よりももつと〳〵怖ろしいあの醜惡な毒蛇は、高山上に於ては曾て見受けないといふこと丈けを何よりの幸と感ずるのである。

この惡戰苦鬪の場所は思の外に短かつた。上るにつれて茨も灌木も低くなり、終には柔かな短い草となつた頃、一しきり急な斜面を喘ぎながら上ると、何處から來るのか出處不明の一條の細徑に行當つた。もとより時折は叢の中に消え失せることもある覺束ない物ではあつたが、而し歩行はずんと樂になつた。それを頼りに上へ〳〵と登つて行くと、やがて細徑は左に折れて、黑く茂つたチャンテ

ギの森に入つてゐる。此樹は常にフスッバより高地に生へ、葉は躑躅によく類似した、丈け一丈乃至一丈五尺近まで生長する高山に特有の植物である。

八千尺を越えたチャンテギの密林の中には、大してひどい下草の生へてゐぬことはゲッデでもバララゴンでも經驗してるから、もう占めたものだ。假令此怪しげな細徑が消へ失せたとて、頂上附近のチャンテギの樹が大きな躑躅程に低くなつた時分に、いくらか骨を折れば濟むことゝ、すつかり安心した目の前にヒョッコリ妙な竹竿が一本現れた。徑一寸餘高さ二丈に近い竹竿が一本、こんな人里離れた高山の林の中に突立つてる丈けでも、誰がこんな場所に何の目的でとは、直に浮ぶ不審であるに、それがまた丁度日本の田舍の古風な家で節分の日にする樣に、徑二尺位の竹籠を上の方に吊してある。不思議に思つて何の爲かと村長に聞くと、それは州界の標的であるといふ。

今迄の細徑は依然西に走つてゐるから、メラバブの峰とは少し方角違いらしいので、折惡しくぶつかつた小徑を村長がまたも右に曲つたのは、自分も賛成したのであるが、下山の折に氣がつくと、最初の細徑を構はず西して、第二の標竹まで行けば、其處に登山の本道があるのであつた。

曲つた折には幽かに印してあつた足跡も何時しか消えて、三度ジャングルの中に囚となつた。しかしそれは大した事はないから、山刀も使はず我武者らに踏み分け登ると、樹は目立つて小さくなり、それに交つて村長がスウドラと呼んだ山の高さを標示する植物が目に止つた。色は天竺牡丹其まゝの青灰色で、葉は柳に類し、天竺牡丹の如き厚味を持つた花は、女郎花の如くに叢生して咲く植物である。ゲッデでもバララゴンでも二千六七百米位から現れ始めた、最初の中は徑二寸位の樹と紛らはしい幹を有してゐるが、頂上では倭少な草に過ぎなかつた。むつかしい學名などは素人に分る筈はないが、せめて英語の名稱でも知つてゐると、讀者諸君の御了解を求め得る見込もある。けれども極めて普通な種類の外は、日本の野山で再三見受くる草や木に就いてすらも、日本の稱呼さへ知らずに過して來た人

間であるから、まして一島の植物六千種、樹木のみで千五百種と云ふ瓜哇に來ては、椰子やバナヽやタマリンドの外は、てんで知らうと思つたことさへない。瓜哇の高山に通有な植物に就ても、フスッバとかチャンテギとか、スウドラとかそれこそ懸値なしの南蠻鴆舌である土人の稱呼しか覺えてゐないことは、甚だ以て赧顏の次第である。

メラバブは今迄登つた四山の中で最も高山植物らしいものに富んでゐるので、何か御參考になるかしらむと考へついて、しば〳〵本誌上に有益な學術的記述を提供して下さる武田博士に御送りしやうと、目についた物を寄せ集めて見た。而しそれは突發的の考であり、殊に素人の悲しさは適當に所置する方法も知らぬから、平素草花の栞など作ると同じく、雜記帳の間に挿んだり、持合せの新聞紙の間に入れたりして、それを翌日苦力に持たせて下りて來た。處が苦力が急な下り路で邪魔物扱にした爲に、それと心附た時分には新聞紙の方は滅茶苦茶にしてしまい、雜記帳の方は花や葉の形の完全なもの五六種を存してゐたが、それも空氣に觸れて眞黑に變色した見すぼらしい姿に變つてしまつてゐたので、殘念ながら棄てゝしまつた。尤も來年の乾期には猶二三登山の目的で登路を調べたものもあるから、出來たら其折に注意して集めて見る考である。

此植物が現るれば海拔貳千六百米以上であることは、前例によりて想像さるゝから、頂上の近いことを知つて氣も足も自づと輕く登て行くと、間もなくチャンテギの樹は絕えて、スウドラ許り美しく密生した緩い傾斜面に出た。それを分け登ると今度はそれも絕えて、今迄他の山でついぞ見たこともない丈け一尺から一尺五寸位の枯草が、一面に苅り整へられた樣に美しい一隆起の頂に出た。草は葦草によく似てゐる、そして其生へ方が丸で妙だ、山の神樣が自ら田植でもされたか、七八寸の間隔を置いて、徑三寸位の一株宛ちやんと生へてゐる。其株は實によく密叢してゐて、試に其一株の上に乘てみると、體量十五貫の自分を地上六寸の上に支へたまゝ、どうしても踏み潰されぬ程頑强な一株を

構成する迄に緻密に叢生してゐるのである。一寸日本には類のない生へ方だ。

草原も美しいがもつと強く自分の眼をひき付けたのは、こゝに初めて雄々しい山容を顯はしたマガラン高原の王者スンビン山と、其雄勁な左のスカイラインを越えて、遙に遠く遠く西の空に水色の山色すゞしき端麗な姿は富士を其儘に、麓は淡い霞に包まれて、中腹以上を幻の山の如くに現出した三四三二米のスラマット山であつた。三度の馬鹿〳〵しい路間違も、ジャングルを分け登る苦しい努力も、今は全く償はれた這般の境地は、登山者のみ味ひ得べき滿足であらう。

蝙蝠の翅を擴げた形によく似たメラバブの主峯は、此處よりも高い一の隆起を越えて、黄を混ぜた潤ひのある藍色の山の肩を、雲來れば淡くぼかされ、雲去れば鮮に現して、遠目にもそれらしく認めらるゝ一條の細徑が、中間の隆起の背を越えて山靈の鎮りますらん高御座へと導いてゐる。

中間の隆起との鞍部に下ると登山本道の細徑に出た。それを辿つてヒタ上りに上る。途中はスウドラの枝や合歡科の植物がうるさく道を邪魔してゐるので、それを切り拂ひながら進む爲に存外暇取つて、頂上に達しても休まずに四五拾米北側に下ると、愈メラバブ主峯の斜面に取付いた。

邪魔する木や枝はずつと減つたが、流石に主峯は主峯丈けに可なり急な登りである。三人共に先刻のジャングル泳ぎに疲れてゐる上に空氣も稀薄になつたとみへて、多少呼吸も苦しくなり、我にもあらず屢休む、試に數へて見たら六七拾歩乃至百歩に一休の割合であつた。

休むで振りかへる度毎に吾が位置は高くなり增り、景色は益美しくなる。殊に當面の南に峭立したメラッビ山の凛とした姿はどんなにか一行の元氣を恢復させたらう。

先に登つた案内者が歡喜の聲を張り擧げたのに勵まされて、せい〳〵息を切つて駈ける樣に登つて行くと、自分等の一行は終に人間の世界を壹萬餘尺の底に振り捨てたメラバブ山の頂に登り著いた。激しい努力の賜として、久戀の山頂を踏んで立つた抑へきれない滿足に輝く目の前に、パノラマの樣

に展開した景色は、何と云ふ優麗なそしてまた雄渾跌宕を極めたものであらう。

測り知るべからざる深さを持つた乾期の空から、音もなく注ぐ豐かなる午下の陽光に、マガランの高原は陽炎に燃えて、床しい懷舊の想を唆るボロボドールも、銃劍の都マガラン市も、均しく幽婉微妙なる青煙に包まれ、其處には現代もなく歴史もなく、たゞ靜寂幽玄な詩の海美の世界と化してしまつた。マガランの大谷を隔てゝ、スンビン山が似たる姿のシンドロ山と立並び、典型的な兄弟山の仲よさを見せてゐる。スンビンの南の斜面には、倒扇のスラマット山が西に遠ざかりて、兎もすれば水色の山容は紺青の大空に溶けんとしてゐる。シンドロ山の北の斜面に引續いて、タンクバンプラフ山(二五六五米)の偏平なる山頂は、それを舟(プラフ)とは誰が見立しか知らねど、北に延びたなだらかな裾野は、此處からは見えないが、舟に因める瓜哇海の波寄するあたりに沒してゐるのであらう。

タンクバンプラフ山の東麓から東に走るスマラン、ケドウ州界の低山は、翠色鮮かに咖啡の花香ばしいジユンジンの森(蔽木に使用す)の清楚なる風趣を思ひ起させるのであつた。その木は合歡の葉を赤松の枝につけたやうなもので、灰色の矗々たる大木の梢に黄昏の淋しさにふさはしい黄色の花を咲かせ、瓜哇にありとある樹木の中で、最も好ましいものゝ一つとして推選するに躊躇しないものである。

脚下に近い富士形の低山は、テイラマヤ山と呼ぶさうである。この山と其北のガラン山(二〇五〇米)との間には、小さきアンバラワ盆地がある。東の方一體は廣闊なる六州の大平野が黄田綠圃の別もなく唯だ蒼茫と展がつてゐる。獨りジヤバラ半島のムリア山(一五九五米)のみ、海は此處よと示し顔に美しい八文字を東西に長く曳いてゐる。昨日メラッピの峯頭からは、雲の絶間にチラと垣間見たのみのマデオン、ケデリー州界のリマン山(二五四二米)も、今日は鮮に認め得たが、此處より東百五十哩(概算)を離れて、大平野の東端に位するアルショナ山(三三四一米)の颯爽たる英姿は、遂に地平線に近き雲中に沒し去つて見る由もなかつた。リマン山よりも近く、尨大なる山容に六州の

野を睥睨するラウー山聳立し、當面の南スロー峠を隔てたメラッピ山の雄々しくまた美しい姿は、何處から仰ぐよりも立ち優つて、メラッピの眞價を知らむと欲する人は、メラバブに登つて見るがよいと斷言したい程である。ボロボドールの南ケドウ、ジョクジャ兩州の南方の低山は、もえ立つ陽炎の下に起伏してゐたと言へば足りやう。

眼界の及ぶ所八州に亘り、廣袤亦全島地積の三分の一を俯瞰する一萬五百尺の山頂から數へ得る目星しい山々が拾座に過ぎぬと云ふ事は、孰れの山も獨立して廣い裾野を持つた美しい圓錐形の火山である爲で、眞に火山國中の火山國といふ可き爪哇に於てのみ見られる景色であらう。日本アルプスも大方探り盡された今日此頃、同人諸士の來遊を切に希望する次第である。

南洋の山には森の女神の嫉を受けてか、高山の誇とする花は極めて乏しいのである。自分の知れる限りでは最も花の多いと思はれる此山すら、頂上附近に七八種の花を見たのみである。恐らく詳しく探した所で十種の上は多く出まいと想像される。其中名を知つてゐるのは菫一種のみで、もつと美しい花は外にもあるが、自分にはとても說明の任に堪えない。

メラバブの山の頂は、蝙蝠が翅を擴げた樣に低い三つの隆起を持つた主峯と、北に四五十米低い鞍部を隔てゝ高さほゞ相等しき別の一峯とから成つてゐる。兩峯から派出した尾根と尾根との間には、綠の山稜と暗紫色の谷とが縱橫に錯雜した神祕的の深谷を形作り、スロー峠以來殆んど石を見ずに登つて來た此山も、此方面に於て可なり美事な斷崖や絕壁を峭立せしめ、灰色のスウドラや嫩葉の淡紅色を呈したチャンテギの樹などが、苔蒸した巖の色といゝ對照をなしてゐる。

不圖見ると北方の峯の狹い絕頂に何やらむ一軒の家がある。夢にも豫期しなかつたこの一軒家は、これが日本の山ならば何かのお宮とも見られやうが、爪哇では其想像は當りさうもないから、再び村長に問ふてみると、其返答は意外なものであつた。何でも此メラバブ山の絕頂は、バタラグルーとか

呼ぶ全能の神様の神域で、瓜哇語でデワタン（天國とでも譯してよささうな說明であつた）と稱し、土人等が尊崇して措かない靈場であるさうな。其神様に仕へてゐる行者が一人其小屋に住むでゐて、敬虔の念深い信心家や願望を持つた土人等は、この御山に參詣し、其行者から神様に御願して貰ふのであるといふ。話が大分日本臭くなつて來たので、好奇心と、都合によれば一泊賴めると云はれた爲とて、幽邃無比な高山頂の夜景を見たくなり、兎も角も行者とやらを訪ねてみることにした。

急峻な崖道を一旦鞍部まで降つた邊は、可憐な花が岩石の間に星の如く咲いてゐる全山中の最も花の多い場所である。先にはよく見えなかつた東方にがつくり開いた大壑の形も、此處から見るのが最もよい。

鞍部の中央に頂を擡げた小隆起の東をからんで、更に北方の峯の斜面にかゝると間もなく頂上の小平地に達して、古びてはゐるが思の外しつかり作つた小屋の前に出る。生憎戸はピタリと閉つてゐて主の行者は居りさうもない氣配だ。苦力等に四方を探さしても見當らぬと云ふから、無作法は承知の上で戸を開かせて中に入つた。寒さを防ぐ爲に四方とも閉切つてあり、僅に戸口と小さな明取り丈けしかないので、焚火の油煙に內部は黑く煤けてゐる。廣さは十疊敷位しかないが、床は作つてある。炊事の道具やら豆ランプやら、焚火をする上には自在鍵まで懸つてゐる。主は留守でもこれ丈の設備があれば、食物と夜の物の用意さへして來れば、眞黑な南洋の行者などには逢ふ必要もないのだから、幾らでも泊つて居られる譯だが、生憎と今度許りは昨日メラッピへ登つた時の見當で、無駄な荷物は一切省いて日歸の用意しかして來ない。寒さは焚火で凌ぐとしても、腹のすくのには何とも防ぎ樣がない。詮方なさに最後の窮策として、僅に殘つた飯とビスケットとを今宵一夜の糧とし、自分獨り此處へ泊るから、お前等二人は直に下山して、明朝早々辨當を持つて迎ひに來いと命令した。すると、トワン、貴所が其氣なら自分等は一夜位食はずともよいから、一緒に此處に泊りましやうと云ふ。考へ

てみると土人等は年に一度の齋月(ブラブオアサ)(日中は絶食する月)の習慣で、空腹に對する抵抗力は日本人より強い筈である。自分は何日またと好機會の來るかを知らぬ高山頂の良夜の美しさを心行くまで味ひたい希望に燃えて、一夜の空腹位を苦にしない積りだから、とう〳〵其夜は三人其處に泊ることにした。

掃除をしたり焚火を作つたりして、小一時間も過ぎた時分、焚物を探しに出た苦力が四十格好の小作りの男を一人連れて來た、思ひ懸なくそれが主の行者であつた。銅色の膚へサロン一枚腰に卷き、長く伸ばした髪の毛をグル〳〵卷きに束ねて、其顏色は如何にも山人(オーランゲン)らしい醇樸さと好人物たることゝを表はしてゐるが、無智は其眼の色にも現れて、豫期した威嚴や行者などゝ云ふエラさうな面影は何處を探しても見當らなかつた。もとより藥採りになど行く柄でもなく、擔いで來た籠の中から薩摩芋とタピオカの芋とが轉り出たので、三人をドッと笑はせた。昔は木の實木の葉を生食したといふ此行者―名前は聽いても覺えられさうもないから、矢張行者と呼んで置く―も、今は米や芋を常食にするさうな。人間の食物を食ふ樣になつては、行者離れのしたのも無理はないが、空腹を抱へて一夜を明さうとした吾々にとつては、なまじ藥草よりも薩摩芋やタピオカ芋の方がどんなに有難いか知れぬ。夜をも待たず早速燒かして御馳走になる。氣のせいか馬鹿に甘い芋であつた。泊り場所はよし腹拵へも出來たので、これで安心と氣を落ちつける。

夕になると太陽はスンビンの山背に沒して、山は金色の彩光に榮え、須臾にして天地蒼茫と暮れ行く折しも、二羽の鳶が高く高く舞ひあがつて、軈て西南の空遠く、碧波荒蕩たる印度洋を慕ふが如く飛び去つた。

因にメラバブの登山路は、ボヨラリより尙ほ北に在るシンガンペル村の部落(カッポン)チャンデーと云ふ所から登るのが本道であつて、道も樂であり距離も短く、四時間程で達し得るさうである。小屋の背後に設けてある雨量計を調べる爲に、ムアラボーと云ふエステートからは、五日毎に人を派出する

由を聞いた。なほ本山との鞍部を西の谷間に約十二三町下ると小噴火口があつて、湧き出す湯は丁度入浴に適溫であるといふ。

其夜生憎宵から細雨シト〳〵と降り出して、唯一の希望とした月夜の山上の美觀は、終に眺めることを得ないのであらうか。しかし人圏を絶した山頂の孤屋に、風もなくしと〳〵と降る雨の音を聞くことも、亦得難き靜寂の境地であらう。

雨降り止まぬので、午後八時頃一しきり焚火を熾にして後に寢に就いた。晝のうちに刈らして置いた枯草を床に敷き、生乾きのものを束ねて枕とした。これこそ文字通りの草の褥に草枕、それが思の外に寢心持がよかつた。

焚火が消えたので夜寒に目が覺める、時計を見ると丁度十時を示してゐた。窓外に雨の音は止むで、柔かな月の光が流れてゐる。早速戸を排して外に出ると、空は一面にまだ薄雲に覆はれて、朧の月はあらゆる物を美しく見せてゐる。マガランの谷も大平野も、低い霧に白く鎖され、遠山は消なんとして淡く、近山も亦漠糊としてゐる。メラッビの雄姿のみは、尖頭いよ〳〵雲霧を劈いて月下に傲嘯してゐる。其淀みなき西の斜面に灼熱の色赤々と輝いてゐるのは、昨日散々尋ねあぐんだ新爆發の時の溶岩流である。地上の萬物を薄絹に包める如くに美しく見する朧月夜に、この世の最も凄ましきもの、一つである火山爆發の跡を眺めて、そゞろに道もせに散る山櫻花に駒止めた昔の武士のゆかしさを連想するのであつた。

明る廿八日は東雲の空と共に起き出でゝ、壯嚴無比なる日出を望み、一夜の宿を借りたしるしに贈つた僅の謝禮に、態々送つてくれる行者を先に立てゝ、道こそ狹いが間違のないスロー村よりの登山本道を下り、午前十一時と云ふに村長の家に歸り著き、午食の後直に出發し、夕方の汽車にてカラテンの横山氏の宅に歸つた。

雜錄

○雛鶴峠追記

『山岳』第十四年第二號九〇頁に雛鶴峠に就いて其當時手元にあつた材料によつて記して置いたが、昨年四月中旬私は自ら雛鶴峠を通過して、雛鶴姫神社をも見又土民から多少の材料を得たのと、其後秋山村並に盛里村役場に照會して得た回答とによつて、不完全乍らも復び一文を草することゝした。

本論に入る前に一寸訂正して置きたいのは、九一頁上段に、秋山と盛里と道志と三村の境に當る一三一〇米の山をタンノ入り山としたのは誤謬であつて、これは寧ろ朝日山と呼んだ方が正しいことである、尙タンノイリ山といふのは此朝日山から北に出た一一一五米の東西に長い頂を持つた山で、其北面から東タンノ入リ西タンノ入リの二たつの澤が出で、終に合して無生野で秋山川に入ることになる。タンノイリ山の西に引く尾根は大ダミ峠に連つて、秋山と盛里との境界をなすのである。

無生野から大ダミ峠に向ひ大ダミ澤の右岸に沿うて上つて行くと、數丁で右から開けた澤が合流するのを見る、これが即ち楢山澤（ナラヤマ）で、その正面にはアナシ峠の直ぐ西の八七七米の峰が茅戸の斜面を見せて居る。合流點の直上で大ダミ澤をこえると、道の右手の森の中に鎮座する宮が即ち雛鶴姫神社である。數階の石磴を登ると、間口三間奥行二間の新らしい籠堂樣な拜殿があつて、其の中に祭壇を設けて小社を安んじてある。拜殿の外部には雛鶴姫綴連王神社の札が見えて居る。折よく來合せた炭燒きに尋ねると、祭禮は舊三月十六日だと敎へて吳れる。社の周圍にはスギ、ケヤキ、イチアウ等の巨樹があつて、此森の數間前には一株のミツマタが植ゑられて居た。

雛鶴姫綴連王神社の緣起祭典等に關して、秋山村役場に取調方を依頼した處、氏子總代から左記の如き回答を得たので、之を原文の儘掲載するこ

にする。

「上申書

「右ハ當組ニ鎮座有之候雛鶴姫神社ニ對シ日本山岳會ヨリ取調方御申越相成候趣キヲ以テ御申達ニ相成候ニ付取調候處左記ノ如シ。

「雛鶴姫神社ノ縁起

「姫君家臣ヲ伴ヒ大塔ノ宮護良親王ノ御首級ヲ奉護携帶シ鎌倉ヲ立チ去リ甲斐國都留郡秋山村山内大居蘚（里人名ケテ王ノ入山ト云フ今ニ現存セリ）ニ潛匿シ居リ後同村原組ヲ越エ無生野ニ移リ御懷胎中峠ノ麓ニ於テ御首級ヲ抱テ十二月廿八日亡フ（年號不詳）故ニ峠ヲ雛鶴峠ト云フ當時門松ヲ廢シ椚ノ木ニ香ノ木ノ枝葉ヲ挿シ門松ニ代用シタリ新年ヲ迎フルノ例トス今ニ其古例ヲ存ス

「社格

「維新以降ハ村社神明神社ノ附屬社トス

「例年祭日

「大塔ノ宮護良親王ノ皇子征夷大將軍綏連王子親王ノ跡ヲ慕ヒ來リ土著シ應永九年三月十六日薨シタルヲ以テ之レニ合祀シ年々三月十六日ヲ以テ例祭トス

「祭典ノ次第

「年々氏子ニ於テ祭典費ヲ寄進シ奉リ祭典ヲ執行ス

「前書ノ通リ取調奉上申候也

「大正九年七月

「山梨縣南都留郡秋山村

「右社氏子惣代

「原田由太郎㊞

「原田虎松㊞

「藤本雅經㊞

「藤本梅吉㊞

「加藤虎松㊞

右「取調書」にある「大居蘚」はオイノリと讀ませるのだろうと思ふが、これは朝日の東北面から出て、栗谷（クリヤ）で秋山川に合するオイノリ澤の奥を指すものと考へる。オイノリ、王ノ入りの何れが正しいかは私には判らないが、栗谷で此澤に架してある橋には「王の入橋」と記してある。又峠一つ西の盛里村の字大平をオイダヒロと呼ぶことに

ついては『山岳』第十四年第二號九四頁に掲げた通りである。これから考へるとオホをオイと發音することは此の邊では稀でないかとも思はれるが、王ノ入リはオホノイリであるか又はワウノイリであるかについては、斷定するに苦しむ處である。「甲斐國志」に大野入りと記してあるのも同じ土地と思はれるが、或はこの宛字が正當かとも思はれる。尙序に申して置くが、オイノリ澤といふ名は此の附近では他に北都留郡の九鬼山の東面から出て朝日小澤に流れるものにも命じてあ

雛鶴姫綴連王神社　武田久吉氏撮影

る、そしてこれにあてる漢字は「追乘」であるといふことである。

大ダミ峠の道は、雛鶴姫神社から先は、依然大ダミ澤の左岸に沿ふて十分間も上ると、右からイヤゲ澤が流れて來る道は寧ろ眞直に行けばイヤゲ峠にかゝることになるのだが、稍急に左に折れ之曲して上ること十分許りで二株の老松と三體の馬頭觀音のある小高い所に上りつくが、こゝから東を望むと秋山川兩岸の山が蜿蜒とうねるのが手にとるが如く見える。二本松から數歩上るとも

う峠の頂きて、南には岩殿澤上流の連峰や日向船日陰船の峰を手にとるが如く見ることが出來る。

峠の道は馬の交通が自由な程よい道で、殊に盛里側は日を受けて暖い。二十分も下ると岩殿澤の左岸に數株の老松と社らしい建物が見える、流れを渉つて之に近づくと、これこそ盛里村の雛鶴姫神社で、覆屋とも思はれる床のない建物の奥の段上に小祠を安んじてあるが甚だ粗朴なものである。棟札には

神直大日命
謹請雛鶴姫命　鎮座
大直大日命

とあつて裏には

大工　南巨摩郡身延町　山田折太郎　當四十六年

明治二十四年八月六日

祭主　朝日組敎導職　日向儀市
朝田留治郎
村内氏子中

とある

社側にある數株の老松中の二つは「供ノ松」と稱するもので、嘗て野火の爲めに樹下の枯葉が皆燒けた時、一時は梢上の綠葉迄枯れたが、翌春新に芽をふいて翠綠舊の如くなつたので、俚人は驚き怖れて、それ以來此松の附近で火を焚かないといふことである。

盛里村役場に照會して得た回答を次に掲げると

「南都留郡盛里村　雛鶴姫神社

「一祭神　雛鶴姫命

「一所在地　南都留郡盛里村朝日曾雌

「一祭禮月日　毎年四月二十日（陰曆三月十五日ヲ陽曆四月二十日ニ改ム）

「一緣起　石船神社ヲ距ル三十餘町正東ニ方リ大旅峠アリ一名雛鶴峠ト稱ス麓ニ社祠アリ之レ護良親王ノ侍妃雛鶴姫親王御災害ノ後臣下ト共ニ鎌倉ヨリ落チ給ヒシ途峠麓ニテ病ノタメ逝去セラレタルヲ以テ此ノ地ニ葬祀シタルモノナリト古ハ社殿及墳墓アリシモ安政六未年洪水ノ災ニテ墓標ヲ流失シ今ハ僅カニ社殿ヲ存スルノミ同社ノ側ニ二本ノ老松アリ是

レ雛鶴姫ノ供人タリシ木枯太郎ノ墓標ナリト云フ此松樹ノ奇ナルハ數回野火ノタメニ綠葉燒失スルモ忽チ亦綠葉ヲ生ジ未ダ嘗テ枯色ヲ呈セズ古昔ヨリ傳ヘテ供ノ松ト稱ス」

又『甲斐國志』卷之五十四古蹟部十六ノ下に

「〔雛鶴姫塚〕　曾雌ヨリ秋山ヘ越ユル山路ヲ雛鶴峠ト云（一日大ダミ峠）山路ノ傍ニ古塚アリ塚上ニ小梨子ノ木ヲ植ウ土人相傳ヘテ雛鶴姫ノ塚ト云是ヨリ下壹町許ニ又古塚アリ姫ノ從者ノ塚ナリト云然レドモ此姫ノ何人タルヲ詳ニセズ」とあるが、此塚は安政六年の洪水に流れたのであらう、見當らなかつた。

雛鶴姫神社から一時間も下ると馬場（バンバ）の石船明神の森に來る。雛鶴姫が鎌倉から携へ來つた護良親王の御首級を祀る處のものであるといふことは、昨年も記した通りであるが、今盛里村役場から得た回答を次に掲げることにする

「山梨縣南都留郡盛里村　村社　石船明神

「一祭神　底筒男命　中筒男命　表筒男命

「靈主　故兵部卿護良親王殿下御首級奉藏置

「一所在地　山梨縣南都留郡盛里村朝日馬場

「一祭禮月日　毎年八月一日（陰曆七月一日ヲ一昨七年ヨリ陽曆八月一日ニ改ム）

一緣起　本社創立ハ延元二年七月中本村字高根山頂ニ社祠造營石船大神ト稱ス元朝日郷七ケ村（本郡三吉村ノ内玉川、戸澤、本郡禾生村ノ内井倉、及本村與、樋、朝日馬場、朝日曾雌、及北都留郡大原村ノ内朝日小澤）ノ郷社、該所ハ地形峻嶮祭祀ヲ營ムニ不便ナルヲ以テ其ノ面前ナル字宮ノ前（現今ノ境内）ニ遷宮、抑モ神體靈主ト奉ル御首級ハ故兵部卿護良親王殿下ニシテ御面長八寸横五寸三分額ノ周リ一尺八寸額ヨリ腮圍リ二尺一寸右眼ハ洞開シ左眼ハ水玉ヲ以テ嵌ス顴骨以下兩頰ノ腐蝕部分木片ヲシテ補塡表面漆塗リ裏面朱ヲ盛ル齒大臼八枚存ス土俗其凡ナラザル御髑髏ノ發見ヲ憚リ石函ニ納メタリ今ヤ石函破壞ノ後木製ナル箱中ニ奉置シタルヲ五六年前ヨリ硝子製首級函ヲ以テ首級ヲ蔽ヒ尙ホ木製ナル箱中ニ納レ宮殿内ニ奉置ス御首級ノ由來鎌倉開府以來陪臣權ヲ弄シ朝綱日ニ弛ク天皇上皇赫怒シテ討伐ノ軍ヲ發シ玉フ承久及元弘ノ軍是也兵部卿護良親王ハ後醍醐天皇第

二ノ皇子ニシテ始メ天台ノ座主法親王タリ法衣ヲ脱シテ義兵ヲ南和東紀ノ間ニ誘導シ微行シテ吉野山及其ノ近郷ニ行啓シ玉ヒ元弘恢復ノ日ニ逢フ此時ニ方リ足利尊氏兄弟又叛旗ヲ飜ヘサントシ事ニ托シテ誣ヒ國家無比ノ功績アリシ親王ヲ鎌倉ニ幽セラルルニ至ラシム親王鎌倉ノ土牢中ニ坐ス北條時行義兵ヲ擧ゲテ足利直良ヲ鎌倉ニ攻ム直良鎌倉ヲ去ルニ及ンデ家人淵邊義博ヲシテ親王ヲ弑シ奉ラシム此時豫テ親王ノ爲メニ謀ル事アラント密ニ鎌倉ニ潛匿セル左近衛中將藤原宗忠朝臣及侍嬪新按察使典侍藤原玄子（稱南ノ御方）尾治滋子（竹原八郎宗規一女稱雛鶴姫）等籔中ニ投棄シアリシ親王ノ御首級ヲ拾得シ且ツ其ノ屍ヲ火ニシ之レガ事實ヲ具シテ朝廷ニ奏上センコトヲ議リ左近衛尉和爾郎義勝（後補富士大宮司任越中守）等中將宗忠ヲ扶ケテ御首級ヲ奉ジ富士道者ニ假裝シテ父右近允義尊（後南朝宣補大宮司）ガ住セル甲斐國宮下ノ館ニ來リ衆議ノ末同年八月七日御首級ヲ小室淺間神社ノ内宮ニ隱秘シ侍嬪藤原氏及尾治氏ハ馬場小太郎兼綱菊地小次郎隆文等ニ擁セラレ將ニ京師ニ向フニ道ヲ東海道ニ取ラントセシモ賊兵途ニ要スル懼レアルヲ以テ更ニ轉ジテ相州大山ヨリ津久井郡青山及甲斐國ヲ中山道ニ取ラントス尾治氏身例ナラズ秋山新藏人光政ガ都留ノ館ニ入リ一王子ヲ分娩シテ遂ニ鬼籍ニ入ル藤原氏ハ菊地隆文氏ヲ具シテ事ヲ京師ニ奏聞ス後和爾郎義尊父子富士大宮司直時等ト富士十二郷ノ兵權ヲ爭フニ至リテ親王ノ御首級ヲ光政ガ男秋山太郎光忠ニ托ス光忠地ヲ選ミ小祠ヲ造營シ石函ヲ設ケテ之ヲ納レ祭祀ノ禮ヲ取ル

「石船明神祠ノ稱蓋シ此ニ肇ル」

これによると祭禮は舊七月朔日を改めた八月一日とあるが、一月十五日（これも一と月遲れの、新暦では二月十五日になるといふ）は初祭りで、氏子總代が御首級の引つぎをするので、其の時に之を村民に拜させるのだといふことである。

今迄に得た材料はこれ丈けで、道志村役場にも道坂峠の雛鶴姫神社について照會したが、半年以上を經た今日迄何等の回答に接しないのは遺憾である。（武田久吉）

○樽前山の近況及支笏湖

樽前山は明治四十二年の大噴火以來大正六年に小爆發して、明治四十二年に生成した圓頂丘（大井上氏の新出山）を、東西に走る裂罅を生じ、それより盛んに噴烟する樣になつて以來、著しい變化もなく經過したが、本年六月頃から時々山鳴りや異常な噴烟を續け、殊に六月六日午後三時半頃一回、七月十七日午後六時半頃又一回轟音と共に黑烟高く騰り壯觀であつたが、降灰の範圍等は極狹かつたらしく、六月六日のものにあつては、錦多布川上流に於てうつすら降灰して居つたことを、六月十三日中腹の森林迄行つた時に目擊した。七月十七日に於けるものも恐らく此位の程度に過ぎなかつたらうと思ふ。

が七月廿二日夜十一時半又も大轟音と共に爆發して、多量の降灰と地震とを伴つた。

其日は朝から大變噴烟の量が少かつたのに、幾分不審を抱いた位であつたが果然爆發して、丁度其夜は例の不快なガスも晴れた星空であつた丈に、苫小牧からは黑烟の上騰丈は可成よく望む事が出來たが、降灰は極微量で翌朝草葉上に僅に認め得たに過ぎなかつた。しかし約二里西方の錦多布では一時咫尺を辨ぜぬ位の降灰があり、東麓の勇振、支笏湖畔、千歲、漁方面では降灰はなかつたけれども、閃々たる火柱を伴つた物凄い黑烟の騰上を望むと共に、一時間餘に亙つて微震を感じたさうである。

私は廿五日の休日を幸ひに爆發後の狀況視察の爲、其夜は山上に一泊の豫定で午後一時二分發の列車で苫小牧を立つた。

約一里小糸魚の中間驛を過ぎる頃から漸く草原の降灰を認め、錦多布に近付き滿目灰色を呈し、常ならば眼覺る計りの大花野の美觀は無殘にも汚點づけられて、其間を放牧の馬の群がバツバツと灰塵を擧げて馳驅するのは一趣であつた。

一時三十九分錦多布驛着直ちに路を錦多布澤にとり、炎天下の草原の一筋道を行く。ウラケタデ・オホイタドリの葉には一分位灰が積つて重たげにうなだれて居り足許からは歩々灰塵が舞ひ立つの

で、見る間に紺の脚袢も白くなつた。此の邊の降灰は私の見た處ではせい〳〵二分位のものだと思つた。質は可成ザラ〳〵して居つて、午前中ガスが深かつたので未だ濕つて居る處もあつた。

約一里御料林の入口で小憩。闊葉樹密林中の林道をゆるやかに登つて臺地に出で、又約一里左折して晝猶暗き針闊混淆の原始的密林中を灌木を潜り、雜草を分けて登る。極傾斜の緩な登りであるが、ひっきりなしに樹葉上の灰が落ちるのと、草に積つた灰とで汗ばんだ身體中灰にまみれて、全く閉口した。

やがて樺楊混淆の陽樹林に移行してからは益々灰が厚くなつて、雜草やウコンウツギの藪を分けるのは實に不快であつたが、偶然熊の通行した踏み分けを見付けて、それについて錦多布澤のカツチ（溪流の最上部又は行止りをいふ）へ入り込むことが出來た。

最早東峯一帶の外輪山は前方間近く立ち塞つて、淡褐色の噴烟がゆるやかに東になびき、

異臭が鼻をついて來た。

暫くミヤマハンノキの藪と灰とに苦闘して、シラタマノキやツガザクラの密生した岩礫地に出で、ホット一息つく。此邊は二寸許り降灰があつてむしろ踏心地がいゝ位だ。

澤のずっと上方でツネ（尾根をいふ）を左にからみ、外輪山の約八合目邊へ辿りついたのが八時頃であつたので、四邊に焚火の材料もない燒石の斜面であつたが、靜かな夏の夜の事とたかをくゝって、此處で露營することに決めた。

山麓は心地のいゝ雲の海であつたが空はよく晴れて十日の片割月が冴えて居た。九時頃月光を頼りに外輪山の一角へ登る積りで、急斜面を可成登つて見たが、下から淡い霧が捲ひて來たので中止した。夜中熊に押へられた夢に驚き眠覺めてからは、強い風と寒さとで兎角寢覺め勝ちであつた。其間何時頃であつたか月も落ちた暗黑の夜の底に、雲の海から開かれた苫小牧町の一團の電燈の光を望み見た時の美觀は可成深刻な印象であつた。

翌朝午前三時出立。外輪山の東南の一角に辿りついた頃には夕張山の邊から曉光が洩れて、西峰の斜面を軟かに照し初めて居た。

前方を見ると中央の黑い圓頂丘は薄く白烟を擧げて、先夜の活動もケロリと忘れた樣に靜まり返つて居つたが、裂罅の東側に沿つていやに白茶けて何となく形に迄異樣な感がしたので、よく見ると其は岩石を吹き飛ばした上猶二個の大穴が裂罅に沿つて、上下に各眞黑の口を東に向けて開いて居るのであつた。其の上のものは徑約十間下はその半位の大で可成物凄く望まれたが、噴烟は其朝は見えなかつた。

兎に角東峰の最高點（一〇二三・八米）迄登ることにして、鋭いツネを右に登つたが、その間多數の岩塊が大は徑二尺內外のものが徑五尺位の凹地を作つて落下して居るのに、驚かされながら最高點へとつつくと、この邊一帶は降灰は極く薄いのに引かへて、大小無數の岩塊が落下して居つて、私の概算では十間四方に約四十以上を認め、又三角點の櫓の柱が一本折れて、生々しい傷口を露は

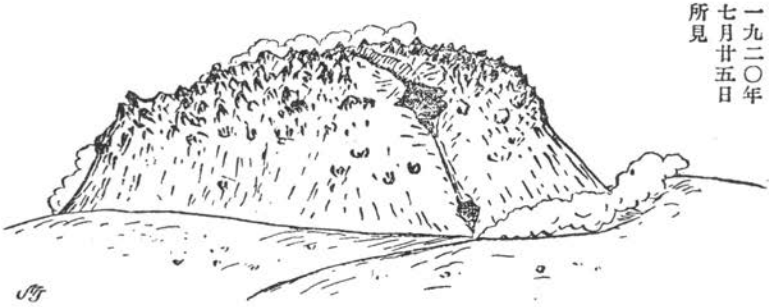
して居つた。

今朝の此の頂からの眺望は可成壯觀で、殊に東方雲の海の彼方嚴かに曉天を背負つた、夕張、日高連山と、西北遠く秀姿を誇る眞狩岳とには全く魅せられた。

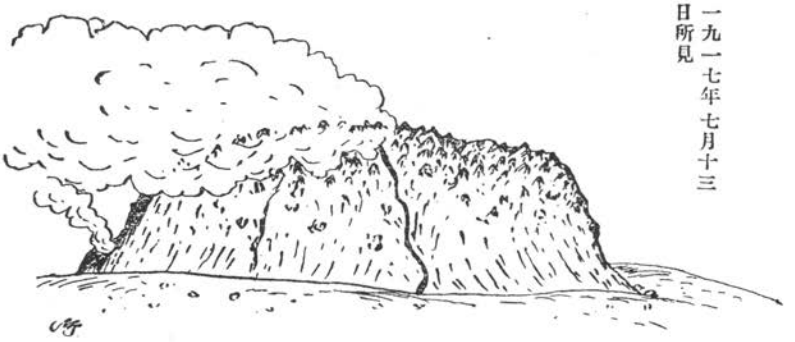
午前四時一氣に火口原に下り、其南部を半周して覺生空澤(オボツプカラツハ)の左ッネを下り、空澤沿ひの登路へ出たが、路々降灰の少量なのには意外な感がした。

最初空澤の右上緣の森林を通過するので、昨日の様子では可成灰を浴びることゝ思つたのに、殆んどその懸念もなく空澤筋へ下つて、半駈足で八時錦多布驛へ出ることが出來た。

其後の見聞等を總合すると、六月以來の活動は圓頂丘の東側裂罅に起つたもので、七月廿二日午後十一時半矢張その部位に轟音と共に約一時間半爆發を繼續し、當時の風向に支配されて、降灰は錦多布澤及錦多布を中心に、左右に社臺及苫小牧方



一九二〇年七月廿五日所見



一九一七年七月十三日所見

面へ降灰の量を減じ、錦多布では厚二三分、錦多布澤の上部では約二寸、苫小牧及社臺は極微量であつた。

噴烟は閃々たる火柱を伴ひ、苫小牧では明瞭でなかつたけれども、東麓一帶では非常によく望見し得たさうである。猶東麓一帶では可成長く微震を感じ、勇振、支笏湖畔では人々は多少狼狽したさうで、それは遠く千歳、漁迄波及したさうである。

山頂附近では前記の如く、裂罅に沿ひ上下に大小二個の大穴を生じ、降灰は微量なりしも、爆裂口から東方へ約十町許り岩石を飛ばして居る。其二個の爆裂口は其後沈靜に歸して居るらしく認められた。

其後八月十一日午前十時半頃ゴロ〳〵と云ふ轟音と共に、高く烟をあげたが、苫小牧方面では雲に遮ぎられ充分に見えなかつた。しかし直ちに雲が晴れて山頂を露はした頃は、圓頂丘の西半部から非常に多量の噴烟があつて、最初直立し末は東方に折れて居た。しかし支笏湖畔では非常によく望まれて、折柄御成中の久邇若宮兩殿下には、數枚の御撮影をさせられた由に洩れ承つて居る。

次手に檜前登山路の數條を紹介すると、

一、南麓よりするもの、

（イ）錦多布驛に下車し（一寒村に過ぎざるも旅館一あり雜貨も一通り辨ずることを得）西北約一里高木牧場に至り、覺生空澤を登るので、高木牧場から西峰（九九四米九）の頂上迄約三里弱、登路明かに且非常に緩で、錦多布から上り約五時間、下り約三時間乃至四時間を見積れば充分であるが、東峰に廻り火口原を一周するのには約一時間の餘裕を要する。

（ロ）錦多布驛から錦多布澤の御料の林道を辿り、約二里、左折して原始的森林を分け、東峰に登るもので、森林中は登路全然無く灌木雜草を分けて行くのである。錦多布驛から約六時間內外を要する。

この登路では御料の針闊混淆林中にアカマツが自然生狀に僅か許り混生して居るのを見ることが出來る。これは可成問題のもので、多分松前藩で植樹した遺物であらうと云ふ憶測が一番有力であ

る樣だ。又エゾマツ及アカエゾマツの純林及其稚樹の旺盛な發生（一坪三百本以上）は確かに一大驚異であるかと思ふ。

（ハ）社臺驛に下車し（旅館なし、雜貨店數戸あり）、東に約半里鐵道線路を戻り、樽前川の路を行き約二里路なき森林又は空澤を登り西峰に出るもので、社臺から六時間乃至七時間を要すこの登路の下方に於て樽前川が二ヶ處に峽流を作つて居る處を、俗にガローと云つて可成壯觀である。又上部森林の盡くる處には偃松が點生して居るが、樽前山の偃松は東北側に只一本自生する外、この方面に見らるゝのみである。

二、北麓よりするもの、

（イ）モラップ登路

王子製紙會社專用輕便線により苫小牧より、約二時間支笏湖畔に至り、舟にて約一時間モラップに上陸、クチャウワッカナイを登り外輪山の北部に登るもの。澤口より約二時間半乃至三時間で達する。澤筋に二ヶ處許りロープが欲しい處があるが、その他は殆んど大道を行くに異ならない。

猶モラップから郡界の伐開を登ることも出來るが、今では伐開も荒れて夏分は容易でないと云ふ話である。

（ロ）シシャモナイ登路

湖畔から舟にて約二時間乃至三時間シシャモナイ（志寒內）に上陸、それから約二時間で外輪山の北西側に登ることが出來るが、自分は未だ踏査して居ない。人の話によると最も容易な登路ださうで、且湖岸のエゾマツの純林は山頂から下瞰して實に見事なものである丈に林內の氣分も亦格別だらうと思はれる。

この北麓からする登路は是非支笏湖畔に出る必要あるだけに、興味の大なるものがあらう。支笏湖は苫小牧町の西北約七里に位し、周廻十七里、東西三里、南北最狹部一里十町、湖面は海拔二四八米最深水部三百尋に達し、水質清澄、濃藍色を呈し、無臭、無味で極弱アルカリ性を帶びて居る。

湖岸には北方に漁嶽（イザリ）、恵庭嶽（エエニワ）（一三一九米七）西方及西北方にニナルシュトマヌプリ、白老嶽、

南方にフウプシヌプリ（一一〇二米五）、樽前山（一〇二三米八）東方に紋別嶽（八六五米八）等環聳し、千古の原始林これを裝ひ、翠色湖面に映じ、實に幽邃を極めて居る。その水は紋別嶽の南麓に唯一條の出口を求め、千歳川となり流下して居る。その流水を利用して王子製紙會社にては第一乃至第四發電所を經營して工場動力の源泉をなす外、遠く札幌、小樽へ送電して居る。現今專用鐵道は第四發電所迄行つて居るので、それから數丁下流の鮭孵化場を視察し、更に二里千歳市街地に出ることが出來る。

湖畔には千歳川の出口―銚子口―に王子の社宅及道廳孵化場がある外は、人夫飯場及船大工の住家が一戸あるきりである。

又此處から舟で約三時間對岸惠庭嶽の麓丸駒溫泉へ行くことが出來る。全く浮世を離れた仙境で惠庭登山の根據地として唯一のものである。どこの湖水にもよく龍神に關した傳說があるものだが、支笏湖のは少し毛色の變つた傳說を有つて居る。それは昔湖水の主であつた巨大なアメマスが居つて、或日大鹿と大爭鬪をして、首尾よく鹿を呑んだ迄はよかつたが、其の苦しさに堪へきれず、半死半生で湖面を浮游し、遂に千歳川の銚子口迄流されて、その水路を横に塞いだまゝ、敢なく死んでしまつた。それからと云ふものは千歳川に全く水が涸れてしまつたので、下流の人間が不思議に思つてやつて來て見ると、此始末に一同驚いたといふのである。

今でも俗に湖中に疊三枚位な大さのアメマスが多數居つて、餘り釣りに夢中になると時に引きづり込まれると云はれて居る。實際六、七月頃湖水に糸を垂れると、實に面白い位多數否無數に釣ることが出來るが、幸に未だ誰も話の樣な巨大な奴に引かゝつた人は無ささうである。（大正九年八月十六日竹内亮）○略圖中、勇拂及勇拂川とあるは勇振及勇振川の誤に付訂正す。

○森林とスキーと冬の登山

冬、スキーを穿いて山へ這入るのを大體二通りに區別することが出來る。一つは愉快な滑走を主な目的とし他の一つは登山それ自身を主な目的と

するものである。スキーを知つて其の快味が忘れられなくなると大抵の人は一定の滑走場でジャムブ、テレマーク、クリスチャニアなどをやることよりも先づ長い愉快な直滑降を望む樣になる。長い滑走の爲には高土が必要であり愉快な滑走の爲には良い雪がなければならぬ。かくして多くのスキーランナーは山へ行く。そして此等の人々が、樹木の尠い眞白な山を目掛けて進んで行くのは尤もな事である。例へば伊吹山や北海道の遠藤山、毛無山などが非常に好い山であると考へられた如きそれである。(毛無山とは陸地測量部五萬分の一地形圖仁木圖幅中六五四米の標高ある山。樹木尠き故かく呼ばるゝものと思ふ。遠藤山とは毛無山の東々南七三五、五米の三角標ある山。此は毛無山などゝ共に大正五年三月遠藤吉三郎氏が見付けて紹介せられた故爾來吾々はかく呼びならはして居る。)而し此等の山がいつもスキーランナーを悅したかと云ふとそうではない。毛無山では或時雪質非常に惡く山麓まで終に一滑りもせずスキーを穿いて歩いて降りたと云ふみじめな事さへあつた。軟雪に富む北海道にあつてさへ此れ程の事がある。森林のない、一見美しい愉快な連續した長い滑走が出來る樣に思はれる山は、實は其の雪面が風と日光とに裸出して居る爲に、此より受ける作用に比較的鋭敏である。

ふうわりと積つた雪も風壓によつて固く凝集して石疊の樣になり、日光の直射に遇つて容易く融解したりして忌むべき狀態に變り勝ちである。日光の作用は多く南側に受けるが冬の風は概して北から吹く。此等の影響を共に被つて居ないと云ふ場合は實際珍らしい。だから斯う云ふ山では餘程好い日、例へば前の晩に低溫の間に靜かに降雪があつて其日はあまり太陽が强く照らない日であればいゝ。然してんな注文通りの狀態に遇ふのは制限された時日では尙更稀である。なるべくいつも好い狀態にある山こそ眞に適當な山であると云はねばならぬ。かくして樹の尠い山は好い山とは云へなくなる。

一方、森林は防風の作用をなし、日光の直射を防ぎ、溫度の變化を緩和するなど雪の爲には誠に

いゝ保護をする。而し乍ら滑走と云ふ點から見れば樹は稍大なる障害となる。けれども此は多く灌木、蔓生木本及び密生せる幼樹の場合に甚しいものである。老大樹の森林であまり密林でなければ、スキーを操縦するのに少しも支障はない。だから理想的に云へば、灌木や蔓生木のない、よしあつても積雪に深く隱れて居る老大樹の粗林で小さな凹凸のない斜面がスキーには最もいゝと云ふことになる。かゝる斜面を持つて居る山は木のない直白な山よりも我國では遙かに多い。白い山を搜す時代はすぎた。此の如く森林は雪とスキーにとつては大切なものと考へられる。冬の蝦夷富士に於て六合目附近で見返り松、一本松を最後に森林帶を出ると雪質は著しく變り軟かい芝生からコンクリートの道に出た樣である。一般に高い山では頂上まで、喬木の森林で蔽はれて居る事が無いから、頂上近くでは殆んどいつも强い風の爲に壓縮されて硬くなつて居るか又は氣溫の差の大きい爲に氷に變つて居る。こうなるとスキーは角付することが困難になつて來て、氷の上では全く駄目である。横辷り止など云ふスキーの兩側面に鐵板を垂直的に附ける裝置が工夫されて居るが餘り良好な成蹟を齎らさない。

そこで勿論滑走の快味を顧みないのではないが主として登山の爲にスキーの登山をやる、即ちスキーを登山の一の方法として考へる樣な場合には斯う云ふ硬化した雪や氷の境に來ると困つてしまふ。かゝる所では金樏とアルペンストックが必要となつて來る。所が此處に考へねばならないのはスキーと樏との連絡である。アルペンストックはスキーを穿いて居る間は、石突の方に輪樏を附けて置けば諸國式スキー杖同樣に役立ち（勿論重くて使ひにくいが）金樏はリュックの內又は外に持つて行く事が出來るが、スキーを脫して金樏を穿いた場合にスキーを脊負つて行くことは墜落の危險と疲勞の上から避くべきものである。スキーを脫して全部結束し樹木に括り付けて赤旗を附し見易い樣にして置くより仕方がない。而し此は吹雪や霧に遇つた場合には發見が困難となる。此の危險を避けるには糸を以て、スキーと登山隊とを連

絡することが出來るが長い距離に亘つては難かしくなる。同じ道を上下するのならばスキーを置いて進む事は可能であるが前途に於て軟かく積つた雪があればどうであらう。しかしもう硬く凝つた雪や氷のある圈内では、此の軟かい積雪のあるのはそう長く廣く續くことは稀であるし又軟かい雪の下に堅雪の層のある場合が多いから僅の間であれば金樣で通すことも出來る。けれども縱走とか又は登路と降路との異る場合であればスキーを置いて進むことも不可能となる。

此の如く考へて來ると登山法としてのスキー術、登山用具としてのスキーは、甚だ價値のない物となつて來る。やはり、軟かい積雪に用ふる大きな輪樣と、金樣を以てするより仕方がない。三四月の頃、山の雪が可なり麓から、前云つた樣に硬化して居る際にはスキーは問題ではないが、一二月の頃には積り方がまだ軟かい事と、日が短かいから樣よりも速さに於て、著しく優秀なスキーを用ひないと云ふことは考へ物である。一〇〇〇米内外の山であれば大した變りはないとするも、二日以上を要する計畫には、スキーの優秀な速力とその快味とを顧みないわけには行かない樣に思ふ。小屋の不完全な日本の山で、冬期雪中の野營が一つの難關ではあるが、ビルゲリー式の方法などをも少し考へればそう難しい事ではない。

スキーと金樣との連絡の適當な方法を考へつくまで、三四月の頃を以て滿足しなければならないのだらうか。而し、文句のない崩雪の怖ろしさが、たえず人を畏れしめる。

冬の山の美しい事やそれがどんなに力强く引付けるかは書くまでもない。冬の登山のかう云ふ事柄が興味ある一つの問題ではあるまいか。

（加納一郎）

左の一篇は昨夏竹内氏が夫人を同伴して、信州大町より針木峠を踰え、立山連峰及劒岳を攀ぢ、小窓を經て越中伊折に出でられたる折の記行文にして、終りに婦人の登山に關する意見を附記せり。會員の參考に資す可きもの多かるべきを思ひてこゝに掲載す。原題名は「女を伴れて山に登りたる私の經驗」とありしを予が勝手に改めたる也。尙ほ本篇の前に、鹿島川を遡りて冷池附近に出で、鹿島槍嶽に登り、山稜を南走して針木峠より大町に歸著したる六日間に亘る旅行記ありしも、紙面の都合に

依りて遺憾ながら之を割愛せり。

竹内氏は夫人を普通以上に達者とは思はぬと書せるも、予の見る所を以てすれば（勿論予も婦人の山行に就て知る所少なきも）、寧ろ普通以上にはあらざるか。予は二度目の劔登山に於て、長次郎谷の雪溪を下るに一時間十分、更に劔澤の岩屋に至るに一時間を費したりき。前者は氏一行の要したる時間と略等しく、後者は氏一行よりも少なきこと三十五分なるも、これ荷物なかりしが爲ならんのみ。大體より見て予は竹内氏の言を過少視したるものとなすに躊躇せざる也。

附記の事項に關しては著者の意見と一致せざるものあるも、今は煩を厭ひてこゝに述べず。（木暮）

○女子劔岳登山記

一體吾々の劔行は、最初は普通に針の木から五色原、立山、劔と順に行き、歸りは小黑部谷、祖母谷、大黑と云ふ豫定であつた。しかし鹿島槍から歸つて大町の對山館に逗留してゐる中、追々と歸つて來た幾組かの登山者や人夫に尋ねて見ると小黑部の道は非常に惡くなつて居るし、祖母谷道は壞れて居てとても通れないと云ふ。思ふに女伴れでは餘程困難らしい。何處か好い脫道はないかと思つて地圖を按じてゐると、登山地圖に、小窓を越えて伊折方面へ引いた赤い線が注意を引いた。五萬分一の地圖と較べて考へると、小窓を越えて伊折方面へ出ることも大した困難はなさそうだ。登山地圖によると小窓の西側は雪溪になつてゐる。傾斜は少し急な樣であるが雪があれば此の傾斜は何でもない。然し西向きの雪溪は事によると所々解けて居ないとも限らないが、未だ早いから大丈夫だろう。何れにしても登山地圖に引いた赤い線が點線でないのが心强い（山岳第十一年第二號一五二頁參照）。辨慶岩附近大窓との出合ひ迄行けば、それから先は小黑部鑛山の鑛夫が通つた道があるだらう。案内の知らぬ道で、且つブナクラ迄行けぬ時に途中野營地があるか否か不明であるが、登山地圖の說明に何でもなく書いてあるから心配には及ぶまい、と思つて愈小窓を越へる事に決める　北澤淸志が案内して吳れる事になつた。人夫は西澤鎗重、淸水彥男、細川紀道の三人である。

七月二十二日

午前八時十八分對山館發、午後三時二十九分大澤着、野營。

今日の出發は賑かだ。大澤へ行くのが四組、高

瀬入りが二組許りで、相前後して立つ、吾々の組が一番最後であつたが、鹿島橋で皆一つ所になつた。天氣は上等である、そのかはり暑い。互に挨拶を交すと登山者の常として直ちに隔意なく話す。海軍の木村氏は、針木より鹿島槍迄行かれると云ふ。丁度一週間許り前に吾々が逆にやつたのを順に行かれる譯だ。横濱の大島氏は令息及その友人なる二人の學生を連れて、これは又我等と同樣劔へ行かれると云ふ話、他に立山に行く三人連れの中學生がある。皆後になり前になりながら進む、どうせ今日は大澤泊り、急ぐには當らない。木村氏に、デエットランド海戰の話など聞きながら、何時の間にか大澤に着く。今度は弟が加はつた上人夫も一人多い。夕食は中々賑かだ。

二十三日

午前六時三十九分大澤發、八時五十四分針木峠、九時四十三分峠發、十時五十分針木嶽頂上。十一時三十九分頂上發、午後〇時三十六分針木峠歸著。二時〇八分牛小屋、四時四十一分南澤著野營。

朝早く仕度を濟まし、人夫を殘して、木村大島の兩氏と共に出發する。僕は今迄木村氏位アルプスを馬鹿にした服裝をした人を見た事がない。背廣に白の短靴、柄の曲つた中指大のステッキを振り廻し、シガーを吹かしながら大股に登つて居られる、これがその險難を天下に誇つた昔の針木峠だつたら面白かつたらう。それでも感心に莫蓙を被て、水筒を肩に掛けた所だけが、普通の散歩と違つて居る。併しその内、だん〳〵雪溪の傾斜は急になつて來る、どうかなと思つて注意して居ると、その指位の大さのステッキの先に、鷲の爪程のフックを、ポケットから出して取り付けて、それで欺し欺し登つて居られる、寧ろ滑稽の感がある。大島氏はと見ると流石に山岳會員だけに、肥つては居られるが中々速い。我々はこれに後れざらんと努めて續く。時々霧が捲いて來る。見え隱れするスバリ嶽が非常に美しい。峠へ登りつめて隨分永く待つたが、人夫は一寸來そうにない。大島氏は蓮華へ、吾々は木村氏と針木嶽へ向ふ。針木岳は、此の方から登ると何でもない。頂上の展望は壯んなものだ。今日は東の風强く、雲多くし

て且素敵に迅く飛んで居る。こちらで山が隱れたと思ふと彼方で顯はれると云ふ樣な工合で、景色に變化があつて非常に面白い。南方はやはり槍ヶ嶽が簇がる雲の上に突つ立つて覇者の威を示して居る。これに對して悠然と肩を張つて控へて居る藥師の態度が氣に入つた。その中間に赤牛嶽黑嶽其他の群雄が、雲の中に、頭を出したり引つ込めたりして居る。立山は、恐らく此處から見たのが一番いゝだらう、どつしりして根强い感がある、裾を廣く張つてこれを黑部に落した所。なか〳〵雄大だ、上半面は雪多く、雪を破つて三角形の黑い岩が、簇々と頭を出して居る樣は、亦秀麗たるを失はない。これに續いて彼方には、長次郎、平藏の兩大雪溪を眞白く見せて、大豪劔が控へて居る。眞に自然の大彫刻だ。北方は雲に包まれて遂に駄目かと觀念して居る內、僅かの間ではあるが、スバリ嶽より鹿島槍白馬に至る迄の連峰、皆その頭だけを、雲の上に浮いた樣に見せて呉れたのは實に嬉しかつた、かくて一時間近くも景色に見とれて居る內、急に寒さを覺えて來たので降る。遙かに霧の中から人の呼ぶ聲が聞へる、木村氏の人夫がやつて來た。此處で木村氏とお別れする。針木峠へ近くなつた頃、呼笛の聲がする、こちらも應じる。少しゝて清志が迎へにやつて來た。あまり歸りが遲いので心配したと云ふ。笛は大島氏が吹いて呉れたのであつた。牛小屋邊で二度目の晝飯を食つて、南澤まで降つて泊る。實は平迄行くつもりであつたが、清志が、此處が好いと云ふから、それにした。大島氏もやはり南澤泊り。

二十四日

午前八時四十分南澤發、九時四十五分平小屋着。十一時十四分平小屋發、午後〇時四十八分刈安峠着。一時四十三分刈安發、三時二十八分ザラ峠野營地着。それより五色原へ登り、五時三十分野營地に歸る。

朝起きて見ると雨が降つて居る、ひどくはない、暫くして止む。初めて見る黑部の流れは思つた程でないと飛び込んでみて驚いた、中々急だ　膝以上に流れが深くなると、思ふ樣に足が出ない、深い所は股までである。用心にポケットのものをリュックサックに移して居てよかつた。妻は清志に負

ぶさつて渡る、仕方がない。平の小屋では、先に渡つた大島氏の人夫が火を燃して居て呉れた。濡れた服を乾かしたり、飲を食つたり、隨分グヅ〳〵して、十一時過、人夫を殘して大島氏の一行と共に出發する。今日は朝から人夫がいやに悠つくり構へて居る。日がカン〳〵照り初めたので汗になつて刈安峠へ登り着いた。此處の眺望も一寸好い。一時間近くもして漸く人夫連はやつて來た、直ちに一緒に降り初める。ザラ峠から出て來た溪流を渡つた時、人夫連は此處で食事をすると云ふ。又吾々のみ先に出發する。その時清志が「今日はザラ峠で泊りませう、重い荷物を五色まで上げて又下ろすのはつまりませんから」と云ふ。ナール程、それて分つた。昨日の南澤泊りも、今日のグヅ〳〵も畢竟その事の爲であつたのか。一寸してやられた樣な氣がしないでもない。然し考へて見ると、清志の立場も可哀そうである。自分は先達であるから、お客樣にも能くしなくてはならないが、人夫も勞つてやらねばならぬ。ザラ峠に適當の野營地がある以上、お客樣だけ五色へ行つて貰う事にして、重い荷物を背負上げ背負下す手數を省きたいのは人夫に對する人情だらう。峠に來て見ると清志が云つた通り好い野營地がある。リュックサックを置いて杖一本で五色へ出かける。思ひの外登らなくてはならぬ、是では人夫が嫌うのも無理はない。五色原では寒い風が吹いて居た。雪解けの水が草の間を傳つて流れて原一面がヂク〳〵だ、空は曇つて五時と云ふのにもう薄闇い、清麗な草花は寒そうに震へて居る、頗る感傷的の景色だ。それでも大鷲奥大鳶から吾々の前になだらかに引いた緩傾斜の軟かき曲線の上に烏帽子から、槍、穂高を中央に笠ヶ嶽までが、遙か南の方は晴れて居ると見えその明るい空色を背景にして、くっきりと浮き出したその落ちついた眺めには、寒い乍らも約一時間も足を停めさせられる。野營地に歸つてみると、既にテントは張られて、人夫は夕飯の支度に忙しい。カレーライス。

二十五日

午前八時二十五分ザラ峠發、十一時四十五分鬼嶽頂上。午後〇時四十三分龍王嶽、一時四十二分一の越着野營。

吾々も今日は人夫達と一緒になつて歩く。大島氏一行は少しく早く出發される。鬼嶽への登りには時々急な所があるが、岩が確かりして居るのと足場がいゝのとで少しも苦にならない。晝飯には一時間も休んで隨分ゆつくり歩いたが、何分道程が近いので午後二時前に一の越に着く。今日は朝から晴れては居るが風が強い。一の越に着いた時は北東の風が猛烈に吹いて居る。それで西側に野營した。あまり風が強くてテントを張るのに非常に困難する。だん〳〵空模樣は惡くなつて大粒の雨さへ加はつて來た。テントは最初そう惡い位置に張つたと云ふでもなかつたが、地面に少々傾斜があるのが心配だ。バロメーターはと見ると益降る。大島氏は野營を止めて室堂へ降つて行かれた。僕は斷然テントを移す事にする。然しどうも思はしい所がない。そこであまり上等の場所ではないが比較的風も防ぎ且皿を伏せた樣な地形の處が見つかつたので、其處へ移轉する、四時頃少し風が弱つたかと思はれたので、淸志と室堂へ米味噌の補充に出かける。ところが弱つた。室堂では雨の爲に米が上つて來ないから無い、賣れないと云ふ。此處で米が手に入らないとなると勿論この先旅行を續ける事が出來ない。且室堂では、此の風に一の越の野營は危いから、降つて來て室堂に泊れと頻に勸める。併し吾々は頑張れるだけ頑張つて見て、それでいけなかつたら逃げて來るから、その時は賴むと答へる。併し逃げて來るにしても、夜中風雨を冒して坂を降つたり雪の傾斜面を横切つたりするには、どうしても懷中電燈が必要になる。ところが吾々の懷中電燈は、その事を心配して、この室堂へ降つて來る前一寸試してみたのだがどうしてもつかない。それで出來るなら大島氏から一つ拜借したいと云ふのが、吾々が室堂へ出かける時の目的の一つであつた。そこで大島氏に事情を話してお賴みすると、「私共には幾つもあるからずつとお使ひなさい」と云つて心よく借して下すつた。この懷中電燈には、旅行を終る迄いくら吾々が助かつたか知れない。室堂で無いと云ふ米は、吾々にもどうすることも出來ない。少しでも上つて來たら分けて貰ふ事に賴んで一の越へ引上げる。

夜になつて果して猛烈な暴しがやつて來た。天幕の支柱は晝の中から杖を二本も縛りつけて置いたから大丈夫だが、テントは風を受けた方が帆の樣に孕む。その凹んだ所に雨を吹きつけるから、水が滲み出して雨滴となつて內側をつたふ。水に濕る位まだいゝが布が裂けはしないかとそれが心配になる。それで內側から色々な物で支へる。山の暴風はどうも方向がよく分らない。間を置いて烈しく吹きつける風は一度毎に方角が違つて居る樣な氣がする。然し地形上そう感じたのかも知れないが夜十時頃は多くは北方から來た樣だ。其中にだん〳〵こちらも慣れて來る。どうも大丈夫らしい、この模樣ならば逃げ出さなくてもよさそうだ。大丈夫となると、山の旅行、樂な樣でもやはり疲れて居ると見え、皆よく眠る。一時頃一寸目を醒したが、風は尙旺に叫びを發して闇のなかを暴れ廻つて居る。雨もひどい。バロメーターを見ると、ほんの少しであるが、宵よりはいゝ方に動いて居る。尤もこのバロメーターは私製だから、全然たよりにする譯にはいかない。マア吹きたけりや吹け吹け風の神と又一と寢入りする。

二十六日

雨の爲及米の爲滯在。

一度目を醒してからは、流石によくは寢つかれない。風は尙烈しく吹き暴れて居たが、夜明け頃から弱つて來た。午前六時頃には方角の決まらない風が思ひ出した樣に吹いて來るだけになつた。そのかはり雨が非常な勢で降つて來る。どうせ今日は滯在だ。それにこの雨では飯も焚けない。朝食は昨日室堂で買つて來たパンで濟す。午後少し小降りになつた時、大島氏が心配して見舞ひに來て下さる。お入りなさいと云つても、濡れて居るからと云つてレーンコートを着て外に立つて話される。何でも室堂では昨夜もう逃げて來るだらう、もう來るだらうと云つて心配して待つて居たと云ふ。その時京都の大谷氏も、昨夜からか室堂に來て居ると云ふ話であつた。そして「大谷さんが、牛肉やバタで西洋料理を拵へて食ふもんだから、みんな腹のへつた連中が、鼻をならして堪らなそうにしてますよ」と云つて笑つて降つて行かれ

た。山の生活にもやはり差はある。多人數詰め込んで居る室堂で、悠つくり場所を取つて甘い料理を食つて居る至極平民的だとの評ある貴族の態度を想像する。僕もそのバターで何とか云ふ洋食が食いたい。室堂のパンにかぢりつく。

二十七日

滯在。

今日も亦雨の爲滯在、然し今日は米の爲ではない、米は昨夕清志が買つて來て呉れた。昨日から降り續いた雨は尙容易に止まない。その上に霧も深い。然し風は全く凪いで居るので、立山參詣の連中は、朝早くからチリン〳〵と鈴の音をたてて、テントの側を雨を突いて登つて行く。午後になつて雨歇んで少し靑空が見えて來たので、吾々も三人淨土に登つて、それから室堂へ降つた。室堂では、大島氏が立山から丁度降りて來られた所であつた。大島氏は會社の都合もあり、若し明日も雨であつたら、劔行は止めにして芦峅へ降ると云つて居られる。吾々は、地獄谷を見物して野營地へ歸つた。室堂のお爺さんは、この天氣は未だなか〳〵好くなりませんぞと云つて居たが、夕食後人夫達は西の空を眺めて、この夕燒けが氣に入つた、明日は屹度天氣だと、さも確信あるもの丶如く云つて居る。私製のバロメーターは、お爺さんに賛成の意を表して居た。

二十八日

又滯在。

私製でもやはり器械だ、器械と年寄はよく當てた。雨は夜半から降り出して夜が明けてからは更に烈しく降つて居る。又滯在して米味噌その他を補充する。その時、室堂のお爺さんが弟に「明日は曇りかも知れんが、明後日からは屹度晴れる、そう天に澤山雨があるもんぢやない、明日少し位は降つて居てもたてたらおたちなさい」と云つて勸めたと云ふ。有難い。

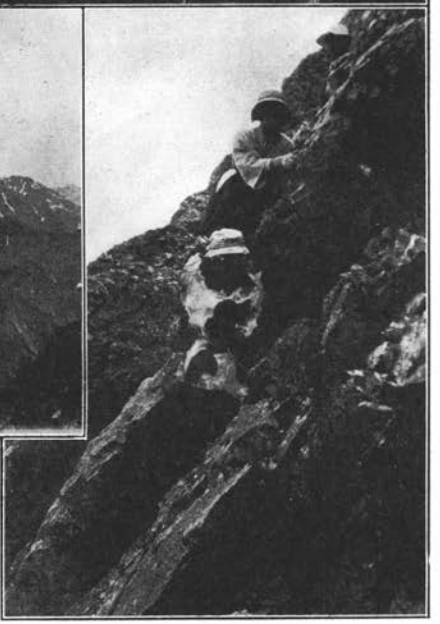
二十九日

午前七時四十三分一の越發、八時四十三分立山頂上。午後○時十三分別山神社。二時二分別山裏の窪地。三時五十分別山裏の窪地發、四時三十五分平藏谷。四時五十二分長次郎谷入口着野營。

バン二百五十、三日四晩の蟄居、今日漸く釋放される。霧は深いが雨はない。朝早くから仕度に騒いで居る人夫達の聲も、今日は殊更に勇ましく聞える。飯を終ると結束して立つた。霧は前後を塞いで何等の眺望も許さないが、吾々には放たれた る小鳥の嬉さがある。且つ愈これから劔へ向ふのだと自ら足も輕い。少しく登るともう參詣連の降りて來るのに逢ふ。妻を見て何とか云つては行き過ぎる。多くは女がこんな所に來て居るのに驚いて居る樣である。妻は唯默つて笑つて登つて居る。立山だけですます參詣の人々には、立山が嶮しく思はれるのも尤もだが、この幾層倍ひどいか知れないと思ふ山を前途に控えて居る吾々には、立山位は恐らく妻の眼中にもないだろう。「だつて道がついてゐるんですもの」と至つて平氣だ。一の越から頂上まで丁度一時間を費す。頂上では一寸でも晴れて呉れるといゝがと思つて待つて居たが、とても晴そうな空模樣ではない。三十分許りして人夫達はやつて來た。清志は雄山神社の御神酒に眼をつけて、戴きたさうな顏をして居る、立山から別山への峰づたひは、最初日程を作る時からその眺望を想像して樂みにして居たものだが、この濃霧では仕方がない。十一時頃河野さんの一行が霧の中から現はれた。話をきくと何でも午後五時頃劔の頂上に着いて、月明りで鶴ヶ御前への尾根づたひをして降られたと云ふ。こうなるといかな劔でも少し輕蔑したくなる。何しろ今迄豫期しなかつた冷の登りと、豫期して居ても困つた鳴澤嶽の假松以外は、あまり平易であつたものだから、妻でさへ劔に對して「頂上近くまで雪溪があるんだから」と少し馬鹿にした樣な事を云ふ樣になる。その後又一組の登山者に遇つた。室堂から來たものらしい。二人は學生らしく、一人は會社員か記者でゞもあるか、越中の人夫が案内して居る。「劔へお登りですか」と尋ねると、「エヽ劔へ登らうと思ふんだけれどもう駄目々々、病人が出來て悲觀々々」と大きな聲で會社員らしい若い男が答へる。そして倒れて腹の邊を押へて居る一人の學生らしい人に「どうしても歩けませんか」と念を押して居る。態度が輕薄で恐ろしく不人情

に見える。病人は吾々をチラと見たが顔を背けた。「もうこの先き、嶮しい所はないつて人夫も云つてるんだからもう少し行つてみませうよ、少し位は歩けるでせう」なぞと云つてる言葉が殆んど强要して居る樣に吾々には聞える。山に來てこんな不愉快な場面を見せられるのは珍しい。正午頃別山神社に着く、未だ霧が深い。三十分も休んで居たが、急に寒くなつて來たので歩き出す。これからの降りに一寸惡い所があつたが、僅かの間だから何でもない。劔澤を少し降りた所に、平らな好い野營地がある。人夫は此處に泊らうと云ふ。何と云ふ所だと聞くと三田平と云ふ。多分昔慶應の人が死ぬか生れるかした所なんだらう。誠に好い野營地だ。昨夜河野さん一行の野營したらしい跡がある。僕も、別山の頭から何にも見えなかつた腹癒に、此處に泊つて朝日を受けた劔を見たくもある。それに清志は長次郎谷の入口にも平藏谷にも野營地はあるにはあるが水が遠いてと云つて降るのを澁つて居る。然し、明日の事を思ふと少しでも足を延して置きたい。それに未だ時間は早い。遂に出發と決めて發足する。途中寫眞など撮つて居たので人夫に後れて居たが、平藏谷の入口で追ひ付いた　清志は長次郎谷まで降らうと云ふ。一服吸つて荷を背負つて立上つた清志が「奥さん、明日は心配いらん、あのタルの降り工合を見て居たが中々確かだ」と誰にともなく大きな聲で云ふ。振り返つて見ると、成程今吾々が降りて來た許りの雪溪に一ヶ所非常に急になつて居る場所がある。平氣な樣では居るが、女を伴れての明日の劔登りをやはり心配して、人知れず妻の足並を注意して居たとみえる。長次郎谷の入口に來た。成程野營地はあるにはあるが狹い。且地面が石で平でない。木の枝や草を澤山敷いてどこぼこの地面をならす。雪は近くにあるが水は遠い。雪溪を横切つて、人夫の一人は米を磨ぎに一人は枯枝を集めに行く。二人の働いて居る姿が雪溪の彼方に小さく見える。やがて枯枝を澤山背負たのと、鍋を提げたのとが二人連れだつて寒そうにして歸つて來る。誠に氣の毒だと思ふ。夕飯には、小指位の小さな筍の入つた味噌汁が出來た。

左　長次郎谷の雪渓
右　蓮華岳中腹より針木岳
（左）岳木針より立山
及　（中）山別
（右）を望む



左　針木岳より立山
（左）山別
（中）を望む
右　劔岳頂上附近
竹内鳳次郎氏撮影

甘い。

三十日

午前七時十分野營地發、八時三十五分熊の岩。九時九分熊の岩發、十時雪溪の頭、十時二十一分劔頂上。午後〇時二十一分頂上發。〇時五十一分雪溪初まり、二時長次郎谷野營地歸着。二時五十分長次郎谷出發、四時二十五分岩小屋着野營。

今日愈劔へ登るその日が來た。朝起きてすぐ天氣工合を見ると藍色の空が輝いて居る。深い谷間の野營地の事とて朝日は勿論空さへ僅か一部分しか望めないがその僅かの空が見上げて居ると眼が痛くなる程輝いて居る。しつかりカンジキを着けて、朝寒の風に面を吹かれつゝ、長次郎谷の雪溪に第一歩を踏み込む。踏み込んだ時のその感じ、これはとても山登りする人以外に分るものではない。妻も弟も欣然として歩を運んで居る。清志と他に西澤と云ふ人夫が同行する。雪溪は流石に大きい、黒味を帶びた兩側の巨岩は、被さる樣に聳えて居る。雪は堅からず歩くに丁度工合がいい、且思つた程急でない。熊の岩で一息入れる。雪溪もこれから上は掃き淨めた樣に奇麗だ、枯枝一つ落ちてゐない、それに傾斜もこれからは餘程急になる。妻はと見ると「こんな好い所、ほんとに來てよかつた」と云つてニコ〳〵して居る。清志も初めは心配して始終妻の後について居たが、心配なしと見てかズン〳〵先に登つてしまう。吾々は寫眞を撮りなどしながら嬉々として登る。「こんな美しい雪溪ならいつまで續いてもいゝわ」などと贊澤を云ひ初める。しかし全くその通りだ、登りつめるのが惜い樣だ。雪溪が盡きてからは杖なしで岩角を踏んで、遂に頂上に登り着いた。話に聞いた程險しい山ではなかつたので少しァッケない氣がする、但し白馬の肩から初めて此山を望んでから是非一度はと思つた一年來の希望が茲に達した譯だ。天氣は好し風はなし、皆嬉しさうに何とかかとかシャベリながら先づ何よりも先に握り飯に嚙ぢりつく。嚙りながら四方を眺める。惜い事に天氣は劔だけに好くして他の山は皆雲に包まれて居る、尤も食つてる間は景色はどうてもいゝから、又全身の神經を握り飯に集める。その内には晴れ

るだろう。ところがなか〳〵晴れさうもない、太陽は劔だけをカン〳〵照して居る。それでも何處かの山が一寸でも頭だげなりと出したら撮つてやろうと思つて寫眞器を用意して注意して居る內、鶴ヶ御前の方から尾根づたひに登つて來る一組の登山隊が眼に入つた。見て居る內に向ふの人達は惡い場所に來たのか、皆一箇所に集まつて動かない、一人がどうかこうかして岩を登つて居るのが見える、やがてロープを下した、それにつかまつて一人々々が登る、それ等がみんな手に取る樣に見える、苦心慘憺たるものであるらしい。そしてその人達は少しも休まず登つたり降つたりしながらグン〳〵近づいて來る、やがて頂上に現はれた、見ると黑岩直吉の案內する東海銀行の戶木、渡邊の兩氏と松澤由造（？）の案內する近江の井花氏とである。その內又一組、越中の人夫が例の無情氏と一人の學生とを案內して平藏谷から登つて來た、病氣の人はどうしましたと訊くと、別山の上でテントの中に留守番して居ますとの返事。狹い山頂が俄かに賑かになる。長次郎谷を登つて長次郎谷を降る極く平凡な登り方をする吾々は、心中少しく意氣地なく感じる。かくて頂上に二時間を費したが、立山が一瞬間その西半面を見せたのみで、その他は何にも見ずに降りに向つた。雪溪は降りが危ない。降りだすとすぐ僕は轉んで二三間滑り落ちた。その時この調子なら滑つても降れるなと思つた、それに新越から劔を見た時菊十爺が『大坂のKさんはあの雪溪を滑つて降りましたよ』と、それが非常な冒險の樣に話した事を思ひ出して滑つて見たくなり、莫蓙も何にもないが其儘滑つてみる、尻が濡れて冷たいには閉口だが素敵に面白い、二三十間も滑つて立停まり上の方を見ると、登りの時とは違つて皆かなり緊張して一歩々々を注意して降つて居る、清志は先登にたつて大分心配して居る樣だ。尻は冷たいが皆が降りて來るのを待つて寫眞を撮る。そこで皆と一緒になつて歩き出す、併し一度滑つてからは間だるこくつて歩いて降つて居られない、復た滑り出す、其うち清志も妻に對して安心したと見へ、一人で先に降りて行つてしまう。妻はたつた一人になつ

て後れて居る、少し可哀そうになつたので待つてやつたが本人は案外平氣で居る、且確かな足を踏んで居る、これなら大丈夫と思つて又先に滑つて降る。熊の岩から下は雪溪が汚ないのとそれに石なぞ轉がつて居るので歩いて降る。歩き出すと僕や弟は亂暴に足を踏み出すので度々轉ぶ、轉び方が滑稽だと云つて妻は立停まつて聲をたてゝ笑つて居る。何れにしても降りはやはり早い、雪溪を降り初めてから一時間と少しで長次郎谷入口の野營地に歸つた。とう〳〵劔にも無事に登つた。清志は安心したやうに「奥さんはいゝ、をつかながらないからいゝ、平氣で足を踏み出すからいゝ」と、食事中話した。登つてみると案外平易な山ではあつたが、兎も角一年間恐れをなしてその名を聞いて居た此の山に、人手を借らず無事登り了せたのは妻にとつても嬉しいだらう、僕も滿足だ。無口の西澤でさへ何とか云つて喜びを述べて呉れる。皆何となく氣も輕く燥いでみえる。これから岩小屋迄には雪溪は直きに盡きて度々徒渉が初まる、妻は膝以下の處は自分で渡つて居たが、多くは清志の厄介になつて居る。岩小屋では河原の奇麗な砂の上に野營する。これ迄大事に取つて置いたうどんを、雪溪の下から流れ出る水で冷やして食ふ。うまい。夜は遲く迄山の端から月が出る迄天幕の側で焚火して話す。長大なる三窓の雪溪が近く高く吾人の頭の天邊で月光を受けて青白く光つて居る。

三十一日

午前六時四十七分野營地發、八時四十六分小窓頂上。九時五十二分小窓頂上發、十一時十分辨慶岩。午後三時ブナクラ、三時五十分バンバ島、早月川との出合ひ、四時五十二分バンバ島發電所前着、野營。

今迄は、清志が自分の山でも案内する樣に引つ張り廻したが、これからは地圖が案内だ。今日中にブナクラ迄は是非行きたい。朝も早く出發する。今日は風があつて馬鹿に寒い。小窓の雪溪は緩い坂になつて居るので歩くには少しも骨が折れない、それに寒くて休むと足の指が痛い程冷たくなるので皆グン〳〵登る。時々霧が捲いて來るが惡い天氣でもなさそうだ。愈〻小窓の頂上近くなつ

て、妻が足を停めて「道ぢやないか知らん」と峠を見上げて云ふ、僕もそれには前から氣が付いて居た。こんな場合の雪溪の常として頂上に近く急になつて居る、その雪の傍の青草にヂグザグにつけた道らしいものが見える、近づいてみると果して路であつた。なあんだこんな立派な路があるのか、それぢやあこの先きも心配したもんではあるまいと少しく拍子ぬけの感がする。峠に立つて西側を見ても霧が深いので何も見えない。峠の東側には人工を加へたらしい三坪許りの平地がある、其處で枯枝を集め、固形アルコールで火を起して溫まりながら食事をする。此處は野營地としては、雪水の上に薪に乏しいから不適當ではあるが出來ない事はない。僕が氷砂糖をしやぶりながら頻に地圖を調べて居た時、峠の上を喞へ烟管で歩いて居た清志が「先生ちょいとその地圖を持つて上つて來ておくんなせえ」と呼ぶ、大變得意の樣だ、上つてみると無理はない、今や兩側の霧晴れて降るべき谷の形勢がすっかり分る、清志は「こう降りてあれを曲るんでせう、あの邊で大窓と出逢うんでせう」と指さす。僕は地圖と磁石で位置や谷の方角を確かめる。大體の樣子は分つた。又すぐに霧が捲いて來る、天氣模樣がどうも穩かでない。一時間以上も休んで出發する。小窓の西側の雪溪は東側よりはずつと急だ、それに山崩れがして土が雪の上に被さつて居るので汚ない、初め少しの間は雪の上を歩いて居るとは氣がつかなかつた。カンジキなしで降る。雪は堅いが波になつて居るので急な割にカンジキを着けなくともそんなに困らない。霧はだん〳〵深くなり時々雨が來る、すると急に寒くなる。清志と弟と一人の人夫は吾々とは一二丁の距離を置いて先に進んで居る。勿論姿は見えない。一筋の雪溪を降るのだから道を間違へる氣遣はない、それでも相呼應して降る。その內弟の怒鳴つてる聲がだん〳〵遠くなる、餘程吾々は遲れたらしい、追ひ付きたくとも少しあせつて降ると雪が堅いから度々滑つて倒れる、仕方なくカンジキを着ける。その時天候急に變つて谷が眞闇くなり非常に凄い景色となる、身體が引き締められる樣な氣がする。カンジキを着けて居る

吾々の側を一間許り離れて人夫が降つた、足音は聞えるが姿は直ちに朦朧として消え失せる。やがて電光と雷鳴に襲はれる。それが今度は豪雨に變る。風が加はつてそれ等がすべて猛烈にやつて來る。吾々もそれにつれて壯烈な氣分になる。カンジキを着けた足はもう確かだ、急いで降る。辨慶岩の附近に來た時は、風も雷も止んで雨だけが蕭々として降つて居る、見透しも少しきく樣になつた。此處で皆待ち合せて一緒になる。皆凛然として突つ立つて居る。見上げると空は明るくはなつたが雨は止め度もなく降つて居る、併しもう止むだらう、そう天に澤山雨があるもんぢやない。辨慶岩の下で雪溪が切れて居て降れない。右側の崖をへつつて大窓との出合に移つた。果して雨は小降りになつた。こゝで又崖崩れがして道が通れない。こんな所に來ると清志はお得意だ、僕のアルペンシュトックを引つたくつて道作りにかゝる。吾々は皆崖の中腹に一列に並んで待つて居る、一番終りに立つて居る僕には、先きの方で清志がどんな事をして居るか少しも分らない。だいぶ時間は過ぎる、餘程の難工事らしい。僕はそれがどんな工合か見たいのだが、二人並んで立てない此の崖路では自分だけ先に進む譯に行かぬ。それで一人引返して、他に大窓の雪溪に降るべき路を見つけに出かける。暫く探して居る內路ではないが少し危險を犯せば降れると思はれる場所があつたので、それを降つて居る內皆が僕を呼んで居る聲が聞える、逆戻りして元の場所に來てみると、清志と西澤だけが殘つて他は皆大窓の雪溪に降り立つてこちらを見上げて居る。荷物も下してある。見るとロープが下げてある、足場も出來て居る、それを力に降る。皆降りてしまつて一と休した時清志が「あんな所の一ヶ所や二ヶ所なくちや面白くねえ」と云つて今通過して來た所を見上げて居る。そして「奧さんは全く始末がいゝ、どんな時でも平氣で居るから危なっ氣がない」と云つて褒めて居る。然し腕力の弱い女にはあんな場合どうであつたかと思つて妻に訊くと「どうってほかに仕樣がないぢやありませんか」と答へる。然しロープを使用したと云へば餘程危險な場所の樣に思はれ

るが實はそれ程の處ではない、清志も後で「男許りならロープは使はなくても降りられたんだ」と云つて居た。此處は大窓の雪渓を中央に南に小窓北にも一つ雪渓があつて三つの雪渓が一ヶ所に集まつて居る。これから下は雪は切れて流れになつて居る。そのかはり右岸に路がある。これからブナクラ迄は、數回左岸に移るが多くは右岸の林道又は河原を下る。天氣は急に晴れたり急に降り出したりするが降つて居る間の方が多い。度々徒渉をする。その度に清志は妻の世話をやいて居たが、後には大概の處はズン〳〵先に行く、妻も袴や衣服はどうせ濡れて居るのだから大抵の處はザブ〳〵渡つた。それに渡れない程深い所は丸木橋が架けてある。心配して居た野營地はブナクラ迄に幾個所もある。ブナクラの出合に來た時は又隨分雨が烈しかつた。それからは左岸のみを降る、雜草が丈より高い。バンバ島には白萩川と早月川との合流點に茅葺の小屋と發電所に屬する木造の家が一軒ある。小屋には俗離れのした白髪のお爺さんが一人で居る、内に入れてもらつて雨を避けた。お爺さんは小窓を越えて來たと聞いて、ほうそれはゑらいと云つてるが格別感心した風もない、唯妻を見て、あんたも一緒に越えて來たかと尋ねた。それから橋が架つて居たらうと云ふ、お爺さんが架けて置いて呉れたのかと訊くと、そうだと云ふ返事、若し此のお爺さんが居なかつたなら、吾々は餘程難儀したであらうと思ふ。伊折迄の道程や宿屋の有無を訊ねた。宿屋はあると云ふ。それでは伊折まで行う。未だ早い且それ程疲れても居ない。其覺悟で立つにはたつたが、バンバ島發電所の前まで來た時、清志が「先生、この邊で泊つて呉れませんか」と云ふ。妻と弟とは伊折行を主張したが人夫を見ると可哀そうにもある、且明日此處からでも上市迄出るのは何の造作もない事だ。遂に又野營に決める。丁度雨も止んだ。夜發電所に電燈が點くと里へ出た氣がしみ〳〵とする。人夫達は鼻唄をうたひながら見物に行つた。

八月一日

午前六時四十九分野營地發、八時四十分伊折、十時二十五

分折戸。十一時五十三分極樂寺村。午後一時五十分上市停車場着。

今日は相憎くと天氣が好い、カン〳〵照り付けられる。山から出て來た吾々にはひどくこたへる。發電所前からは車道が通じて居るから道は上等だ、そのかはり照り返しが強くて暑い事甚しい。極樂寺村の茶店で晝食して午後二時近く上市停車場に着く。上市からは汽車で北陸線の滑川に出た。滑川停車場では先づ第一に石炭酸の匂ひが鼻をつく、腕に赤布を捲いた巡査が嚴かに乘り降りの客を監視して居る、出入口には昇汞水が備へてあつて一々手を洗へとある。虎列刺が烈しく流行して居ると云ふ。下界。

附記

記事は、初め簡單に唯記錄した時間の説明位のつもりで書き出したのが少なからず冗漫になつた、後で妻に關しても少し委しく書くべきであつたと思つたが、何しろ旅先きで書いて居るので、妻自身の氣分やその他色々の事についても、僕が今書いたより以外には筆を進める譯に行かない。それから人夫やその他の人々の云つた言葉については、方言を充分眞似し得なかつた憾はあるとしても、一言も附け加へたり修飾したりした點はない。又山容や地形はこれを記するは通過した所があまり知れ渡つて居る場所であるのと、且今迄本誌に幾度も委しく載つた事のある場所のみであるので止めにした。それでも小窓からバンバ島迄は少し詳しく書いてもいゝと思はぬでもなかつたが、平易な通路で特記する程の價値がないのでこれも止めにした。唯だ二回の晝飯に二時間と辨慶岩の處でロープを使用した時約四十分を費した以外には、かなりに道を急いだ事を附記して置きたい。勿論雪渓では暴しの爲、辨慶岩以後は雨の爲林道が滑つて思ふさま急げなかつたとは云へ、恐らく岩小屋よりバンバ島までは女の一日の行程としては充分と思ふ、例令吾々に伊折迄行ける自信はあつたとしても、それは平地を上市まで行く翌日の道程を顧慮する必要がなかつたからの事で、他日女伴れで此の邊を通過される人の爲に此の事を一言申添へたい。

それから妻を伴れて歩いた私の經驗について少しく書いてみたいと思ふ、經驗と云つても去年と今年と唯二た夏の、しかも北アルプスのみに限られたる誠に貧弱な經驗で、從つて云ふ事も本誌の讀者などから見たら誠につまらない或は間違ひだらけの事かも知れない、間違つて居たらどし〳〵訂正して頂きたい、これが刺戟となつて婦人登山やそれに關する研究が盛んになれば、それは僕の最も望む處である。

こゝに云ふ山とは、白馬や槍ヶ嶽の樣な準備なしで平氣で登れる山を指すのではなく、少なくとも四五日がゝりて行く云はゞ山地の旅行に關するものである。

妻は中肉で丈は五尺二三分、女としても小さい方である。時々腹痛を起しはするが先づ普通の健康體と思ふ。足は他の女を知らないから斷言は出來ませんが普通以上に達者とは思はない。近頃學校出の女ならば大抵これ位は歩けると思ふ。然し妻は、大に達者とは云へないが確かな足を踏んで居た、それは女だから險惡な場所に來れば隨分歩みはのろくはなるが、踏み出す足にはあまり危なつ氣はなかつた、それで安心して伴れて行つた譯である。今迄歩いた經驗としては、女學校時代半里の道を往復して居たのと、それ以外には三年前、僕と岐阜から(實は岐阜驛より關迄電車)高山を通つて越中笹津へ歩いた事があるだけである。山の經驗といつては大山に登つたのと箱根の乙女峠を越えた以外何にもない。かくして昨年白馬から鑓ヶ嶽を降り、有明山、燕、槍ヶ嶽、燒嶽等へ登つた。その時準備さへよければも少し深い山に入れると思つたので、今年になつて前記の山を伴れて歩いた譯である。

山に於ける服裝と云つても別に變りはない、着物は筒袖で袴は括りにして居た、それに麥藁帽を用ゐた。カンジキを着ける時は、下に普通の足袋を穿いてその上に刺した足袋を穿いて居た、刺した足袋には、一尺許りの眞田紐の中央一寸許りを足袋の甲に横に縫ひ付けて置く。これはカンジキを一旦普通の通りに穿いて、その後からこの紐をカンジキの環に通して折り返して足の甲の上で

しつかり結ぶ爲て、そうすると雪溪を横に歩く時なぞカンジキが横にずれなくて非常に好いと思つた、どうしても女はカンジキでもなんても緩く穿こうとするから、それにはこの方法が大變有功と思つた。

山に入つて女の一番困るのは徒渉と藪くゞりで、眞の藪潜りは未だ知らないが、鳴澤嶽の偃松位でも隨分困つた樣てある。あんな所では麥藁帽も邪魔ものだが袴は寧ろ悲慘だ。それに妻は餘りに腕に力がない、それがこんな場合に一番いけないと思つた　普通吾々が急な雪溪なぞで杖を力に登る時でも、妻は杖を横に兩手に持つて登つて居る、何故杖を使はないかと訊くと、力が少しもはいらないからと云ふ、力のいれ方がまづいのか力がないのか知らないが、此の力の弱いと云ふ事は登山に、特に藪くゞりに非常に不適當だと思ふ。併しこれは妻だけの事で女に皆此の缺點があるとは思へない、が又多少似通つた點もあるだらうと思ふ。藪くゞりにもまして困るのは徒渉である。この困難は初より豫期して居たが、どうも好い考も浮ばなかつた。實は黒部川の平の徒渉も人手を借らないつもりで、妻自身もその事を覺悟して、袴をぬいだ時不體裁でない樣、その下に着るべきものも用意して居た、然し先に渉る人を見ると少し女には困難らしく思はれたので、清志が負つてやると云ふのをいゝ事として負はれて渡つた樣な次第である。こんな工合で、何事よりも此の二つが女には困り物であつた。併し服裝を洋服とすれば、此れ等の困難は大に緩和し得る事と思ふ、殊に徒渉の如き丈が高く且つ洋服ならば男も同樣に出來やうかと思ふ。要するに此の二つも男よりは困ると云ふ話で絶對にいけないと云ふ譯ではない。それ以外には女なるが故に特別に困難を感じた樣な事はない。兎も角女で白馬や槍ヶ嶽以外の日本アルプスに登ると云へば非常な冒險の樣に思つて居る人もあるかも知れないが、少なくとも鹿島槍と劔位ならば、冒險なぞとは以ての外であらう。

それから準備については、僕は妻の爲に特別用意をして行つたものはない、唯男のみの場合より

は物事すべて少しづゝ潤澤に用意をして行つた丈である。それで別段不自由を感じなかつた。強ひて云へば、雨のなかで惡る場を歩く時なぞは、莫蓙よりは輕いレーンコートを妻の爲にほしいと思つた。それから妻には換へ草鞋と水筒以外何も持たせなかつた、初めは辨當だけは背負はすつもりでその爲の袋を用意して持つて行つたが、とうとう辨當は僕か弟が背負つてやつた。これはあまり好ましい事ではなかつた。若し少し强い婦人ならば、辨當とその他化粧道具位を入れる小さなリュックサック位は背負はした方がいゝと思つた、その方が一から十まで人の世話にならなくて本人も愉快に違ひない、女は山に入つたら化粧が必要である。こんな事は本誌の讀者は充分承知に違いない、妻は何かクリームを塗つて居る樣であつた、其爲か去年の樣に一皮剝けずにすんだ。

女の登山に就て最も大切な事は、細心にして充分山に經驗あるいゝリーダーが附いて行く事で、僕の樣な山の素人が伴れて行つたのは、此の事のみは冒險と云へる。好い案內者も必要だが、何よりも第一に好いリーダーを必要とする。これは男のみの場合でも同樣であるが、女を伴れて行く時は殊に痛切に感ずる。

リーダーの資格については、僕の樣な素人が云々するも可笑しいが、僕は山の地形について委しい人よりは寧ろ山地の天候に關して正確なる判斷をなし得る人を適當と思つた。天候の事に關しては人夫の云ふ事なぞ少しも當にならない、僕はいくら女でも暴風雨に曝露しない限りは、怪我や病氣の爲に部分的の災難には遇ふとも、全體として遭難する樣な事は殆んどないと思ふ。要するに正確なるバロメーターとこれを判斷する好い頭とはリーダーの持つべき一番大切なものと思ふ。

それから、リーダーはどんな事を注意しなくてならぬか。これも僕の樣な素人が云ふ迄もない事ではあるが、二三氣付いた事を書いてみるならば、一番緊要な事は日程を樂に作る事と思ふ。無理をしたり道を急いだりする時に多くは災難を惹き起す。妻や弟は毎日の行程が常に樂過ぎる樣な事を云つては、不平を洩す事などあつたが無經驗

の吾々が少しも山を恐れず愉快に且平氣で歩き得たのは、險惡なる天候を避け得たるにもよるが、多くは日程を樂にして居たが爲と思ふ。又こんな事もある、去年信濃山岳會の人達に加はつて槍ヶ岳に登つた時、或る女學校の教師だと云ふ人が、私に妻の歳を尋ねた故、正直に二十二歳ですと答へると、それは感心だと云つて其人は「私が女生徒を伴れて山に登つた經驗では、十六七歳までは皆能く歩けるが、それから年を取るとどうもいけない」と云つて居た、こんな事もリーダーは心得て置くべき事かも知れない、十五六の頃よく歩いたと云つても二十を過ぎたら餘程加減しなくてはなるまい。それから多人數を伴れて山に入るのは全然いけなくはないが餘程好い條件が揃つた時でなくては危いであらう。又肥つた女は不適當の樣に思ふ人があるかも知れないが、僕には何とも云へない。去年百瀬君が三人(?)の婦人を伴れて、大黑から不歸を通過して白馬岳大池と歩かれた時の寫眞には、隨分肥つた婦人も居られた樣だ、且その時の話も聞いたが、大した困難も感じなかつたとの事であつた。

要するに日本アルプスは獨り男子のみに許されたる天地ではない。僕の僅かの經驗によつて得たる所を一言にして云ふならば、僕はそれが有名な險惡の山でない限り、現今澤山の男子が登つて居る山へならば、女でも身心共に健康でさへあれば誰でも登れると云いたいのである。（大正九年十月。竹内鳳次郎）

雜報

○槍岳新登山路

日本アルプス大天井岳より東鎌尾根を經て槍ヶ岳に達することは從來最も至難とされ、之れを通りし者は極めて稀なりしが、今回信濃山岳會員の百瀨彦一郎氏等の盡力にて、大天井より槍ヶ岳の殺生小屋へ通ずる近路を開鑿したり。右に付き百瀨氏森林主事小吹氏外二名の一行は去る廿六日中房溫泉を出發し、新登山路を辿り、廿八日上高地に出でたり。尙ほ信濃山岳會幹事にして有明口登山案内人組合の赤沼千尋氏は燕岳の頂上へ小屋を新設し、一般登山者の便利を圖ることゝし近日中に着手し、大雪の來ぬ内に竣成せしむる都合なりと云ふ、右に付信濃山岳會にては登山路を詳細に記入せる日本アルプスの新地圖を出版し明年の登山期前に發行する豫定なりと云ふ。（大正九、一一、一、信濃毎日新聞）

○淺間登山道改造

淺間登山者は逐年增加し今年度の如きは小諸口が四萬八千七百三十一人輕井澤口が一萬四千五十人沓掛口が九千七百廿三人の合計七萬二千五百四人と云ふ多數の登山者中小諸口より登山するもの最大なるに鑑み從來の凸凹の細道にては登山者困難せる處から一般公衆の爲め登山に容易ならしむべく依田繁太氏外二三の者が奔走して町内有力者の寄附を仰ぎ又一方絕頂までの行程三里二十七町間に亘る山林中過半以上を有する小山太郎氏へ道路幅六尺通りの山林に對し之れが提供の交渉を爲したるに公衆の便益なればと速に交渉成り先頃道路改繕に着手したるが來年度の淺間山開き迄には完成する豫定なりと。（大正九、一二、四、信濃毎日新聞）

○北海道山信

十三日北見利尻山に初雪が降つた例年に比べると約十日早く寒氣を覺え更に十九日午前五時十五分頃から六時四十分頃まで仙法志村は晴天であつたが突然西方に黑雲現はれると共に雷鳴烈しく直徑一寸三分の雹が降り出した爲道路は人馬不通となり二寸餘も積つたが三十年來の奇現象であると村民は一時大騷ぎであつた。（大、九、九、廿二、小樽新聞）

渡島國茅部郡駒ヶ岳は昨年六月十七日午前二時爆發多量の噴烟を來し爾來三回小爆發を起し後漸次減烟沈靜異狀なかつたが廿日午前八時十分音響を發し噴烟少しく增加した傾向があるので附近村民の恐慌一方でない。（大、九、九、廿三、小樽新聞）

蝦夷富士山巓に於ける偃松地帶は先年山火の爲め荒果て爾來自然に崩壞し融雪期或は豪雨の際には常に山崩れを起して山麓の住家を壓ひつゝありしが客月來益々甚しく區域も亦擴大し殊に同月八日の豪雨の際の如きは瀕々として巖石砂礫崩壞し來りて殆んど山海嘯の如き狀を呈し遂に山麓なる虻田郡眞狩別北九線三坂林治所有の家屋一棟埋沒し其他危險に瀕せる家屋數戸を見るに至り消

防組總出動をなして部落民の救援に努め一時は大騷動を極めたり是が爲め折角作付けせる耕地及び山林等數十町歩砂礫に埋沒したれば損害十數萬圓に上る可しといふ猶北海道廳地方林務主任津村技手須藤技手等の一行は二十九日三十日の兩日に亘り中野村長及び村有志の案内にて實地調査を遂げたるが近く應急施設をなす可しといふ。(大、九、一〇、四、北海タイムス)

從來十勝國廣尾と日高國浦河間の道路は既に世に知られたる難所で常に同地通過の旅客を恐怖せしめ兩國間の交通は想像以上の不便を極めて居たこれが爲め既定日勝線の如きも猿留冬島の山道並に海岸の高峰斷崖の爲めに遮られ住民をして今日尚鐵道の恩惠に浴せしむる事出來ず空しく天與の遺利を放棄せしむるのは拓殖上甚だ遺憾とした處であつた幷處で兩國住民は奮然として日勝線速成を達成せんとして浦河廣尾間の國境踏査隊を組織し双方より協力調査を開始せんとする矢先偶々杣夫の談に最も容易なる浦河越するを聞いたので先づ廣尾より探檢隊を差遣踏査せしめたる處是迄世人一般難所として顧みなかつた日高山脈中に甚だ低い通路あることを發見することを得た。右踏査隊は九月七日午前九時廣尾市街を發足し西幌尾川を溯り幌滿川本流に下る沿岸にて一望際涯なき原野は將來有望なる農耕地として見る可きもの尠からず國境通過山脈と冬島山の通過山脈とは直立の勾配及び高さが相伯仲し居るが局外者側から見れば頗る短距離の隧道二ヶ所許りにて他は皆平々坦々とした水稻鞠穫の新樣似西方を經て一路直に浦河町に達する事が出來る最初の踏査隊は途中降雨に遭ひ又出水等で豫定日數を超過したが普通三日間あれば大丈夫である。今回の通路發見は日勝線の速成を具體化せしむる所以で兩國住民にとつては誠に慶賀す可きことである(大、九、十、四、北海タイムス)

十月七日朝千島國擇捉島紗那チリップ山に初雪降り平地には初霜あり。初霜は平年よりも九日遲れ昨年に比して廿五日早し。(大、九、十、九、小樽新聞)

札幌附近に於ける八月は可なりの寒さで手稻山に初雪を見た。平年から見て六日昨年に比べて七日早く最低氣溫華氏四十五度一分昨年の初雪の日の最低溫度よりも九度高い。(大、九、十、九、小樽新聞)

有珠岳は去る明治四十二年八月二旬餘に亘る大鳴動と共に山麓なる九萬坪附近に數ヶ所の新噴火口を穿ち人心を聳動せしは今尚讀者の記憶する處なるが其後何等の變動なく且つ當時の慘害最も多かりし床丹湖畔には溫泉湧出するありて昨年來溫泉宿の設けさへ出來陽氣なる氣分を漂はせ居たりしに去月二十六日午前五時頃時ならぬ大鳴動を發し復も噴火を見るならんと人心悚々たりしに幸ひ溫泉宿を去る二町餘の箇所に泥流を流せるのみにて大事に至らざりしが以前の噴火の際に隆起せる箇所の落磐せしにあらずやとの觀を有するものあるも事實不明なりと。(大、九、一一、七、北海タイムス)

○淺間山爆發

△大正九年十二月十日　北佐久郡岩村田地方より見たる淺間山の大噴烟は十日午前十一時五十分頃大音響と共に淺間山頂に

黑烟の柱立ち昇り鱗て其の黑烟は東南方に向つて崩れたるが、輕井澤方面と思はるゝ邊に降灰夕立の如く降れるを見たり音響は餘り强からざりしも之れは積雪の加減なりといふ。先頃淺間山脈の何れかにて大音響を發したる事あり又七日頃には地震二回あり之等は或は今回の大噴烟の前兆なりしに非ざるかと思はる。（岩村田電話）

輕井澤にては一大雷鳴の如き音響聞へたるよりスヅ淺間山の噴火よと戸外に飛び出したるもの多く音響と同時に黑煙天に冲し後北上州方面に靡きたり噴煙は猛烈なりしも被害なく降灰降石等少しも認めず。（輕井澤電話）

沓掛にても輕井澤同樣音響を聞き噴煙を認めたるも噴煙丈けにて何等の被害を認めず。（沓掛電話）

御代田方面にも大噴煙を認め得たるが何等被害なく佐久平にも又被害ありし事を聞かず但御代田附近には幾分の震動を感じたり。（御代田電話）（一二、一一、信濃毎日新聞）

淺間山は十日午前十一時五十九分俄然濛々たる黑煙を噴出し午後零時一分に至るや一大音響と共に數回に亘りて爆發黑煙天に冲し前橋方面は二時十六分より三時二十五分まで降灰あり西上州一帶を初め新田郡尾島町等にては二時間に亘りて多量の降灰ありたり。（高崎電話）

十日午後三時頃より夕刻まで茨城縣下館町地方に降灰ありたり淺間山の爆發ならんと。（下館特電）

淺間山爆發の結果足利方面は正午過ぎより空暗黑となり午後二時半よりは砂と共に降灰幾なり。（足利電話）（一二、一一、東京朝日新聞）

△十二月十四日　淺間山は又復十四日午前五時頃大鳴動あり、恰も大地震の如く一陣の風を吹き起し信州佐久方面一帶に戸障子を震はせ約四十分に亘りたるのみならず火焰天に冲し其壯觀言はん方なく近來稀なる大爆發にて五時半頃より黑煙と變りたるも猶鳴動歇まず、佐久方面には何等被害なきも群馬方面には降灰のみならず多少の被害あるものゝ如し。（十四日、岩村田發）

前橋市も戸障子震動し降灰は雪の如くなりしが山麓の長野原警察分署よりの報告に依れば鳴動は約十五分間に亘り朦朧として黑煙を噴出し山上は一大火柱立ちて凄慘たるものあり恰も西風激しかりしより碓氷郡より群馬郡方面に降灰甚だしく長野原附近は大地震の如くにて家鳴り震動したるが確たる被害は未だ判明せず鳴動は猶ほ終熄せず人心恟々たるものあれど未だ避難する程にはあらざる如し。（十四日、前橋發）（一二、一五、東京日々新聞）

淺間山は近來頻々として鳴動しつゝあるが十四日午前五時三分又復鳴動を爲し十五分間に亘り連續して濛々たる黑煙を噴出し恰も西の烈風に煽られ黑煙は碓氷峠より前橋方面に流れ長野原警察署より見たる所に據れば淺間山上には一面の火柱が立つて消える間もなく黑煙は東に迫り鳴動甚だしく强震の如くにて吾妻郡嬬戀村大字大笹附近には饅頭大の燒石落下し同時に燒砂を多量に降らしたるが被害目下取調中なり又松井田警察署の報告に據れば鳴動後三十分を經て近來見ざる多量の降灰あり前橋方面に於ては恰も大砲の響きの如く十五分間連續して鳴動し五時二十三分より九分間に亘り黑煙の襲來と共に燒砂降り從來の降灰と其趣を異にし居

れり前橋測候所觀測に據れば鳴動は五時三分より始まり山上に光を放つて凄絶を極め五時三十二分より九分間の降灰量は一坪に三十七匁五分なるが處によりて百匁の降灰あり又午後五時五分再び鳴動し黑煙天に冲して凄絶なる光景を見たり。(前橋電話)(一二、一五、東京朝日新聞)

岐阜地方では十四日午前五時十分から凡そ八分間に亘り非常の鳴動起り家屋の震動甚しく多くは屋外に避難した有に就き岐阜測候所では信濃飛驒の國境にある硫黄ヶ嶽(一名燒ヶ嶽)の噴火と認め直ちに同地に調査方を命じたが岐阜縣では震動地が吉城郡上寶村字中尾に接して居り多數の人家があるので直に取調に着手した尙飛驒高山に降灰があつたが之は淺間山の噴火と判明した、(十四日、名古屋)(一二、一五、東京日々新聞)

△十二月十八日　十八日午後十時十分頃一大音響と共に淺間山又復噴火し黑煙柱中空に屹立し火光閃々として壯觀を呈したり煙柱は風の加減に依り佐久平に倒れ岩村田附近の天に迄及びたるが志賀村附近には飯食茶碗乃至茶呑茶碗大の石が降り村内の若者連は驚き慌〻屋内に逃げ込みたり伍賀村邊には灰と共に指頭大の降石あり鳴動は數十分間に渡り岩村田小諸附近の戸障子を震動せしめたり當夜は薄蟲りの空なりしかば偉觀なりし然るに十九日午後二時半頃又々二分間位に亘りて地鳴りあり煙火二尺玉の破裂の如き音響と共に天に冲する黑煙は大壯觀を呈せり濛々たる噴煙は北上州方面へ横はり之を小諸附近より望見せるに煙の先は高崎邊に達せる如く見えたり爆發刹那の光景は白晝のことゝて火花の閃き比較的少かりし二時間を過し四時四十分頃更に小銃發砲の如き音を以て大噴煙あり太陽既に西山に沒する際の薄赤き光線が黑煙を射る有樣は言語に盡し難き美觀壯觀なりし。(一二、二一、信濃毎日新聞)

富士山麓御殿場地方に十八日午後十一時突然夥しき降灰あり灰は光を帶び砂を混じへて白褐色を呈し傘を翳さゞれば一歩も戸外へ出づる事能はず十九日午前二時頃まで降り續きて歇みたるが場所に依りては一寸位積り居れり富士山には何等の變化なき模樣なれば多分淺間山の噴火灰が氣流の關係にて飛來したるものならんかと嘗て寶永年間富士山の大噴火以來斯る現象を見たる事なく地方民は又復富士山の噴火ならんと一時は人心恟々たりき。(十九日、御殿場發)

十八日午後十一時十五分頃より翌十九日午前三時迄の間駿豆方面一帶にかけ細末の砂を交へたる降灰あり殊に御殿場驛の如きは一時作業困難を極めたり沼津測候所にては淺間山の降灰ならんかと目下調査中なり。(十九日、沼津發)(一二、二〇、東京日々新聞)

淺間山は引續き二十日午後七時半頃も音を立てず濛々として火氣を含める黑煙天に冲し廿一日午前八時十分頃は微音と共に大噴煙を爲し煙は北上州方面へ流れ一時間餘にして歇めり同午後十一時廿分頃小諸町より淺間山方面を望見するに此時も亦赤黑き煙立ち十五分間位にして煙は北方へ靡き居たり聞く所によれば山麓の小沼沓掛方面にありては何時大爆發あるやも知られずと人心恟々たり。(一二、二三、信濃毎日新聞)

△十二月二十二日　二十二日午後七時淺間山大爆發を爲し火の柱數十丈天に冲し頗る壯觀を極めたり此の爆發に熔岩は佐久

に面したる南麓に流出せるものゝ如く爲に碓野の林野に一大火災を起し三十分を過るも尙火焰は天に冲し居れり因に今回最初に爆發せるは去る十日にして第二回は十四日次は十八日にして尙又も廿二日爆發を爲せる等四日毎に爆發を續け居るは未だ曾て見ざる奇現象なり。（岩村田電話）

淺間山廿二日午後五時三十五分大爆發を爲し夫れより引續き同六時五十五分に到りて又々大爆發に次いで大鳴動あり山頂は目下一面に火焰に包まれ火の海と化し居れり。（沓掛特電）

廿二日午後七時淺間山大音響と共に大爆發をなし全山火を以て包まれ北上州の方面に向つて熔岩は流出したるものゝ如く此れが爲めに一天を眞紅に染め噴煙は十數里に亘り悽慘の光景を呈し人心恟々たり。（輕井澤特電）

淺間山は廿二日午後七時大爆發をなし當地に於ても强き鳴動を聞きたり此の時に庭に飛び出でたるに電光の如くピカ〳〵と閃きつゝ熔岩燒石等の噴出猛烈を極めつゝあるを見受たり。（春日電話）（一二、二三、信濃毎日新聞）

十四日以來常に活動を續けつゝありし淺間山は二十二日午後三時前回（十八日）のそれよりも大なる爆發あり山麓及群馬方面に多量の降灰あり午後六時半に至り轟々たる物凄き音響と共に一大噴火を爲し閃々たる電光の如きもの山頂に閃めくと見る間に火柱は天に冲しやがて飛散して煙火の如き火の粉は全山を火の海と化したり最近の大噴火と言はれたる十四日の噴火よりも大なるものにて斯の如く全山火となれるは未だ嘗て見ざる所なり。（長野電話）

淺間山は二十二日午後三時十分濛々たる黑煙を吐き東北東に流れ物凄き光景を呈したるが更に三時三十分再び大鳴動をなし黑煙を發し三時五十五分より約十分間に瓦り碓氷、吾妻、群馬、勢多、前橋等に降灰あり前橋測候所の調査に據れば一坪二匁四分にてそれより五時三十分二回の大鳴動あり前橋地方は戶障子震動し黑煙亦東北に流れ五時五十二分前橋の上空に來りて降灰あり五時五十分頃は群馬縣北部一帶は曇天の如くに變じ更に午後六時五十分降灰あり七時二十分に至つて已む又六時五十八分第三回の大鳴動あり數分間連續して前橋方面は恰も强震の如く前橋より望見する所に據れば山上は火柱立ち程經て黑煙と代り其內に小石大の光を放つもの東に向つて飛び慘憺たる物凄き光景を見るに至り七時九分前橋上空に黑煙來りて降灰あり長野原警察署の報告に據れば接近せる群馬縣西部の山中には可なり大なる燒石降り又山麓には大石落下したるものあるべく被害調査の爲長野原警察署より巡査三名を山麓に急行せしめたり。（前橋電話）

長野原警察分署から昨夜九時半に達した報告では九時頃淺間大前東方一、二里見當の所に熔岩石落下して大火災となつたが大前駐在所から見た所火災の場所は危險近づく可らず唯群馬縣の地域と丈は明かだが山林か民家か判明せぬので鎭火と危險なきを見極めて出張する筈又大前附近には直徑一尺位の大熔岩石落下し小なるは無數で殆ど全地面を埋め盡した、殊に山麓一里の周圍は熔岩の爲に全部火と化し茶屋抔は全滅したらしい、吾妻郡地方でも甚だしきは屋根を破壞し屋外通行中の人畜に死傷もある模樣だが詳細は取調中。（前橋特電）

淺間山は昨夜七時更に一大爆發を爲したるが折柄月明の夜の晴渡りたる天空に爆煙數十丈火焔天空に渦き上ると共に白雪皚々たる全山に降灰して同山は爲めに火と化し北方群馬縣國境に亘りて大山火事を起し熾々燃え擴がりて容易に消ゆべしとも思はれず。（廿二日午後八時日田電話）

淺間爆發の爲め輕井澤の北方東長倉村小瀨溫泉場附近山中に山火事發生し十數町歩に及び今尙燃えつゝあり。（二十三日午前零時高崎發電）（一二、二三、東京朝日新聞）

△十二月二十六日　十日大噴火を爲したる淺間山は其後規則的に四日目には必ず爆發を繼續し來りしことは既報の如くなるが二十二日の大爆發後四日目に當る廿六日も氣道はれ居りし所俄然午前十時頃大音響と共に噴火を爲し約四分間黑煙火石を噴出したり黑煙柱は東方に向ひ群馬縣方面に流散したり同方面は降灰ありし所もあるべし又岩村田に於て肉眼を以て火孔附近へ火石の降下するを眺め得たる程なれば若し夜間なりしならんには二十二日の噴火の如き壯觀を呈したるならん大森博士は噴火當時淺間山の東麓小瀨溫泉附近を視察中の筈なれば大に得る處ありしならん十一時四十分に至り第二回の噴火を爲し今尙黑煙の立ち上りつゝあり。（正午岩村田電話）

淺間山四日目毎に五回爆發本日午前十時四十分大音響と共に黑煙濛々と天に冲し漸次東方に流れたり日中の事とて白熱せる熔岩は目に止まらざるが濛々と噴煙する煙より高く噴き上げる石は疊二疊數位のもの手毬の如く明瞭に見えたり被害不明（小諸電話）

前日來活動中なりし淺間山は二十六日に至り更に劇烈となり午前十時四十分第一回爆發を爲し引續き同四十二分三十秒第二回、四十三分第三回、四十四分三十秒第四回、十一時三十七分第五回に亘つて斷續爆發し山麓なる群馬縣長野原及び松井田、安中地方には盛んに降灰あり前橋地方は午前十一時より降灰あり午後一時に至るも尙ほ歇まず益々鳴動を續け尙ほ爆發の兆あり人心恟々たり。（前橋電報）（一二、二七、信濃毎日新聞）

淺間山は又復二十七日午後四時十五分頃大爆發したが此時風なくして濛々たる黑煙は數百丈を眞直に立ち昇りたるが三分間にして東方に流散せり引續き同五時十分頃の爆發は小諸附近より望見するに濛々たる黑煙は淒絕を極めり何れも噴煙は東北上州方面へ流れたれば溶岩の飛散は免れ得べからず尙仄聞するに小瀨、二度上げ、ツマ越地方のものは夜は交代に就寢し居れりといふ。（一二、二九、信濃毎日新聞）

淺間山は本日午前十一時二十分又復爆發し鳴動少かりしも噴煙は頗る激しく東南の空に流れたる爲め高崎地方約二十分間多量の降灰ありたり。（午後一時十分高崎特電）

二十六日午前十一時頃茨城縣下館町地方上空西方より灰白色樣のもの襲ひ來り忽ちにして一天掻き曇り物淒き光景を呈せるが軈て粉雪の如き降灰あり一面薄霜降りたるが如き奇觀を呈せり。（下館電話）（一二、二八、東京朝日新聞）

淺間山の爆發狀況をフイルムに製造し之れを活動寫眞に映寫して一儲けせんと企てたる東京國際活動寫眞會社員の一行は二十六日午前十一時の爆發を山麓の芦の平にて遠望し之れをカメラに收め登山の出來ざるを幸ひ其中の一名が上田市に來り『活動寫眞隊

の生死不明なり』と特に東京の各新聞に打電して之を掲載せしめ斯して一行は悠々と引揚げ來りて同日午後小諸より歸京せるが彼等は興業師根性を遺憾なく發輝し新聞を利用し以て映寫前に評判を高からしめんと企てたる事如何にも不屈至極と云ふ可し。（小諸電話）（一二、二八、信濃毎日新聞）

○淺間山爆發調査

十四日午前五時五分頃の淺間山爆發は豫想外に大なる活動にて頂上噴火口より東の方約一里半距の草津街道峰の茶屋附近まで大なるものは長軸五寸短軸三寸位の楕圓形の堅緻なる熔岩を落下せしめ之がため峰の茶屋は全部燒失するに至れり一寸二寸位のものは無數にて地上一面に降下せし小石に米粒大より五分位のものあり而して特殊の現象とも見るべきは多大の浮石の落下にて此浮石は小瀬溫泉附近にまで及びたり但此灼熱熔岩落下區域は狹長にして噴火口より東方に向ひ幅員約十八丁長さ一里餘にて上信國境別去の茶屋に至れば既に降灰だもなく南は沓掛驛に至れば頗る僅少となれり然し東の方に昇散せし灰は恐らく遠く東太平洋に及びしならん今回の爆發に付いて學術上興味且つ研究の好材料たらんと思はるゝものは爆發の大音響即ち大砲の如く煙火の破裂せし時の如き激烈の短波音響なくして比較的緩長なるドドーンといふが如きものと戸障子の長く震動したるとにあり余は事務の都合上東方山麓のみを蹈査して頂上には登らず歸りたる故山頂附近の狀態は知る能はざれども今朝大森博士と中央氣象臺の地震專攻の中村博士及び震災豫防調査會の加藤技手長野側候所川添技手が數人の强力を伴ひて冒險的登山をなし明日乃至明後日は小諸若しくは沓掛に下山の豫定にて大森博士は十八九日長野に來る筈尙今回の大爆發は幸ひにして午前五時前後に起りたる爲め悲慘事を見ざりしも若し晝間爆發したらんには目下草津街道を木材搬出の爲往復しつゝある荷馬車十數輛ある事なれば人畜の死傷は免れざりし處ならん。（西澤測候所長談）（一二、一七、信濃毎日新聞）

去る十四日爆發せる淺間山を實地視察せる大森理學博士は十七日下山し今後の淺間山に就きて左の如く語れり。

淺間山は明治四十二年乃至大正三年迄六ケ年間尤も著しく活動し强く爆發せる事數十回に及び天明大噴火以後の大活動時期を示したり爆發の空氣波動の爲め附近の町村に於て硝子戸を破壞し家屋震動し鴨居を落下せしめたる事あり又火口より約一里の距離以内に灼熱の熔岩塊を放射したるが大正三年を以て此終りを告げ爾後淺間山は平穩となり昨年三月十四日に至り始めて一回の爆發をなしたりそれより今年の夏に及んでは極めて平穩となり全く睡るが如き狀態となれり平穩なる時期繼續すれば次に多少破裂すべき筈にして今回十二月十日及十四日の二回噴出したり第二回の噴出は第一回の噴出よりも稍强かりしが共に爆發的に非ずして稍長く繼續せるを特長とす、爲めに浮石をも多く噴出し小諸方面より登山すれば西側九合目に至りて始めて熔岩の落下あり然も巨大なる熔岩を放射せるに非ずして三四尺以下の岩塊を無數落下せしめ九合目より頂上迄の間は田を耕したる如く又砲彈の炸裂したる如く多少の穴を穿ちたり然るに東の方面は熔岩塊浮石灰の積れる事著しく坑の邊には長さ八九尺の熔岩が落下し居れり小淺間に向つて

降る途中は全然雪を見ず全く降灰石の蔽ふ處となり居れり峰の茶屋に於ても大小の浮石及び堅き熔岳塊多數降下し最大なるは長さ二三寸に及べり噴火の當時西風強かりし爲めに上騰せる煙柱を東に流散せしめたる爲めなり從來は淺間噴火口西北絶壁下の坑底より活動し居りたるが今回の噴出は坑底東半部より起れり坑底の中央邊南北に併行したる坑あり多分十二月十日の噴火坑ならんと思はる夫れより東の方大凹みが同じく今回生じたるものにして之れは十二月十四日の噴火口ならんと思はる其場所は從來灰や石にて殆ど緩やかな傾斜をなして埋もり居りしを今回の破裂に依つて其物質を噴出せるものなり其結果淺間坑底の東半分は著しく深さを增北側の最低坑底より百二三十米突の深さに達し居るならん明治四十二年乃至大正三年の活動時期には爆發的勢力極めて强かりしのみならず遂には坑底の熔岩面を降起せしめ將に坑外に逸出し流下せんとするの勢を示せるに至りしも其後再び坑底は沈下したり今回の破裂に於ては爆發的勢力弱きのみならず少しも坑底隆起の現象を認めざるを以て前時の如き大活動時期に非ざるは明かなり十二月十四日の噴出の爲め坑底を充したる灰石の多量を噴出し大なる凹みを生じたるに依り一段落を告げたるものと考へらる今後小さき岩塊を坑壁附近に落下せしむるが如き小噴出は數次有らんも顯著なる破裂は目下一先づ終れるならんかと考へらる登山者の少き時期に破裂したるは幸ひなる事なり。（小諸電話）（一二、一八、信濃毎日新聞）

大森博士の一行は廿六日早朝小諸を發して小淺間に向ひ此處にて端なく大爆發に遭遇せり現場にある余は今其目擊中の詳細を報ぜん、當日は前日の風雪に滿目皆白く殊に廣原の樹枝悉く凍りて佳麗を極む日は恰も爆發後四日目なり、博士も今日は爆發しさうだなど語りつゝ十四日の爆發に燒け盡したる草津街道を眞北に辿りて茶屋の燒跡に到着す、時に午前十時卅分博士等が仔細に現場を視察中十時卅六分廿二秒火口より黑煙天に冲すと見る間に大音響を發し鳴動約十分に及び三十八分四十秒の永き間燒石を落下し一行は石雨に包圍さるゝ事數十分殆ど身をかはすの餘地を有せず煙は山頂より八千米突に噴き上げ東に倒れ遠く太平洋に流れたるならん落石止みて一息せる一行は激甚なる降灰の爲めに窒息せんとせり、次で第二回の爆發は十一時三十五分二十秒に始まり約十秒を距てゝ前後八回の鳴動を聞けり小淺間頂上は暗赤色の灰に包まれ第三回は小淺間の東大ダルミにて遭遇し十一時五十三分三十秒に始まり鳴動二回あり一行は十二時八分信濃上野の國境に來りて休む、此處は例のヲケサレの茶屋を距る十町の處なり、一行中食を攝る、時しも同十三分第四回の爆發あり大鳴動六回に及ぶ第五回は同二十分三十秒にて數回の音響あり、噴煙夥し、同三十七分第六回の鳴動あり、降灰夥し、午後一時十四分第七回目の噴煙と鳴動を聞けり、一行は國境の切開きを急行して草津輕便鐵道に路を距る二丁の地點にて第八回目の大爆發あり、此所は火口より四里余の地點なるに噴煙は五分にて一行の上に降下す上空風遠の迅きを知るべしこの日鳴動なく噴煙のみありしは枚挙に遑なし前夜降りたる白雪は瞬間灰色となり地上は不快なる色彩を呈せり、輕鐵線路を距てゝ小瀨に向ふ途中降灰の爲めに呼吸を害せられ着衣悉く白く顏面も白粉を裝ひたるが如し、午後四時五十七分、小瀨に

て大噴煙を見て後輕鐵の客となり輕井澤に向へり然して小諸に歸りたるは九時半なりき、大森博士は今日の爆發に就きて語る『煙が一回毎に高さを高むるは噴火口深く壓力强きが爲めなり、灰は恐らく太平洋まで運びしならむ、何となれば煙は遠く行くに從ひ高く昇り行けばなり、されど今日の爆發は電光無く草木も燒かざれば勢力强からず、噴火の位置は北の穴なりと思はる、第十、第十四の兩爆發にて南東の火口より噴き從來の北火口を埋めたるを見たり然るに今日北より噴き出したるを見れば火口或は舊に復し終熄に近きに非ずやと思はる淺間山下の最も近き地點にて此爆發に遭遇し落石、降灰を即座に集めたると、多數の得難き經驗を爲せるは欣喜に堪へず』と因に博士は多分二十七日午前十二時四十分小諸發列車にて歸京さるべし。(一二、二七、東京朝日新聞)

二十六日終日危險を冒し爆發最中の淺間山を視察し了り輕井澤より乘車し午後九時七分小諸驛に下車したる大森博士一行を小諸驛に迎ふれば博士は左足指に凍傷を負たりとて重さうな足を校屋旅館に運び記者に語る廿六日、第一回の爆發は丁度峰の茶屋附近に休息して居た時で時間は午前十時三十六分二十秒から初まつて十時四十八分迄繼續してゴー〳〵と云ふ唸聲が聞こへた卽ち十二分間の長さで音響は吐き出された噴煙の中から聞ゆる之は爆發の際起る音響を煙に依つて傳へられるのである此間盃大の堅石がバラ〳〵と降下して來たから木蔭に身を寄せて事無きを得たが灰は充分冠せられた第一回爆發の噴煙は東々南へと走つた第二回目はズドンと大音響を發して午前十一時三十四分十五秒に初まつた此の時は峰の茶屋より北へ五六町の場所にゐたので降石の區域外であつたから避難の必要は無かつたがゴー〳〵と云ふ響きは十一時四十一分廿五秒迄繼續した音響の時間も又總てが第一回よりも微弱で有つた、第三回は十一時五十一分十五秒次が午後零時十一分十秒次が零時十八分次が零時二十一分次が零時三十五分次が一時十一分五十秒次が一時五十三分三十秒次が二時十一分二十秒次が二時五十三分二十秒次が四時五十一分二十秒と斯多數の噴煙が有つたが第一、第二回の爆發に比較すると極めて貧弱なもので有つた初め一二回强かつた爆發の噴煙は高さ約一萬五千尺に及んで此の噴煙の上昇する時が約三分間一秒時間に二十米突許りの速度である噴煙の時間は强かつたもので五分間內外繼續した噴煙の橫に流るゝ速度は五分間に約二里卽ち一時間に六十哩を走る速度で勿論此噴煙の中には灰を包含して居る、二十六日の爆發は火口底の西北の部分から噴き出したものと考へられる、十日十四日兩度の噴火は孔底の東の部分から噴火した事は十七日登山の際親しく實見した處であるから十八日か或は廿二日の爆發から西北部へ遷つたものと想像される、廿六日一二回の爆發の强き破裂は廿二日と同じ爆發的のものであるが單純な爆發である大正元年の爆發に比較すると大正二年の爆發は單純の爆發と成つて孔底の隆起を四ませて終つた今回の爆發も勿論單純の爆發で孔底は最初の爆發で東部を深くして終ひ三四回後の爆發で孔底の西北部に堆積して有つたものを噴き出して終つたから孔底全部を深くしたから平常の狀態に復歸するのも近い話で以後に於ても非常の大勢力を持つ破裂となる狀態はない、廿二日の大爆發に付ての被害としたら草野を燒いたに過ぎない峰の茶屋は別物として云々、語り終つて博士は

年末事務が忙しいと言つて廿七日午前零時十四分小諸發の夜行列車で歸京した二十六日午後十時記す（一二、二七、信濃毎日新聞）

○淺間山の噴出物研究

最近頻りに爆發を繰り返してゐる淺間山の噴出物が鑛物學上の方面から見て、如何なる關係があると云ふ事を調査す可く、二十五日長野を發し二十六日沓掛から、別去の茶屋迄、實地踏査をなし尙且つ同日四回の爆發を親しく目擊した上に、幾多の材料を携へて、二十六日夜歸長せる、長野高等女學校教諭八木貞助氏は、數種の噴出物を記者に示しつゝ語る「間口六間に奥行三間半の、茅葺の峰の茶屋の燒けたのは、十四日午前五時の爆發で、此時此の茶屋には五人の人が居たが、降つて來る熔岩の爲めに、兎ても難は免れまいと見て荷物は悉く外に取り出したが家は熔岩の熱から火を發して遂に全燒に歸した、自分は夫れより別去の茶屋に至つて種々調査したが此茶屋の主人は土谷吉五郎と云ふて震災豫防調査會からも淺間の調査を依囑されて種々記錄にとめて居る特志家である處が幸ひな事には自分が此茶屋に居た時、即ち二十六日の午前十時四十分と云ふに、ドンドン、と云ふ大きな山鳴りがしたと思ふと、淺間が大爆發して、其噴煙は恰度コーリフラワのやうな狀態で、下から七八回も煙がモク〳〵と遣つて來た、それが先から入道雲のやうに變化して何んとも名狀の出來ない壯大な雄大な凄愴な痛快な、狀態を示したが、當時噴煙の中には、電光のやうな光を發し、輕石は煙から外部に、ポイポイと飛ぶのを見受けると共に黑い石は重い關係から、直下するのを見受けた、此の爆發に私が始めて聞いたのは、其噴煙が一種の音響を發して崩れる光景で、音響が如何な原因で起るのか未だ研究して見ないが兎に角自分として頗る有益な經驗をした、此爆發は十分間程であつたが可なり大きな爆發であつた、尙爆發はそれより十一時四十分、午後零時十五分、一時五十七分と三回繰返された、自分は午後別去の茶屋を出發して峰の茶屋附近を調査した處が、三丁程去る地點には、直徑三寸位の火山彈が二坪に一つ一寸位なのが一坪に一つ其他米豆大位のものは、無數に噴出されて居るのを發見した、而して去る十四日の爆發に噴出した輕石は峰の茶屋附近のものは直徑三尺もあつて、輕いが火山彈狀のものは、却々重い灰は多くは輕石の粉で、火山礫となる可きものである、此れには非常に酸性が含んで居るので、別去の茶屋附近では、煙を吸ふと非常に變であつたと云ふて居たが、當然の結果である、若し今回の爆發が、落葉松其他の樹木に、葉があつたなら、餘程被害は大きかつたものと思ふ、今回の爆發で噴出した輕石と、大正元年十二月十四日噴出した、泡石とを比較して見ると、大正元年のものは、今回のものより一層輕くネバリ氣があつて酸性が強い、けれども瓦斯は徐々として逃げた爲めに、輕石の空隙が丸い、然るに今回のものは中に赤い處があつて、輕石の穴の中が絹糸を引つぱつた樣に、蜘蛛の巣を張つたやうな狀態を示して、更に直徑一ミリから、二ミリ位の黑輝石、及び紫蘇石の結晶や磁鐵鑛の結晶があり、たまには斜長石の斑晶も見受られる、又黑色の火山彈は直徑三寸内外の多角形で、表面にはヒビの入つたものは、瓦斯の入て居るのが少かつた爲である、之は鑛基性の熔岩が固まつて出たも

ので又硝子質で斜長石斑輝石等もある、此石熔岩が即ち草を燒き野を燒いたので二種類が兩極端を現して居るのも面白い、何れにせよ輕いものは、噴火口の上部にあつたもので、重いものは下層にあつたものだと云ふ事が出來る」云々。（一二、二八、信濃毎日新聞）

○淺間復爆發

淺間山は十八日午前九時五十四分遠雷の如き音響と共に大爆發を爲し黑煙天に冲し約五分を經て東北に流れ十時半前橋市の上空に來り吾妻郡方面には多量の降灰ありたるが如く又午後零時二十九分第二回の噴煙あり高崎方面より前橋の南東方に流れ一時は陽光を遮り俄に曇天となりたるが左したる被害なかるべき見込なり。（前橋特電）

淺間山は十八日午前十時と十二時の二回一大音響を發すると共に爆發し噴煙數百丈天に冲し十數里の遠きより望見され壯觀を呈したり白皚々たる山は降灰燒石等の爲忽ちに眞黑となり山麓地方へも小石を降らせたり。（上田特電）

十八日午前十時十分頃又復淺間山噴火し遠く二十里餘を隔つ埼玉縣熊谷地方に激しき鳴動あり戸障子を搖がし黑煙濛々として天に冲するを望見せり（熊谷電話）

淺間山は十八日朝來爆發を續け居れるが午後四時に至り更に大爆發をなし夜に入るも小爆發絕えず火光時々夜天に冲し悲壯なる光景を呈し居れり。（長野電話）

性質は單純になつた

大森博士談

今度の爆發に就てはまだ何處からも報告がないが十八日午後零時三十分十一秒微動計に明かに噴火が記錄されてゐた又午前九時五十分三十九秒にも表はれて居たが前の程明かでなかつた客臘噴火の時には教室の微動計には少しも表はれなかつた處から見て今度は更に爆發的勢力を增したものと思はれる然し性質は單純になつて蒼臘の時の樣に連續的でなく又輕石などの噴出も少ない樣だから危險は少なくなつた。（大正十年一、一九、東京朝日新聞）

○臺灣の初雪

四日朝來氣溫著るしく下降四十七度を示し臺北附近の高山には降雪を見たり今年始めての寒さなり雪見の爲登山する者多しと。（臺北特電）（一〇、二、五、東京朝日新聞）

○會員通信

△豫て計畫致置候通り本年は所謂越中アルプス縱斷を敢行せばやと思立ち七月十七日午後八時十分上野發明石行列車に投じ、會員山下雄昇君と二人連れにて、車中沿線の山々乃至目的地たる藥師方面の想像談に夜の更くるをも忘れ乍ら三四時間をまどろみ、やがて柏原驛を通る頃夜は次第に明渡り申候。戸隱、飯綱、黑姫、妙高の諸峰を指呼の間に眺めつ、油の如く靜まり返りたる、日本

海の渚を走りに走りて、我不知を過ぎ泊に至れば、白馬連峰より黒部方面の秀峰、碧空に聳ゆるを仰ぎ申候、小川、黒部川、の鐵橋を渡り、滑川驛にて下車約一時間待合せて立山鐵道に乘替へ上市あたりより鍬ヶ岳の西正面を心ゆく許りに仰ぎつ、大窓、小窓、三窓の雪溪岩壁の襞の曲折迄一々窺ひ得たるは天に一影の雲だに無き日本晴の天氣の賜物に御座候。十一時五百石驛に着、出迎への人夫長次郎に行李、天幕を委ね、中食を濟して出發致候。何樣日盛の事故何か交通機に利用の方も無之ものかと存じ自働車乃至人力車を交渉致候處自働車は目下富山五百石間を往復致居木年八月より二里奥の千垣の茶屋迄通ずる由に御座候。馬車は特に豫め交渉し置かざれば直樣の用に立不申由。又人力車も千垣迄は大枚三圓五十錢にて參候得共これより先坂路の爲め行くを不肯。出來る事なれは千垣迄も御伴はすゝまぬ樣の挨拶にて何とも不面白候に付午後一時愈徒歩出發と決定、其夜は長次郎の請を容れ小見なる同人が親許に一泊致申候、小見は常願寺川を隔てゝ蘆峠寺に對し居り長次郎の現在の住居、和田とは支流前川を隔て居候。此邊の山より石灰岩を產する由に候、前川は渕れば有峰に達すべく候。

七月十九日午前八時出發芦峠寺、藤橋を經て、行程五里立山溫泉に到着致候は午後三時半に御座候、人夫は宇治長次郎の外米谷長次郎、宮本金作兩人何れも屈强の剛者に有之候。

七月二十日午前七時半出發湯川を渕り、新湯の沸騰を左岸に見ながら鷲ヶ岳に向へる右俣の雪溪下にて中食を認め申候。是より尾根にかゝり午後三時一同佐良峠に着申候偃松採集の人夫三名の溫泉に下る者及慶應山岳會一行十八名に出會申候。後者は五色ケ原に夜營致候。佐良の上りにて驟雨到候へども約三十分にて止み申候。奥大蔦方面には偃松の密生と沮洳地大部分を占め露營の好適地無く、僅かに奥大蔦頂上東麓の偃松中に天幕を張りて一夜を明すことに致し申候、燃料は松の枯枝周邊に横はり至極得易けれども用水は三四十間下の雪解水迄參る必要有之候　夜間可なり寒を覺え申候。

七月二十一日午前七時出發七時三十分奥大蔦頂上、越中澤乘越まで尾根に切明あり、越中澤岳北面は坦々たる緩傾斜地、十時、越中澤岳頂上。白馬方面を除き北アルプス著名の山峰一として眺め得られざるなし、昨年會員飯塚君此處にて大雨に遭ひ眞川に下られしことなど噂しつゝ急傾斜の南面を辿り行けば意外なる哉、偃松中に人の氣配あれば「オホヽ」と合圖するに、同じく返事あり約十分にして顏を合すれば今し噂致居候飯塚君其人ならんとは、「ヤア」とばかり、互に旅程のことなど語り合へば、君は昨年の失敗を物ともせず再企して藥師より五色立山の縱走、更に室堂より早月川を下り伊折に出らるゝ由。山中の邂逅二三分にして袂を南北に分ち成功を祈りつゝ下り行けば程なく數河の左俣乘越に着き申候、是より藥師の北麓迄は有名なるヤブ地帶に有之濃霧の際などは殆んど進路を判し兼ね候場合も不尠由に御座候。乘越より西に下り數河の頭を横に搦む所に名許りの切明け有之先づ今日の通路と可申所有之候。數河の頭に向ひ乘越より尾根の東面を搦み頂上より百米突許り下にて尾根のヤブを潛り西面に出で直西の尾根を下ればヤブ深く惡路ながら處々に「ナタウチ」(鉈打)ありて通過至難には無之候。此ヤブ潛りには前路にて二時間後路にて三時

間弱はかゝり可申候。敷河の右俣乘越は露泊に適當と存候。是より尙ヤブ潜りを續け藥師の尾根にかゝる所に殘雪のある名ばかりの露泊地有之午後四時天幕を張申候。夕刻に至り赤牛方面より物凄き黑雲起り明日の天候を心に煩ひつゝ寢に就き申候。

七月二十二日午前六時半出發本日は愈藥師頂上を極め可得一行士氣大に振申候。昨日に引續き痞尾根のヤブ潜りに始まり雨水の溜にも過ぎざる「ヤクシノ池」を過ぎ一時間餘上りたる所に二三町が程芝生にて數詰めたる大庭園に出申候、雪か水さへあらば夜營には實に上々の場所と可申候。是より約二三十分間も上ればヤブは殆んど無くなり偃松の切明けと相成申候、九時二五八五米突の三角點を踏み小憩、岩井谷頭迄は西北面偃松密生の箇所多く何れも東南面黑部の奥廊下を瞰下しつゝ第一カールの上端を搦む、十一時岩井谷頭着、頂上の藥師堂を目前に拜み候第二カール上部の大殘雪と岩壁の奇觀とに驚き危くも尾根を傳ひ行けば東面斷崖となり西面岩石の磊々たる上を飛びつ、二九二六突の絲嶺、藥師堂前に立ちたるは正午に二十分前、昨夜の暗黑悉く失せて一眸百里立山劔、黑岳、笠、槍より燕、唐澤、餓鬼、鹿島槍、五龍方面、遠く白山連峰迄悉く双眼に收まり申候。一時間休憩坦々たる南面を下る、北面の險峻に比し餘りに平凡と可申候得共太郎兵衛平附近溪谷に到れば其清冽なる水、森林の美に恍惚として仙化の思致候、日猶高かりしも藥師乘越（？）に夜營と定め是より人夫二人をして有峰道眞川の製材所迄二里半の道を米ツギに遣り申候、明早朝歸營の筈なれば主客三人にて廣々天幕を占領致候。

七月二十三日快晴、六時人夫歸る、九時出發、本日は是非共黑部五郎岳を越ゆる豫定に付多少急行致候太郎山藥師峠は東面の殘雪を搦み候爲め尾根を通過不致上の岳は北部の頭を目懸けて中途にて殘雪ある谷の頭に向ひ切明あるヤブに入り南行して殘雪を傳ひ頂上に達し申候、人夫は谷の頭より赤城岳迄尾根を避け中腹を搦むことゝ致候、切明と云ふ程明かなる所もなく上の岳より尾根傳ひに偃松を踏み乍ら三四の隆起を上下し赤城平に下り申候、此所露營好適地と存候、始めて白馬山を望見致候。

黑部五郎岳は面白き山なる由木暮、三枝兩氏より豫て聞及居處此度實地此山に來り成程と肯かれ申候、西面は溫和なる山容を呈し居候にも不關東面は馬蹄形に尾根が二つ平行致居何れも黑部平に向つて低下し、尾根は何れも四五の小瘤起を有居候、殊に感嘆致候點は東面兩尾根の間に包まれたる自然の大公園に有之候、花崗岩の散在する間に雪水の潺々として環流するあり其清透、寒冽なる潤水のほとり高山植物の點綴するあり、日本アルプス中露泊地として、遊園地として蓋し白眉と可申候、自分は此山の西面より兩尾根の中央鞍部に上り直ちに殘雪に沿ふて險崖を降り中央部小瘤起の東南部にて夜營致候。

七月二十四日、夜半より頻りに雨降る、六時に至り止申候處天候次第に回復の模樣相見へ候に付兎に角出發と決し八時半天幕をたゝみ、二五一九米の隆起北面を搦んで黑部平に降申候、黑部平は是亦絶好の露營地に御座候、是より切明けを辿り蓮華岳に上り候頃天晴れ東南疾風烈しく進行多少困難を感申候、蓮華岳双六岳の頂上は何れも廣闊に有之其東面は殘雪殊に夥しく壯觀を呈し居候。上双六平より双六池への傾斜は、比較的急に有之殊に池に連

る殘雪面は四十度位の傾斜の樣見受けられ候。双六池より樅澤岳の尾根にかゝらず三四町双六谷に向ひ南下したる所より笠尾根に取付き申候處尾根迄はヤブ深く閉口致候。尾根には切明け有之候間左程通過困難の場所は無之候。疾風益々猛り夕刻には半暴風と相成天候刻々不安を加へ候に付急行して中の平岳（二五八八米突）に達し殘雪の西北部偃松中に天幕を張申候。夜もすがら强風の爲め天幕バタ〳〵と煽り遂に安眠すること不能午前四時頃起床致候。

七月二十五日。朝來雲霧漸く低く、笠ケ岳の頭上屢々ガスに蔽はれ候模樣に付大至急にて朝飯を認め六時出發、直に足場の惡き尾根降りとなる、拔戸岳（小笠）との鞍部にて蒲田谷と双六谷との通路と相成候所迄ひた下りに降申候、此所には双六側に白樺其他相當丈高き闊葉樹成育致居候、車ユリ、クロユリ、の多く且つ大なるは此尾根の特長とも可申乎、之より二三の隆起を越ゆれば稍々廣き緩斜面に出申候露營にも適當の地點に御座候尤も笠尾根一帶、七月中殘雪のある間は露營に適する場所到る處に有之候事は寧ろ小生の意外とせる所に御座候、拔戸岳は尾根より取付かず東面の崩れを上り中途にて右方の最も低き尾根に向ひ殘雪に沿ふて登るが捷徑に御座候蒲田谷に面し奇岩峭立致居候　頂上をよけ西面を尾根に出でず、搦み〳〵て二隆起を越え始めて尾根に出申候。大笠手に取るが如く近きながら動もすれば吹飛ばされんとする暴風に屈せず、喘ぎ〳〵て急行すれば大笠は既にガスに包まれ小雨さへ降り初めて煎餅的の岩石の累々たるを攀上り大笠の小隆起に達しそれより稍々平坦の所を南行し石壘を登れば遂に笠ケ岳の項上に御座候。時に午前十一時半項上は却て風勢强からず小雨の中に午餐を喫し正午退去南に尾根を降申候處項上直下に石に圍まれたる祠の安置せらるゝを發見致候、十分間も降候頃風力又々增大致し小雨は吹雪と相成申候、夏アルプス方面にて雪に出遭候は小生としては今回が始めてに御座候、五百米突も下り候時雨を脫し谷の形態を窺ひ得る程に晴申候、何樣笠ケ岳の南尾根は險惡に有之錫杖方面より蒲田谷に面する一帶は壯年の相を呈し殊に穴毛谷に向ひては尾根は凡てカベ又はタキを形成致居候。人夫も小生も笠に關する智識無之爲め遂に尾根を誤り約三百米突の懸崖を釣瓶下りに穴毛谷の大雪溪に降申候、途中ロープを使用せる所二ケ所有之、長次郎のベストを盡したるに因てのみ通過し得られたるを思はずんば非ず候、穴毛谷の大雪溪は去る六月中の大雨のため無數のクレバスを形成し到底雪上の徒步を不許もの有之、止むを得ず左岸をヘツリ項上より前後六時間の惡鬪後漸く蒲田川のドウに達し申候。蒲田溫泉場も山ぬけの爲め全滅致候　此日は一行の疲勞殊の外甚しく轉ぶが如く蒲田川原の露營天幕に横はり申候。

七月二十六日、雨。此日は中尾峠を越えて上高地泊の豫定なれば雨天なりとも出發の事に打合置候間前日の疲勞にも不拘人夫共は四時に起き大火を焚きて天幕を乾し七時半頃出立致候、六月の大雨には飛騨方面最も被害甚しき由にて槍ケ岳より發する蒲田の右俣はドウの所にて高さ約五間の押出しを作り宛然新堤防の現出を疑はする體に御座候。小林區署の木材搬出用「トロリー」も大部分林道と共に破壞せられ當分復舊六ケ敷見受けられ候。中尾の僻村を過ぎ山拔したる中尾谷を辿りつ、行けども〳〵蜿蜒として續

く山徑を雨滴を拂除け乍ら十一時といふに峠に着燒岳の噴烟は霧中に喫ぎ出す始末に御座候。峠より南十五町にして噴火口に達し可得候。信州側にも山ぬけしたる所有之多少迂廻して降申候、大正池、霞澤山、六百山など霧の間に隱見し得られ候、午後二時上高地清水屋に草鞋を解き一年振りにて懷しき浴槽の人と相成申候。溫泉にて田部、高田、小瀨の諸君と同宿致候。

翌二十七日。幸ひ快晴山下君は尙一日逗留のことゝ相成候に付小生獨り人夫を引連れ德本を越え島々に出申候、島々谷も相當被害を蒙り小林區署のトロ道數十ケ所も破壞致居目下修繕中に有之、歩きにくきこと申す迄も無之候。本年は上高地にも婦人客四五を數へ候こと注目すべき現象と存候。松本島々間の自動車は一人二圓十五錢馬車は一圓を徵收致居候。又松本驛にては信濃山岳會の肝入りにて日本アルプス案內なるパンフレットを登山客に配布致居候　同驛發七時十分飯田町驛行列車にて歸京致候。（大正九、八、一〇、鈴木益三）

△七月二十三日、針の木峠より佐良峠に出で、藥師岳に登り、最終に中房溫泉に出る豫定にて大町出發、大澤泊り。二十四日同所滯在（雨の爲）。二十五日針の木峠を踰えて平泊り。二十六日雨にて同所滯在。二十七日五色ケ原一泊。二十八日雨又滯在にて悲觀、午後雨を衝て立山溫泉に下る。豫定を溫泉より眞川を遡り、有峰より藥師入りと變更、溫泉にて眞川入りの人夫を覓めて得ず、復又旅程變更、劔岳の尾根縱走をなして三日市に出ることゝす。二十九日溫泉出發、室堂、雄山、大汝、別山を經て、別山泊。三十日鷲ケ御前を經て尾根傳ひに劔岳頂上着。午後十二時半劔澤に向つて下り小黑部泊り。三十一日小黑部谷を下り鐘釣泊、八月一日溫泉發三日市着午後三時半。（八月五日井花伊左衞門）

△拜呈。八月十七日午前七時辻本氏の驥尾に附して上野驛より鹽原に參り候。今年の元旦に雪に包まれたる鹽原を初めて見申し候が三伏の當地は又一種の異れる趣き之れ有り候。當夜は新湯に一泊し候。翌十八日午前四時三十分より高原山に向ひ候。鷄頂山、御嶽山及び釋迦ケ嶽に登り午後五時五分男鹿川畔の川治溫泉に着し候。十九日午前七時三十分川治發。鬼怒川の清流を下りて藤原より下野軌道にて今市に出でそれより日光に入り込み候。二十日女峯登山の豫定なりしも雨天のため中止して一日滯在仕り候。二十一日午前八時頃雨を衝て湯元に向ひ候戰場ケ原にては四圍の山腹を僅かに望みしのみにて甚だ物足りなき感致し候。午後七時三十分湯元板屋着。二十二日雨天のため白根登山を中止仕り午後の雨上りを金田峠に參り候。途中幽邃なる刈込湖を見申し候。二十三日午前六時三十分板屋を出發。金精峠より溫泉ケ岳に向はれし辻本氏と途中より分れて小生と友人小柳君及び案內人福田勝治との三名にて白根山に向ひ候。九時三十五分前白根の最高點に着し十時十八分奧白根に向ひ十一時三十五分頂上の三角點に着し候。此の頃より霧を生じて上州方面の眺望殆んど絕無には悲觀仕り候。待つこと三十分間餘にて西端の斷崖を僅かに眺め得候。十二時五十分奧白根を辭して前白根の西端高峰の約六七十米突下の邊を左にとりて尾根に出でそれより五色沼を距てゝ奧白根と相對峙する彌陀ケ岳（約二三八〇米突）に登り候（午後一時五十分着）。此の山は五萬分圖には山名記入之れ無く上州野州の國境に位し居り候、

野州方面は霧に包まれて何物をも見出すを得ず、たゞ上州方面には菅沼、燕巣山及び四郎嶽を最も手近に眺め申候。燧岳は頂上雲に隠れ又利根水源地方の諸山及び赤城等をも其の中腹のみは望み得候。温泉ケ岳は半ば雲に遮ぎられ居り候。二時二十分彌陀ケ岳を發して國境に沿ひて尾根を下り候。二、三年以前國境の標石を建てる際切り開きたる由なれども現今にては路らしきものを認めず、雜木林の中を通り拔けて湯元よりも見える笈吊岩上の金精山頂上へ三時三十八分に着し候。頂上の眺望は上州方面は森林に遮ぎられ僅かに野州の一部が展開するものゝ樣に候へども先刻來の霧のため展望は不成功に終り候、附近にはクマザヽの間に白山シャクナゲ、タカネザクラ、ダケカンバ、アキノキリンサウ、ゴゼンタチバナ、マイヅルサウ、イハカヾミ等繁茂致し居り候。

三時五十五分金精山の頂上發。金精峠に向ひ候、進むこと二十分間にして高さ二丈程の岩角に出で候。用意の細引によりて下り候。此處より下りは多少容易に成り五時五分金精峠に出で湯元へ六時十分に着し候（八月二十三日日光湯元溫泉板屋小林修明）

△八月廿一日以來北見國宗谷郡猿拂村猿滑の小字二股のエルモの繁みの中の山小屋に參つて居ります。最初は海岸からの蒼々たる針葉樹に可成な興味を持ちましたけれど最早今では平原と低丘の連續でしかも水の汚濁した單調な景觀にはあき〳〵して參りました。それでも南方にホロヌプリ一帶の古生層の蔭々たる一群が最高點八六〇米の高度で聳えて居るのはせめてもの慰藉ですそれと今一つは先日海岸の猿拂市街へ出てそこの大橋に富士見橋と記されてあつたのをたまらなく懐しく思つて通りすがりの人に其の由來を尋ねました處晴れた日北西遠く利尻山を望むからだと敎へられ其の日は曇り日で望むよすがはありませんでしたけれどもスッカリ氣に入つてしまつてそれからはその橋を幻に見て居ります此樣な小さなとを取り立てゝ云ふ樣な單調さに幾分の起伏を與へたのは八月廿九日から九月十一日に亘る稚内方面への往復旅行でした。オコツクの海岸に沿つた道は遠く雲烟の間に樺太の西ノトロ岬を望みつゝ高原狀な段丘上を通じて居ります。概して虐げられた針葉樹の散生した廣々した草原で（勿論明治四十四年の尻臼市街をも包んだ大野火以來森林の破壞された處ですが）六、七月の候ならば寒地性の色樣々な草花に眼覺むる許りの美觀を呈することでせうが今はエゾリンダウ、ゴマナ、ハンゴンサウ、カラフトブシ等の秋草がさびしくチラホラする許りでしたしかし細かに群落を漁りますとオホバコの樣な下らない雜草の間にガンコウラン、ゴゼンタチバナ、コケモヽ、ツマトリサウ、ハクサンチドリ等を見出すことが出來て海波を聞き乍らも二千米の山上を行く樣に氣分はハシャギ切つて旅を續けましたそれもしかし宗谷岬の突端を迂廻してからは波打際の歩き難い砂原で天氣さへよければ北方の專制主たる利尻を眞正面に見る筈なのがそれも見えず可成ガッカリ致しました宗谷半島には一寸眼を引く二個の小丘があります一は字時前（トキマイ）にあるモイマ山で他は字尻臼の背後宗谷岬に近く位置するモイマ山で前者は一〇〇餘米の針葉樹林に被はれた小丘で後者は鐘形の木立の無い孤峯です猶今一座稚内灣に注ぐマシポポイ川の原野字增幌（マシポロ）の奥にモイマ山がありまして三個殆んど等邊三角形の角點に位置して居ります。モイマは夷

語の平原の島と云ふ意で實際いづれも可成際立つて人目を引く山です。私は九月七日增幌のモイマに登りました其日增幌原野の七線の澤の山小屋を立つてイチャンナイ澤を上ること約一里半直ちにモイマ山の側面を二間に餘る根曲り竹の間の刈り分けを登つて正午山上に立ちました奇狀をなしたナヽカマド、エゾノダケカンバ等が疎立して來たと思ふ內笹が低くなつてすぐ頂上でしたそこには道廳の二等三角點があつて南東側は一面のハイマツですこの山の高度は二五〇餘米に過ぎないのですがすでに斯樣な高山型の植物景觀を持つて居りますそして宗谷半島の殆んど最高點である丈に三六〇度の展望は實に壯快でしたその內でも右に禮文島を從へた利尻山の拔群な秀容は忘れ難い印象でした。事は前後しますが九月三日稚內半島の最高點の無名峰にも登りました海拔二一一米に過ぎませんが興味な山頂には陸地測量部の一等三角點が立つて樹木は伐採したナヽカマドを見たのみで只一面丈低い草原でチシマセンブリの可憐な紫花が眼立つて美しいものでしたそして可成な時間をコケモヽの果實を摘むことに費やしました。そこから利尻山は暗藍の海上に何等の遮ぎるものもなく聳立つて山頂の幾多のオベリスク狀の岩峰は見るからに恐怖を伴ふものでした。稚內方面の旅行からこの山小屋に歸つて最早三週日になりました秋はあはたゞしくよせて來て朝な朝なの霜は厚く楢も日增にさびれて獨り針葉樹林のみが黑ずんで參りました。山の方々で每日熊に出會はした話で持切りです熊も冬眠の準備に忙しく食物を漁つて居るのでせう。最早直ぐ雪が參りませうしかし私共は美しい紅葉に送られて二三日內にこゝを引上げることになつて居ります。

（大正九年十月二日北見宗谷猿滑の山小屋にて竹內亮）

△去る七月（大正九年）十七日夜友人と二人にて東京を出發し會津口より飯豐山に登り米澤口に下山致し候。山中每日快晴にて眺望絕佳、頂上の無人の小屋に二泊し問題の大日岳にも往復致し候ひしが途中は兼て噂に聞きしが如き偃松の恐ろしき藪等は無之至極容易に徇座候。兎に角飯豐連山は雪の豐富なるとエーデルワイズ其他の高山植物の美しきことゝは全く豫想以上にて誠に感じのよき山と存じ候。唯小生等の登山後間もなくして登山者遭難の慘事ありし由新聞にて知り哀悼の念を禁じ難く候。猶飯豐登山後は日光より會津駒尾瀨沼燧岳のあたりを呑氣に步き廻り候。（大鳥永明）

△執拗なる雨に惱され乍らトラピスト、大沼、駒ケ岳、札幌を經て阿寒へ參り候處無類の美晴となり雌阿寒岳へ登り大に滿足して北見へ下り申候。室蘭を經て洞爺へ參る途中支笏湖をもと思ひしも王子製紙會社專用線に便乘を許さゞりし爲割愛して洞爺へ參り二泊の後只今狩太へ着仕候。蝦夷富士は割愛するに決し南下致すべゝ候。阿寒湖の外は全部落第點の風物ばかりに候。（大正九年九月後志狩太にて藤島敏男）

△先月末日東京出發仙臺に二泊の後花卷より岩手輕鐵にて仙人峠に至りそれより仙人峠又土倉峠を經て氣仙郡の檜山に至り泊。八月五日檜山を出て南部北上山脈中の名山五葉山（一三四〇米餘）に登山、山頂には偃松あり可なり感じよかりしも颱風の餘波を受けて山は曇り冷雨を浴びつゝ藪の中を大松に下り釜石鑛山鐵道にて釜石に辿りつきたるは可成慘憺たるもの有之、次の日シケなりしも宮古まで太平洋を渡り多少陸中の海岸の檬子分りたるやう覺え

候宮古に二泊し九日盛岡街道を傳ひ閉伊河畔九里奥なる川井に宿り次の日三里歩きて小國村江繋に泊る此兩日盛に降られ又一日滯在して水の減ずるを待ち十二日藥師川を遡りて早地峰登山當地に下り候。(大正九年八月十二日岩手縣下閉伊郡門馬にて沼井鐵太郎)

△早池峰より盛岡に向ひそれより四日目に岩手登山往路は網張溫泉より歸路は雫石路を。九合目の室は富士なんぞよりずつと感じよく候ひき眺望殆ど無之。次に仙岩峠を踰え國見溫泉に一泊板の間にねて苦しみ翌朝又一丈五尺もある篠をかき分けて駒ケ岳に登り春山の湖心亭に下り着き候。駒の横岳にて殘雪の鳥海山を望み候國境山脈はいづれに於ても見る能はず甚だ殘念に候ひき。(八月二十日田澤湖畔春山にて沼井鐵太郎)

△田澤湖より秋田へ出づる迄が本年夏季旅行の目的多き中にも小生に取りて(山岳趣味の上より)最も重要なるものに候ひし處本年は兎角天候に祟られ就中玉川溪谷より八幡平以南國境連山の登攀は終に夢のみとなり殘念に存候。今日迄其後大略次の如き行程に御座候。

二十一日春山より正神峠鳩峰神社を經て玉川に到り泊、二十二日玉川上流大深澤、湯田又川落合の又口小屋に至り泊、廿三廿四の兩日天候不良の爲此方面より八幡平の登山を中止し廿四日午後より木道を傳ひて鹿島郡熊澤フケ湯溫泉に到り泊、廿五日午後より切明け(國境に非ず)を傳ひ八幡平に登り長沼に至りて引返し廿六日午前フケ湯の谷地の上なる長沼見物午後より後生掛、大沼、又一硫黄鑛山、燒山を經て鹿湯溫泉に泊、廿七日ブナ森を越え阿仁銀山の奥なる比立内に泊、廿八日天候怪しき爲森吉山を放棄し、カラミ内澤國有林に入り三内川に越えんとせしに近來此峠通行者なき爲山頂上下の二三里の間は全く道の跡絶え、爲に一方ならぬ難儀に遭遇し野營一夜の後廿九日當村に辿りつき候。明後日頃太平山に登り秋田に出づ可く東北地方の不便にして同時に宿屋の廉なるには豫想以上に驚き入り候。(八月廿九日秋田縣河邊郡岩見三内村にて沼井鐵太郎)

△太平山登山。有名なる不歸澤には「この澤を下りると死にます」といふ珍なる注意書きあり一見する所カゴタキ澤は中々惡場なるらしく候小生祖父曾て其谷に冒險を企て九死に一生を得たる事有之近年も死者少なからざる由に候。二三日の後男鹿に參り本山に登りて本年の夏旅を終る豫定に有之候。(九月一日秋田市にて沼井鐵太郎)

△拜啓去る十月の初めトマコマイを經てシコッ湖畔に遊び申し候處右にエエニハ左にフウプシ、タロマイの勇姿嚴として聳ゆるを見て大に登山氣分を唆られ候折柄湖畔住民の言によれば山頂よりニシタップ停車場に下れば最も捷徑にして僅に二時間にして足るといふに勢を得歸途を此の途にとることに決し候。出發の朝は早發と頼み置きたるも意外に手間どりて八時をすぎてより小舟を艤し南にモラップに向ひ候舟子は一ケ月前とかに東京より來れる者にて地理に通ぜざる爲め上陸地點の見當つかず其爲め通常登路に當てらるゝ空溪よりも遙に東によりたる空溪を攀づることゝなり此〻を出發したるは九時に候ウダイカンバ、エゾマツ、ナヽカマド等の美しき深林に蔽はれたる浮石の礫野を貫ける此の空溪は上流に近づくに從ひて著しく狹まりて時には其幅一間に滿たざるに

似ず兩岸數間の高さに聳ゆる箇所も有之加之岸上に生ずる闊葉樹は其葉紅に黄に色づきて詩趣を添へ候空溪盡きなんとするや浮石の平地と化し草木は依然密生して一時方向を定め難き懼之有りしも間もなくタロマイ外輪山の峯頭高く前面に屹立するを認め安堵して少憩しやがてイタドリの繁茂せる間をわけ登れば一望廣闊なる高山植物帶となり（約五六〇米）前面には外輪山の最高點（一〇二四米）峙ち右にはフープシヌプリ（一一二三米）の側面を仰ぎ足下にはコケモヽ、ガンカウラン、シラタマノキ、タルマイサウ、イタドリ等の浮石の燒野を飾れる天上の美觀を擅にすることを得候時に十一時。西南の微風は中央火口丘よりの噴烟を外輪山最高點の方向に吹靡かせる爲め此の方面よりの登攀不可能なりしと一にはフープシヌプリの英姿に引かれたるとによりて斜右にタロマイ、フープシ間の一鞍部を目標として登り候處劇しく水蝕されたる外輪壁を横斷するの困難に避易して直にタロマイに登攀するに決し急傾斜の外輪壁より浮石の轉落するに膽を冷し乍ら辛くも壁上に這ひ上りたるは十二時頃に候。山頂は熔岩と浮石との荒原にて其略中央に先年噴出したる熔岩の大塊屹立し其上部及側面の一部よりは噴烟致し居り壯觀に候それと舊噴火口よりの噴烟とは多少の盛衰は之有候へ共常に噴出致し居りて晴天の日には遠く石狩平野よりも望見致すことを得るものに候。外輪山上の荒原を横斷しシシャモナイ澤上流に面する一地點に陣取りてシコツ湖の西端を距てゝ遠くマクカリヌプリ、シリベツ岳等を望み乍ら行厨を開き休憩半時許りして午後一時此處を出發し中央火口丘の南面に廻りて外輪壁上の高所に上り此處より下山路を物色したれど生憎最初登山を豫期せざりしの故にシラオイ圖幅を携へざりし爲め降路明かならず終に意を決して午後一時半とある山脊を南に下りたるに幸にして人跡を認めたればこれを辿り繁茂せるイソツツジを踏み越えて終にオポップ川上流の空溪に入り斷續せる人跡を傳ひ時に懸崖に路絶ゆるに會ひて林中を迂廻し時に雪の如きハナゴケの群落金色に染めたるシラカンバの黄葉を賞し時にヤマブダウの酸味に乾ける咽を潤し乍らコイボタウシュオポップを下り候に豫定の二時間は愚か三時間を經過するも中々ニシタップに近づかず秋の日は容捨なく落ちんとするに氣はいらだち空腹は迫るも間近に人家も見えざれば思切て空溪を離れ林中に廢道を辿り終に丈なす雑草の繁茂する原野に出で急坂を降りてシンノシキコスオポップに出で其流れを徒渉してニシタップ停車場を距る里許の高木牧場事務所に著きたるは五時十五分過にて山頂より約四時間を要し候は生路とは言へあまりに時を費し候樣思はれ候牧場事務所に休憩すると半時生卵やら辨當の殘部やらに力をつけ五時四十五分此處を發し夜路をニシタップに向ひ樽前神社の前を通りて停車場に著きたるは六時四十分にて終列車にてトマコマイに歸著致し候。（武田久吉）

△夜行にて出懸け夜行にて歸る積にて御坂山脈（?）中の釋迦岳より更に黑岳の連脈を再び探らんと欲し去二日新宿を出發致候。三日早朝石和驛に下車して鎌倉街道を進む英村を過ぐる頃より東天紅を帶び西方に東駒鳳凰白峰三山鹿見惡澤等の姿を明に望む。金川原の手前眺望最も勝れたり前記の諸岳奥秩父の高嶺御坂山脈の釋迦岳節刀岳等を見る一々述べ難し之より道は桑畑の間に入りて

視界狹ければ頓に急ぎ午前六時五十分上黑駒着、朝食を喫しつゝ神座山（シンヂサン）の樣子を聞けば大戰以來盛に伐採しつゝあるものゝ如く聊か悲觀の體なりしも免に角午前七時十分發足す、神座山入口一の鳥居にて鄕社檜峰（ヒミネ）神社道三十六町とあり數町上迄は馬車を通ずる大道、それより木馬道と大體に於て一致す　行々釋迦ヶ岳を仰ぐに其形黑岳連脈より望むの急峻なるに反し先づ平凡と稱す可きも右肩は頗る急にして恰も今夏盛岡に於て見たる南昌山に彷彿たり沿道の山林殊に檜は可成倒されたるが尙赤松を交ふる闊葉樹林殘れりネンブツ、ダイドウ、シンブツ（シンボチの誤か）などいふ所あり黑駒川中最大の支流ヒナタオホヂ澤合流點を過ぎて山腹にかゝる所に古き二の鳥居あり碧雲峒の三字を揭ぐ途中休憩少なからざりし爲午前八時四十五分に至つて漸く檜峰神社に到着、鄕社ながら本殿拜殿の別あり末社も四つ程ありて拜殿の欄間には浮彫等あり周圍は森々たる杉檜の大樹に限られ社前には潺湲たる小溪走り幽邃の趣容易に得難き地なるに躋路多くは昔ながらの姿なきは惜しむべし。傍に社務所ありたれば何か面白き話聞かんものをと案内を乞ふに猫一匹居らぬに落膽し二三町戻りて二萬分一御坂峠圖幅に表はされたる小徑を辿らんとす（因云、檜峰神社大祭は新曆四月八日及九月二十五日なる由）。總じて伐木人夫多く入れる山は木馬道サデ等四方に通じてうるさく且迷ひ易き處此も其例に洩れず但し地形圖をよく按ずれば誤る事先づ無しと思候兎に角其小徑を辿ればシンボチ澤（新發地澤か）に入り釋迦岳に登り得る事疑ひなければ數町登るに伐採の假小屋二三あり其附近ヒカゲシンボチ澤に居合せたる村民より種々の話を聞き思はずも時を費し再び出發したるは午前九時四十分にて候ひき。シンボチ澤に移りて小屋の傍より微かに通じたる小徑を上るに倒木に惱まさるゝ事少からず路の跡も消え勝ちなるが思つたよりは容易に捗りて尾根に近き頃澤より左（東）の山腹を登り午前十時四十分岳の肩にして一五二一米峰との鞍部上に出づ。この間千四百米の地點に一憩し檜峰神社の北東なる一四一五米峯の左方に甲斐駒ヶ岳山脈黑駒川の谷を通じて奥秩父の一角を望めり。本尾根の上は矮林繁茂したれど所々に岩塊（花崗岩？）あり之に立てば甲府盆地を圍繞する大山岳を始近く黑岳連脈中の十二ヶ岳、節刀ヶ岳、ミカジリ（一六六五米）等を望み脚下には芦川の谷水聲高く響く直上に仰ぐ釋迦ヶ岳は岩骨露はに峻嶮を極め就中屏風岩の絕壁は是非共一見の價値あり總じて尾根には松、檜、榉等蟠屈し、破岩の間にはマツムシサウ、アキノキリンサウ、コハマギクに似たる白花の草本其他アザミやヒゴタイの類咲きて美し。十分の休憩後頂上指して登るに切開は判然たるも所々に岩壁あり幸ひに岩堅く稜角銳ければ難なく登攀なし得べし斯くて頂上に達したるは午前十一時十五分頃にて候ひき。思ふに釋迦ヶ岳は東京より比較的短時間の內に取付くを得る山としては標高によつて想像する以上に良き山也といふべく殊に峨々として山骨露るゝ奇景は近頃此種山岳趣味黨の散策地として好適なるべし頂上は檜、檜、白八汐（？）等茂れるも幸ひにして岩石の立つあり御坂山脈の主部は元より富士の大室山も望み得南アルプス、秩父の連山は當然視界に入る筈なれど、生憎臺りて僅かに駒の附近を望み得たるのみ。山頂にはお釋迦樣と俗稱する二體の石佛あり共に高一尺二三寸にして一は起立し他は座せる

が後者の首を紛失したるは情けなし。黑駒方面より又稀には郡内の者も登る事ありと見え村人の姓名其處此處に見ゆ尤も本岳の昔の登山道は不明にして黑駒よりは余の上れるシンボチ澤及ヒカゲオホヂ澤よりも登り得るものゝ如く山頂より北西に派出する尾根及東方の鞍部に細徑來り合せるを前後して目擊せり。斯の如く千六百米程度の山岳としては痛快なる山なれども山頂に至りてもなほ近く丁々と伐木の音聞ゆるは時節柄詮なき次第也。黑岳連脈の山肌のうす赤く色付けるを見つつランチを取り、午後零時十分出發黑岳迄縱走の目的を以て山頂を東に下る。十分にして鞍部に着、この下り口も岩多く崩れたる處もあり鞍部には二人の代採人夫刈乾せる茅を束ねつゝあり五分の後又東方に向ひ一峰を越ゆ背後釋迦ケ岳は嶄然として頭角を露はす午後零時四十分又々一小鞍部に着、黑岳及十二ケ岳の有明山式山容を望む此處より芦川谷に下り得べく思はるゝがすべて芦川谷よりは孰れの澤筋を選ぶも釋迦ケ岳連脈の尾根に取り付くを得可きことは後に認めたる所にして殊に登山道としてはシンボチ澤の乘越に出づるものある由を上芦川村にて耳にせる程也。之より又五分程にして一五六二米の三角點ある峰に至る項上は相當に廣く黑岳三峰山、ミツケ、ミカジリ、十二ケ岳、節刀岳、鬼ケ岳等見ゆるも北側は木立にて景なし釋迦ケ岳は恰も甲斐駒の規模小なる山の如く見ゆ。之を通過し次の小峰に到る間小鞍部より北にキレトの前身とも見る可き急なる崩れ溝落つるに遭遇す。同五十五分愚の字ある標石を過ぎ両側のカヤトより六尺餘の檜林に入る。此迄の所は釋迦ケ岳の領分らしく山頂山腹各所に露岩ありヤブもヤブといへぬ程開けたるが之より黑岳下に至る間は悉く檜の林なり尤も下草は頗る貧弱にして例の笹を見ざるは縱走上便利此上なし午後一時十五分鞍部に着、又上り同三十分一五〇四米峰の東側に休憩、黑岳を見るに村界より西方の澤筋一圓に側尾根迄かけて伐採し盡され赤裸の姿は黑岳の名を辱しむる程悲慘の極なり。上芦川にて聞けば此は大正七年より同村拂下げを許されて仕事せるものなりといへど斯く程度を越えたる伐採振りには一昨年大井川谷の仁田河内に失望したるより更に甚しきものあり之が爲此方面よりの登山容易なるを知り乍ら終に黑岳を放棄して芦川谷を下る事に決し一小峰を越え少しく上りて出會へる道を南東に取る此路は五萬及二萬の圖にも表はされたるものにして黑駒村民は上芦川より金川谷の新田（シンデン）に越ゆるものといへるが鞍郡より更に高く黑岳に向ひて上れるは怪しむべし。或は元、乘越同樣の峠なりしもの近年伐採の爲峯通りの道の方明かとなりしものならんか。道に出でたるは午後一時五十五分、附近に炭燒の跡二三箇所あり、次第に下り行くに黑岳、節刀ヶ岳には雲かゝり來る、二時二十分の頃道傍開けて高原樣となる、此を稍少しく下る所に始めて澤の水聲を聞く。地圖に芦川水源とあるは其意義甚だ不徹底にして、實際其より半里も上より盛に水音を聞く。芦川谷は釋迦ケ岳連脈と黑岳連脈との間にありて、幅廣き形をなし十二ケ岳北方の大淵谷と共に珍らしき型なりと思ふ。途、匂高きボケの實など採集しつゝゆつくりせる爲午後三時に至つて漸く釋迦ケ岳麓に來り、屏風岩を仰ぐ、然し乍ら其偉容は終に黑岳連脈上より望むの快なるに如かず。同三十五分用水の傍に出で一休、中食、四時五分過出發、同四十分鳥坂（トッサカ）峠に入り、二十分に

して頂上着、之より甲府迄歩き、午後十一時四十分發の上りにて歸京。芦川村にては色々村人より話聞きたるも、更に調査の必要あり、いづれ又近き將來に十二ヶ岳連峯をも探りて快報仕るべく候、（大正九年十月四日、歸宅の夜、沼井鐵太郎）

△溪流と紅葉の美を想ひ奥秩父へ參り候、初日は甲府より御嶽、黑平を經て御室泊。猫坂より仰げる金峯、奥千丈の立派なるには驚き申候、二日目は金峯に登り奥千丈國師岳へ縱走し梓山に下り候、霧にて大した眺望は無之候ひしも奥千丈附近より木賊甲武信三寶の三山を望み得、又國師の下りより小倉山の姿を望み申候、國師岳の梓山側は昨夏參りし時より更に大規模に伐材を始め惜しきものに候、第三日は戰場ヶ原に白樺落葉松の黄葉を賞し、十文字峠に登り、國境の切明を傳つて三寶山へ縱走、甲武信の小舍に泊る豫定なりしも日暮れ小舍判明せず已むを得ず森林中に一夜を焚明し申候、四日目は霧小便を冒して甲武信登山眺望を得られざるに失望し匆々に頂上を辭して眞ノ澤の林道を栃本へ下り申候。一昨年あたりは棧道が腐蝕し危險なりし由に候も最近修繕せし樣子にて至極呑氣に歩き申候、信州側にては既に盛りを過ぎたるかと思はれし紅葉も武州側は少々早き程に候ひき、五日目は雁坂峠の舊道を登り、峠の上にて、西は國師奥千丈方面、東は唐松尾、大洞方面の展望を得、甲州に下り鹽山午前零時半の汽車にて歸京致候、天候不良の爲め遠望を得られざりしは遺憾に候も秋の山の氣分を心ゆく迄味ひ得たるを喜び居候、各方面の伐材は豫想以上に甚しく大いに憤慨致候。（大正九年十月二十日藤島敏男）

△謹啓、十五年二號拜受、我々低山探勝者に取り、又木君の三ツ峠記行、武田博士の丹澤山塊に關する資料等誠に直接有效なるもの尠からず候。さて木暮先生の一夜立通された頃、私共は玄倉の谿谷と丹澤の筵を慕ひ、卅一日の朝松田に下りて彌勒寺に參り、寄澤を溯り、鍋割山（△一二七三、三）とアメ山（△一一六七、七）の最低處に出で申分なき紅葉を嘆へつゝ、諸士平に着、四時半にて直ちに事務所にて一泊を懇願致したるも、主の居らざる故にて拒絶、止むなく一行は山小屋に分宿致し久方ぶりにて山の夜を味ひ申候。翌日は七時に湧津澤を越し、熊木箒杉雨澤迄の紅葉と水の色に驚嘆しつゝ合流點に參れば、家のみありて人は皆諸士平に參り居り此處より右の箒杉澤を溯りて、塔ノ岳迄は僅か乍らも木軌道ありて昔偲ばれ、カネ澤を左に瞰下しつ尾根を上り申候、此あたりの秋の趣き除程深く不動の清水を經て孫佛樣にお目にかかりて塔ノ岳の△に着きしは、九時三十分、丹澤にて一等△探索したるも終に再び發見せず。不動の峯の茅戸にて午食、此處にて案内後藤市五郎をかへす。毘盧ヶ岳の藥師樣に無事を祈りたる時は已に微雨、原小屋澤あたりにては大群も雲に包まれ愈々濡れ初め候。ヒメツギの原にて休憩して眺矚の希望もダメになり二時半、例の八丁坂を經て燒山の道は略駈足、燒山祠に御意を得て忽ち逆落し的の路を長野に向ひ、四時半着、興瀨八時六分發の終列車に間に合ふべく、出發、雨に惱されつゝ辛くも間に合ひ歸京、現在の丹澤報告終り。（大正九年十一月廿日松井幹雄）

會報

○第十一回小集會記事

大正九年十一月十四日、麹町區紀尾井町皆香園にて午後一時より開催、司會者梅澤幹事の例言ありて直に講演に移る。

第一席　大平洋より日本海迄　沼井鐵太郎君

同氏が、大正九年の夏期三十日に亘りて東北の山河を探究せられたる折の報告にして、岩手山、早池峰、田澤湖等の吾人に耳なれし所は勿論、地圖さへも示さゞる、事實上の名山の多くを紹介されたるは、甚耳新らしきを覺えしめたり、殊に一歩一歩各方面より八幡平に近附きて、遂に其頂を究ひる邊、百折決して屈せざる、君の意氣を充分に表はしたる、內容の豐富なる講演なりき。

斯くて茶菓を供して小憩の後、再講演に移り

第二席　市野瀨を中心として　梅澤　親光君

同氏が、大正九年夏期、登山の企ての根據地として、同地に滯在し霽を待つ間に、其附近を散歩したる、數日間の見聞談にして、熊の話、岩魚の話、虹の話、徒涉の話等斷片的のものを集めて、一場の話をまとめ、最後に戸倉山（伊那富士）登山談を試みて、同山が白峰赤石山脈の展望台として、第一流のものなるべき事を斷ぜられたり。

これにて豫定の講演は了りしも、更に

第三席　飛信山脈の一展望台　本暮理太郎君

同氏が最近に、旅行を試みられたる、和田峠連脈の、美ヶ原が、飛信山脈の展望台として甚佳良なるのみならず、木曾山脈、及白峰赤石山脈に對しても、充分に良好なる展望臺と云ふべき地點なる事を紹介されたり。

斯くて雜談に時を移し、大なる興味の內に、午後六時全く散會したり。

當日出席會員は神谷恭、古川雄郎、松井幹雄、村越匡次、堀龜雄、冠松次郎、伊藤新三、高橋鎰三郎、川口敏郎、高田達也、小瀨孫作、寶閣信孝、岡田美津男、横山光太郎、別宮貞俊、松本善二、

宮本璋、井染道夫、宮川久雄、久野政雄、伊藤朝太郎、黑田孝雄、茨木猪之吉、鈴木益三、沼井鐵太郎、木暮理太郎、梅澤親光の諸氏にして、他に會員外の出席者四名なりき。

○第十二回小集會記事

大正十年二月六日麴町區紀尾井町清水谷皆香園に於て武田幹事司會者として午後一時半より開催、左の講演ありたり。

一、溫泉岳より鬼怒沼に至る話　木暮理太郎氏

大正九年十月十一日同氏が會員松本氏と日光湯元を出發して溫泉岳に登り、夫より上野州國境の山脈を傳ひ、湯澤山（假稱、根名草山南方の峰）燕巢山を經て鬼怒沼に至り、日光澤に下り鬼怒川に沿ふて川俣溫泉に出でられたる旅行談にして、此區域に於ける山脈のかなり藪の深きこと、當時の紅黃葉の美觀なりしこと、澤は孰れも上流に瀑布多きこと等に就て、見聞する所を述べられたり。

二、大菩薩山脈　武田久吉氏

先づ大菩薩山脈の主脈より說き起して、北は丹波川南岸の鷄冠山より南は笹子峠附近に至るものとし、此連嶺を大菩薩山脈と稱するは、最高點大菩薩岳あるが爲にあらずして、反て其名は大菩薩峠より導かれたるものなるを明かにし、峠の名の起源に就て述ぶる所あり、夫より連脈の各峰の稱呼及大體の地形を論じ、地圖に表はされたる誤謬を訂正し、足らざるを補ひ、更に支脈の重要なるもの二三に就て說明する所ありたり。何さま同地方を縱橫に跋涉されたる氏のことゝて、其所說は聽講者を益すること多大なりき。

當日の來會者は松本善二、別宮貞俊、濱名增雄、辻本滿丸、沼井鐵太郎、橫山光太郎、松井幹雄、黑田孝雄、高畑良材、高田達也、高橋鐐三郎、神谷恭、飯塚篤之助、伊藤新三、鈴木益三、鳥山悌成、村越匡次、今村已之助、又木周夫、藤島敏男、森喬、近藤茂吉、六鵜保、武田久吉、田部重治、高頭仁兵衞、木暮理太郎の二十七氏にして、會員外來會者九名也。

尙ほ次面は臨時小集會とし、高野幹事司會者として左の諸氏の講演ある可し。

一、時日　四月十七日(第三日曜日)午後一時半
一、場所　麹町區紀尾井町清水谷皆香園
一、講演者　別所梅之助氏、高野應藏氏
演題は未定なり、尚ほ武田久吉氏も三峠山に就て講演せらるゝ筈なりしも、同氏の都合に依りて、次回まで延期の止むなきに至れり。

○會務報告

大正九年十一月十四日午前十時より、麹町區紀尾井町清水谷皆香園に於て幹事會を開き左記の件につき協議す。

一、大會に關する件
一、會費未納者處分の件
一、雜誌發行期日に關する件
一、入會申込者詮衡
右詮衡の結果左記の二氏入會を許可せられたり。
三木與三郎、松澤幸二郎
《出席幹事—木暮、高野、梅澤、高頭(委任)》

大正十年二月六日午前十時右同所に幹事會を開き左記の件に就き協議す。
一、臨時小集會開催の件
一、第十四回大會に關する件
一、本會基本金に關する件
一、會費未納者處分の件
一、入會申込者詮衡
右終つて下記六名入會を許可さる。下村忠兵衛、篠山進、野村愈夫、石川孟範、H.L. Mullins. 寺師喜之助。
《出席幹事—木暮、田部、高頭、武田、高野(委任)》

○新入會員

一

次　　次

以上

○交換及寄贈圖書

ツーリスト　第八年第六號、第九年第一號
歴史地理　第卅六卷第四、五、六號、第卅七卷第一、二號
地質學雜誌　第三百二十四、五、六、七、八號
地學雜誌　第三百八十二、三、四、五、六號
帝國圖書館大正八年度年報摘要
アルカウ趣味　第七年第十號、第八年第一、二、三號
地質調査所報告　第七十九號
（大正八年度事業報告）
日本婦人アルカウ趣味　第二十六、七號
史蹟名勝天然紀念物　第四卷、第一號、第二號
（歐文圖書は英文附錄に掲載せり）

○本會規則拔萃（大正九年九月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアルベシ
第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ一切ノ會務ヲ處理セシム
第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
第十條　本會會員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ幹事會ノ決議ニヨリテ推薦セラルルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名、年齢及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）
第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ直ニ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マルベシ
第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ毎年二月末日迄ニ納付ス可キモノトス、三月一日以後ノ納付者ハ特別取扱手數料トシテ金五拾錢ヲ附加シテ拂込マル可ク、尚ホ三月末日迄ニ納付セザル者ハ之ヲ除名ス可シ（以下略）

現任幹事（七名）

木暮理太郎　中村清太郎　高野鷹藏　高頭仁兵衛
武田久吉　田部重治　梅澤親光

評議員（十四名）

城數馬（在朝鮮）　小島久太（在桑港）　近藤茂吉
三枝守博　辻本滿丸　辻村伊助　山川默

及ビ現任幹事七名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと

一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと

一、、。「」（）等は各一字劃宛とし行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所

尚編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり（スケッチは複製の際誤記脱漏等の憂あるを以て豫め本誌面に適當せる大さに調製あらんことを望む）

第十四回大會豫告

時日　來る五月一日（第一日曜日）午前十時展覽會開場

會場　東京市京橋區西紺屋町十九番地東京地學協會（市内電車數寄屋橋停留場下車）

講演　午後五時半開始

一、利根川水源地の旅（幻燈）

幹事　木暮理太郎氏

他は未定なるも、決定の上は市内近郊及横濱在住の會員に限り改めて通知す可く、尚ほ前記以外の會員にして通知を欲せらるゝ向は、其旨豫め事務所宛申出られたし。

入場は會員たると否とを問はざれども相當服裝の上成べく名刺の御用意を希望す。小兒の入場は謝絶することある可し。

會場には上草履の備あれども靴又は草履を御便利とす。陳列品は特種の物品又は題目に限らざるを以て、廣く山岳に關する圖書、地圖、繪畫、器具、標本等、何品に係らず出品あらんことを希望す。出品物は當日會場に御持參下さるか、又は豫め事務所迄現品御屆置下さらば幸甚。

大正十年四月十三日印刷
大正十年四月十六日發行

【定價金壹圓貳拾錢】

著作權所有

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京市麴町區富士見町四丁目六番地　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the current number of the Sangaku are :—

to Darjiling and Sandukphu, from Calcutta From	by Mr. K. Ishizaki.
Mt. Suzuya, Sakhalin, in winter,	by Mr. K. Mushika.
Ascent of Mt. Merbabu, Java,	by Mr. M. Takeda.
A supplementary note on Hinadzuru-tôge,	by Dr. H. Takeda.
Recent conditions of Mt. Taromae and Lake Shikotsu,	by Mr. K. Takenouchi
Forest, Ski, and Climbing in winter,	by Mr. I. Kanō.
An Ascent of Tsurugidake by a Lady,	by Mr. H. Takenouchi.

THE PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing Page

(237) A frozen stream near Tongle. Photo. by Mr. K. Ishizaki.

(245) Twigs and branches covered with icicle in the neighbour hood of Sandukph. Photo. by Mr. K. Ishizaki.

(253) Upper—The principal peak of Mt. Suzuya.
Lower—Mt. Susuya viewed from the northern foot.
Both by Mr. K. Mushika.

(309) Upper right-Harinokidake and Subaridake seen from the lap of Rengedake.
Upper left—Snow-filled gulley of the Chôjirôdani.
Lower right—Near the summit of Tsurugidake.
Lower left—The chief peak of Tateyama, Bessan, and Tsurugidake from Harinokidake.
All by Mr. H. Takenouchi.

ANNUAL MEETING FOR 1921.

The 14th Annual Meeting of our Club will be held at the Geological Society's Hall, 19, Nishikonyachô Kyôbashi-ku, on Sunday, May 1st. The Exhibition Room will be open at 10 A. M., and lectures will commence at 5, 30 P. M.

All Members are invited to attend the Meeting, and they are entitled to bring their friends. Any exhibit concerning mountains, such as maps, photographs, pictures, books, scientific specimens instruments, utensils and implements used for climbing trips, etc. will be welcomed.

The following publications have been presented to the Club Library :—

"Bell Goat"—Inaka, Vol. XIII (Kobe, 1920).	By H. E. Daunt, Esq.
Separatabdruck aus dem Jahrbuch des Schweizer Alpenclub, 54. Jahrg.	By Dr. Dübi.
Sunday Times, No. 1818 (Sydney, 1920)	By Samuel Turner, Esq.

THE ELEVENTH ORDINARY MEETING.

The eleventh Ordinary Meeting was held at the Kaikôen. Kioichô, Kôjimachi-ku, on November 14th, 1920, presided by Prof, Umesawa. The following lectures were given :—

From the Pacific to the Sea of Japan ....Mr. T. Numai.
What observed around Ichinose, Shinshû ...Prof. C. Umesawa.
On a fine spot commanding the Hida-Shinshû Ranges .....Mr. R. Kogure.

Twenty-seven members and four guests were present.

NHE TWELFTH ORDINARY MEETING.

The twelfth Ordinary Meeting was held at the Kaikôen, Kiochiô, Kôjimachi-ku, on February 6th, 1921, presided by Dr. Takeda. The following lectures were given :—

From Yuzen ga Take, Nikkô to Kinunuma..Mr. R. Kogure.
The Daibosatsu Range .....Dr. H. Takeda.

members and guests were present.

NEW MEMBERS.

759 Henry F. Montagnier,
Chalet Beau Reveil,
Champéry, Valais, Switzerland.

767 H. L. Mullins,
Chartered Bank,
67, Kyômachi, Kôbe.

CLUB LIBRARY.

The following publications have been added through exchange to the Club Library since September, 1920 :—

Bulletin of the American Game Protective Association, Vol. IX, No. 4, Vol. X, No. 1.	New York, 1920–1921
Natural History, Vol. XX, Nos. 3 & 4.	New York, 1920.
Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. X, Nos. 1 & 3.	Boulder, 1920–1921.
Field and Forest Club Leaflet, September —October, November—December, 1920, January—February.	Boston, 1920–1921.
Bulletin of the Geographical Society of Philadelphia, Vol. XVIII, Nos. 3 & 4.	Philadelphia, 1920.
Trail and Timberline, Nos. 24–29.	Denver, 1920–1921.
Mid-Pacific Magazine, Vol. XX, Nos. 4–6, Vol. XXI, Nos. 1–3.	Honolulu, 1920–1921.
Mazama, Vol. VI, No. 1.	Portland, 1920.
Mountaineer Bulletin, Vol. X, Nos. 11–13.	Seattle, 1920.
Mountaineer, Vol. XIII, Nos. 1–3.	Seattle, 1920–1921.
Bird-Lore, Vol. XXII, Nos. 5 & 6, Vol. XXIII, No. 1.	New York, 1920–1921
Alpine Journal, Vol. XXXIII, No. 221	London, 1920.
Ladies' Scottish Climbing Club, 11th and 13th Annual Record.	Edinburgh, 1919 & 1921.
Geographical Journal, Vol. LVI, Nos. 3–6, Vol. LVII, No. 1.	London, 1920–1921.
Scottish Mountaineering Club Journal, Vol. XV, No. 90.	Edinburgh, 1920.
Alpina, Jahrgang 28, Nr. 10 u. 11, Jahrgang 29, Nr. 1.	Zürich, 1920–1921.
La Montagne, 16e Année, No. 142 & 143.	Paris, 1920.
Ditto, Supplément de Novembre.	Paris, 1920.
Anuario de Club Alpino Español.	Madrid, 1920.
Rivista Mensile del Club Alpino Italiano, Vol, XXXIX, Num. 6–7, 8–9–10, 11–12.	Torino, 1920.
Indice della Rivista del C.A.I., Vol. XXXIX.	Torino, 1920.
Revue Alpine, Vol. XXI, No. 3 & 4.	Lyon, 1920.
Écho des Alpes, 56me Année, No. 9–12, 57me Année, No. 1.	Genève, 1920–1921.

Kitadake viewed from the top of Ainotake. Photo. by Mr. N. Takatô.

made a hundred paths of their own seemingly with neither rhyme nor reason. We started down one which seemed promising, but our compasses soon told us that we were wrong—South instead of North West—so we cut across the slope of the mountain hoping to strike the missing path. It was slow work, fallen trees and thick thorn bushes blocked our way at every turn and the only thing was to go through. And when we did find a path in the right direction it was only to lose it again in the bamboo grass. As we got lower down the missed cleared and finally we found ourselves in a valley two miles east of our objective. But the path was now clear and after a short scramble we reached the little hamlet of Inabara, the home of those who had been the unwitting cause of our misfortunes and the first people we had seen since leaving Yanagizawa over four days before.

We were through the mountains from East to West—the first foreigners to do so. The rest of our way was along roads by the side of the Mibugawa, now quite a large river in striking contrast to the stream of the night before. A short pause at Ichinose to allow our men to partake of a well earned meal, the first for ten hours, and then on again to Takatō. This is an old fashioned town with a remarkable road leading out of it, which skirts the top of a cliff some 500 feet high. But eight people and their luggage in a car intended for six rather turned one's thoughts to earthly things, and we were not sorry to reach Ina. From there an electric car took us to Tatsuno on the Central Line, where we found letters awaiting us. Ten hours later we were home.

We had crossed the Southern Alps from East to West, but in the mist. Not one clear view did we get from the ridges the whole trip. But if we had been denied the bigger prospects, we had seen the handiwork of the Creator in rock and plant and even in the daspised fungus; the lure of the mountains still possessed our souls, and when next the opportunity offers we hope once more to make our way along other ridges in the Southern Alps—but not in the mist!

---

opposite direction for some 4½ hours, noting with surprise the traces of our old campi g ground, the spread pine branches and charred logs suggesting that we had camped there but 12 days previously instead of twelve months.

Our guide was uncertain as to the way down and was equally unready this time to follow any suggestions we offered with the aid of map and compasses. Finally he decided that we should make a bee line for our objective in the valley 3000 feet below, the confluence of the Ōyoko and the Mibu. Two hours of the stiffest work followed, now through dense and thorny undergrowth, now down some steep slope of loose stones, now along the rocky bed of a stream. It was dark ere we reached the Ōyoko but fortunately a good sandy spot in the river bed greeted our eyes and there we camped. True the sand had a tendency to mix itself with our bacon or get between our skin and clothing when we lay down, but we were too tired after the experiences of the day to bother about that, and besides we still had the most strenuous day of the trip ahead of us.

As we retired to rest the full moon burst through the clouds and lit up with its silvery beams the water in its rocky bed, while the dark pines stood silhouetted against the starlit sky above giving a scene too beautiful to tell. The guides prophesied a fine night and lit a log fire a few yards away, round which they squatted in their straw cloaks and prepared for their rest, but ere many hours had passed a bolt was made for our tent as the ominous pitter-patter was heard on the flaps above.

We were up and away before dawn next days as we had our final ridge to cross and a long walk the other side if we were to get back to civilisation and home that night. For an hour we followed the course of the Ōyoko, stopping now and then to admire the red and brown and green rocks streaked with quarts, which would grace many a rich man's walls were they not secure in their distant valleys. Close by the meeting of the waters of the Ōyoko and the Mibu we came across the deserted hut of some forester or fisherman, who in byegone days had inhabited that solitary glen. Crossing the river by means of a tree which had most considerately fallen and spanned it just oppsite the place where the path begins we started on our last climb. No carpet in monarch's palace could equal that over which we walked—soft springing moss of every shade of green, clothing in its calm beauty the roots of forest giants, or covering their prostrate forms with silent pall, or else, as Ruskin tells us, 'laying quiet fingers on the trembling stones to teach them rest.' The path was easy and our time-table seemed to be working well when the unexpected happened. On the western slopes wood-cutters had been at work and had

and cleras for a few minutes only to return and mock the optimism which its pranks had kindled. It looked as if we were doomed to spend a day in that spot, but after a longer spell of fine than usual we decided to press on at least to the ridge above which led to the summit. But the rain laughed at our decision and came down with renewed vigour as we started. For nearly two hours we climbed painfully and slowly through long bamboo grass which soaked us to the skin and with its slippery surface sent us sprawling in all directions. And when finally we did emerge triumphant it was only to be greeted by the heaviest downpour we had had yet. But it was the last effort of the malicious sprite of the weather, for afterwards it cleared and visions of distant mountains appeared and vanished in the mists around. A ptarmigan venturing too near our guides met an untimely end and provided a welcome meal. A little nest in the creeping pine made an excellent camping ground and the cold was scarcely noticeable though we were 10,000 feet up. It poured most of the night, but that was a blessing in disguise for the pools of water caught in our canvas covering solved what might have been an awkward problem next day, though here and there in some of the less accessable spots snow was to be seen.

It was still misty and rainy when we started once more. After an hour's scramble along the ridge we at last reached our goal, Kita Dake itself, 10,476 feet above the sea. Others have described the view from the top and so we know what we didn't see! In the little shrine on the summit was a tin containing the names of those who had preceded us. Among them was that of a German and his wife—all honour to the lady who had made so arduous an ascent!

A steep drop of a thousand feet and a similar climb and we were on the top of Ai no Take, 10,463 ft., Japan's third highest peak. As we traversed the ridge the mists cleared momentarily and provided us with the one clean view of the top that we had during the whole trip. But it was only to strengthen us for what lay ahead. A year before we had spent three anxous hours on this peak, lost in thick mist and this time we were scarcely less fortunate. It was bitterly cold and terribly wet; our carriers were shaking like aspen leaves and we were not much better as we huddled together in the slight shelter of a rock and tried to eat our lunch. We almost feared we were to be called upon to repeat our previous performance as our guide was uncertain as to the direction, but our compasses and a memory sharpened by cold stood us in good stead and an hour later we were on Mitsu Mine—the Threefold ridge—which marks the meeting point of three of the most important ridges of the Southern Alps.

We followed our path or the previous year though in an

The mountain mists were around us next morning when we continued our climb towards the summit of the ridge we had seen from our inn the day before. The Southern Alps at the point at which we were crossing them consists of three main ridges each of which means a long climb from the valley below. The pass by which the first is crossed is known as the Onashi (no tail) Pass to distinguish it from the route to the north which lies along a long gradually ascending ridge in contrast to the steep face up which we climbed. The fungi on this particular path were of special interest in their rich variety; some were like yellow coral, others lily-shaped, others were like sponges and one, which exudes a white juice and goes by the name of 'chi-no-take' (blood mushroom) is said to be edible. Altogether we saw some twenty different varieties.

From the summit our view of the next ridge was almost completely hidden by the trees which crown it, though the lower flanks of the mountain beyond could now and then be seen through the branches. A very steep drop of some 2500 feet found us on the banks of the Norogawa, which though only some 15 miles long at the point we reached was yet a stream of no small magnitude. It carries away all the waters of Kita Dake, the highest peak of the range and in time of flood must be terrible indeed. A small deserted fisher hut stood in the valley in which our guide found tackle to enable him to try his luck with the river trout. But the weather was against him; it was too fine. Would that it had been so the rest of the trip. It was hard to leave this exquisite valley, but we had to reach the Okamba Lake, far up the slopes of Kita Dake ere nightfall, and so about 2.0 p.m. we continued our climb. At first our way was along the bed of the main stream, which we forded; then we turned up one of the steep short torrents, which empties into it and then finally we left it and zigzaged up the face of the mountain itself. After a climb of some 2000 feet we reached what once was the woodslide of the foresters, a bed of logs bound together in a rough 'u' shape, down which timber was slid to the valley below. On the way we passed the shrine alluded to by Mr. Weston in his last book, but now only a pile of rotting timber. The steepness of the mountain side made it almost impossible to believe in the existence of any lake, but sure enough as dusk fell we found ourselves on its shore. Lake!—a small pond some 100 feet across with uncouth banks and muddy water. We pitched our tent beneath some trees a hundred yards to the north and there in the loneliness of that mountain forest with the flames making eerie shadows among the silent pines, we let our imaginations run riot and thanked God that He had bade us climb.

It was raining next day when we awoke—the rain which stops

right and suddenly we found ourselves out of the brilliant sunshine in deep shade—we were standing under the branches of an enormous vine, heavy—with grapes. The owner gave us a kindly welcome and ere we left we had laid in a goodly supply of the fruit and had ordered more to be sent our folk in their homes in the hills.

It was a quaint inn that awaited us, containing below the one shop of the village and up-stairs two small and somewhat odoriferous guest rooms. We will not speak of the permanent residents of the room—some of them accompanied us many days into the Alps.

Early next morning our carriers appeared, a set of typical representatives of the country parts of Japan, short, thick-set and hard as nails. One we could not resist calling 'Caliban,' though later events proved that his looks belied him. But we had been astir even earlier than they, for long ere the sun rose we had drawn aside our 'shoji' to see if we could see anything of the mountains and so foretell the weather. There far above us stood the sacred peak of Koma. As we watched, the first rays of the dawn caught its highest crags and touched them with gold, but lest their glory should enthrall us, the gentle mists wrapped them round and a scene of indescribable grandeur passed away.

We left shortly before seven. Our way for the first two hours was one of gradual ascent through groves of pine and along the bank of a rocky stream the Ōmugawa. Presently in front of us were seen the buildinings of one of those hot springs which are to be found in their thousands all over this land, but our guides told us that but few people ever found there way thither. Our way lay to the right and soon we passed through a narrow valley gateway into the mountains and our climb had begun. All that day we followed the river, now scrambling over the rocks in its bed, now seeking a precarious foothold on its steep and wooded banks, now pausing to admire the industry of a small body of Japanese workmen as they constructed an elaborate system of dams to preserve the ever crumbling slopes, or again lost in wonder before some majestic waterfall, the handiwork of a Creator prodigal in His works of beauty. One in particular comes to my mind as I write, the Hyonguri Fall of the 'long-red-rock,' where the stream has cloven its way through a mighty barrier to find its freedom in a sheer drop of some seventy feet into a deep pool below. The wear of the centuries has formed the vertical rock into a sort of chimney, which half hides the water in its cold embrace.

As dusk fell we reached our camping ground—an overhanging rock in the bed of a stream, a tributary of the one we had been following most of the time hitherto. With pine logs for our fire and pine branches for our bed we were soon asleep, unmindful of the never-ending roar of the stream in front.

THE MOUNTAINS OF THE MIST.

AN ACCOUNT OF A TRIP ACROSS THE SOUTHERN ALPS OF JAPAN.

By

REV. W. H. M. WALTON. Japanese Alpine Club.

In the centre of Japan at the highest point of the Central Line, the construction of which has placed Japanese engineers in the foremost rank, there stands the little railway station which is known by the name of Fujimi—'seeing Fuji.' Away fifty miles in front stands out that peerless peak which gives the station its name. Below in front and rear lie the countless homes and factories which go to make the district one of the greatest silk producing centres of the world.

One August morning in 1920 a small party of four, Elwin of the C. M. S. Chinese Mission in Tokyo, Grant of the Okura Commercial school, Seizo, perhaps the greatest rock-climber in Japan today, and the writer, stood on the country platform waiting for the up train to put in an appearance. But it was not the fact that we were standing on the highest station in Japan not the thought of the busy centre of industry through which we had passed, not even the majestic slopes of Fuji that were filling our imagination. For away to the right rising from the very foothills beneath us there came into view a mighty range the Southern Alps of Japan containing the two highest peaks in the land after Fuji itself.

A year before a climb along the ridges of Kōshū Shirane, as the central section is named, had left the call ringing in our ears; indeed even while descending its slopes we had planned the trip which explained our presence at Fujimi this summer afternoon.

Another hour on the train and we got out at Hinoharu, a small village on the slopes of Yatsugatake. A hasty counting of our few packages, a bow and one or two polite words to our guide and his son, who had come to meet us, and we left the station en route for the small village of Yanagizawa, where final plans were to be made, carriers engaged, and all those hundred and one matters contingent on an Alpine trip attended to. A quarter of a mile or so before we reached the village our guide bade us stop to the

NIPPON SANGAKU KWAI.

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6, Kôjimachi-ku, Tôkyô.
Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô.

List of the Officers (Honorary).
Elected Nov. 26th, 1919.

General Secretary.

N. Takatô, Esq.

Recording Secretary.

S. Nakamura, Esq.

Treasurer.

Prof. C. Umezawa.

Librarian.

T. Takano, Esq.

Editors.

R. Kogure, Esq. Dr. H. Takeda. Prof. J. Tanabe.

Council.

Hon. K. Jô.	M. Saigusa, Esq.	Dr. M. Tsujimoto.
R. Kogure, Esq.	T. Takano, Esq.	I. Tsujimura, Esq.
K. Kojima, Esq.	N. Takatô, Esq.	Prof. C. Umezawa.
S. Kondô, Esq.	Dr. H. Takeda.	S. Yamakawa, Esq.
S. Nakamura, Esq.	Prof. J. Tanabe.	

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Any ordinary member, on payment of the amount not less than 100 yen at a time, shall be exempted thereafter from the annual subscription, so long as he remains enrolled as a member.

Members are required, on their admission into the Club, to pay 5 yen as entrance fee. They ought to pay an annual subscription of 3 yen by the end of February. Members who fails to do so must pay an additional sum of 50 sen as special charge. Any member who does not pay his dues even in this way by the end of March is to be expelled. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries equiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vol. XV | April 1921 | No. 3

(English Supplement)

PLATE

FACING PAGE

KITADAKE VIEWED FROM THE TOP OF AINOTAKE . . . 4

CONTENTS

PAGE

THE MOUNTAINS OF THE MIST.—REV. W. H. M. WALTON . 1

CLUB LIBRARY 7

THE ELEVENTH ORDINARY MEETING 8

THE TWELFTH ORDINARY MEETING 8

NEW MEMBERS 8

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL 9

THE PLATES IN THE JAPANESE PART 9

ANNUAL MEETING FOR 1921 9

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XV 1921 No. 3